COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

十字架の少女

若木未生



集英社

春休み、亮介たちは軽井沢にある忍の別荘で合宿することになった。メンバーは亮介、諒、亜衣、冴子、そして諒の妹・彩――彼女は過去の悲惨な事件の後遺症で、かたくなに心を閉ざす少女だった。彩をめぐって、四人の思いがそれぞれ複雑に交錯する。そんなある日、彼らの前に、「牙」という名前の他は一切の記憶をなくした謎の男が現われて……。待望のハイスクール・オーラバスター第3弾！

恋を夢みる乙女のための小説誌！

[コバルト] Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

十字架の少女

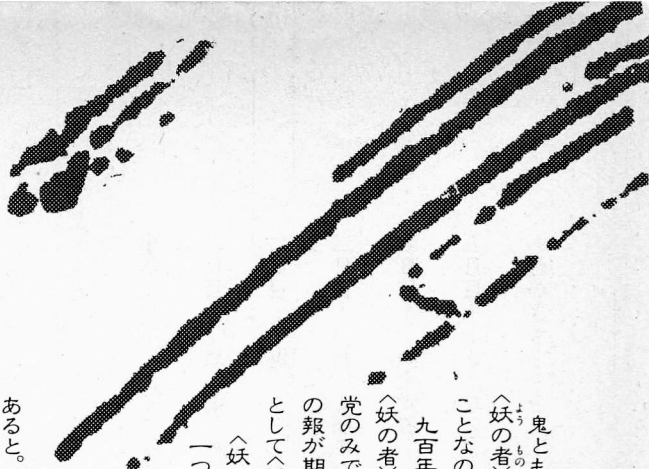
若木未生

集英社

目次

十字架の少女

事前工作——かくて陰謀の幕は開かれる……10
一日目——嵐の前の掃除合戦……38
二日目——傷……63
三日目——とても簡単な、たったひとつの真実……103
四日目——戦士覚醒……165
五日目——さよなら、またね……240
あとがき……246



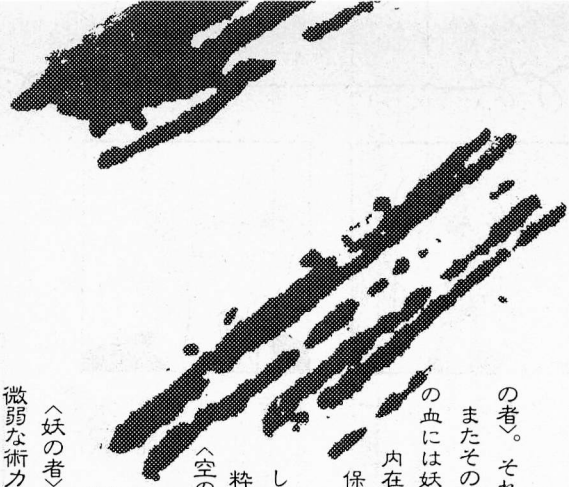
鬼とも妖怪とも呼ばれ伝説に語られてきた人外の存在――〈妖の者〉が目立って活動するようになったのは、ここ十数年のことなのだという。

九百年の昔に彼らの天敵たる〈空の者〉との大戦に敗れて以来、〈妖の者〉の多くはなりをひそめ、世に出るのはごくわずかな残党のみであった。しかし現代に至り、妖者総帥「九那妃」復活の報が期待と確信をもって彼らのうちに流布され、それを刺激として〈妖の者〉は勢力を回復しつつあるのだ。

〈妖の者〉の形態は千差万別だが、共通する点が二つある。一つは、本体が精神体であるということ。いま一つは、人を喰らうということ。彼らの多くは人間の身体にとり憑き、人の社会にまぎれてひっそりと生息する。

そして古より隠密裏に伝承された真理。人を喰らうのが〈妖〉であるならば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

選ばれた血統の、選ばれた赤子の内にかぎり転生を為す〈空



の者〉。それは神の降臨とさえ呼ばれる奇跡である。

またその血統を保ちつづけた一族を、斎伽の一族と呼ぶ。その血には妖者の「妖力」に対抗する超常能力「術力」の因子が内在し、一族の者は空者とはならずとも何らかの能力を保持した者、すなわち「術者」として空者に仕えていたと伝えられる。

しかし〈妖の者〉との大戦の後、一族の血は分かれ、純粋な血統はほぼ絶えたと言って良い。数百年にわたり〈空の者〉の降臨はなされず、術者の数は激減した。

そのような現代に、ただ一人転生した〈空の者〉がいる。空者総帥「伽羅王」、またの名を斎伽忍。弱冠十九歳にして一族の長を務める若者である。

〈妖の者〉の動きが活発になる一方、〈空の者〉に比べれば甚だ微弱な術力しか有さぬ術者数人が手中にあるのみという現状に、彼が何を思うか——うかがい知ることは、いかなる者にも許されなかった……

登場人物紹介



水沢涼

戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ(?)の〈術者〉。だが妹の「状態」は、彼の心に暗い影を落としていて……。



七瀬冴子

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。涼とはよく衝突するが、誰より気遣ってもいる。



崎谷亮介

涼の親友。内向的な性格だが、最近底知れぬ〈術力〉にめざめたばかり。力を制御できないのが難点だが……。



神原亜衣

亮介の同級生で、かつ微妙な関係。〈術者〉ではないが事情に通じ、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。



水沢彩

諒の妹。2年前の事件で諒以外の家族を失い、以後心を閉ざすように。なぜか牙にはなついていくが……。



牙

名前以外は記憶を失っている謎の男。軽井沢の山中で諒たちに拾われる。〈妖の者〉ではないようだが……。



斎伽忍

〈術者〉一族の若き総帥で、ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の全貌を把握しているのは彼だけらしい…。

イラスト／杜　真琴

十字架の少女

事前工作——かくて陰謀の幕は開かれる

I

こんこん、と窓が鳴った。

時刻は十一時四十五分。深夜である。

おやおや、と思いながら亮介はスケッチブックを閉じた。昼間会ったばかりなのに、どうしたというのだろう。

ふりかえると、窓の向こうはそのまま沈黙している。

「？」

亮介は眉をひそめた。机を離れ、窓際まで歩みよる。そっと東向きの窓を引き開けた。

「どうしたんだよ」

「——どうも」

少しはにかむような声が返った。

長身の人影。部屋から漏れる明かりをわずかに受けて、片腕一本で窓枠をつかみ、壁に足を

かけてその身を支えている。言うまでもないが、この部屋は二階にある……。
いつもなら強引に、それこそ遠慮会釈なく上がりこんでくるのだが。
「入りたくない、とか？」
念を押して訊いてみる。
「いやはや……」
返答にならないことをぶつぶつと呟きながら、水沢諒は体を引きあげた。常人離れした身軽さで窓枠をのりこえる。
同い年のくせに亮介より優に頭ひとつ大きい。しかしその長身を意識させぬほどに、人なつっこくて子供っぽい態度と言動。決して二枚目の部類に入るわけではないのに、妙に見る者の心を惹きつける容姿と表情。強気と能天気を身上として不撓不屈を座右の銘とするような、まっすぐすぎる性格。
けれど――。
「ポカリもらっていい？」
亮介専用の冷蔵庫を勝手に漁って、諒が尋ねる。
「いいけど……」
窓を閉めながら、亮介はあいまいに答えた。
今は三月末――学校は春休みである。春からは亮介も高校二年だ。諒と出会ったのは高一の

秋だったのだと思うと、なにか変な気がする。そんなに昔のことだったろうか。

再会を果たしたのは、ほんの一週間ほど前の夜。

事件はなんとか片がつき、諒も現在は自由の身である。しばらくは休んでもかまわない、と「雇用主」の斎伽忍本人が保証したのだから、まず間違いはないだろう。珍しいこともあるものだ。

（ま、要するに世の中が平和ってことだよな……）

とりあえず世間は平穏で、諒も東京に留まることができるわけだし、この現状は喜ばしいことなのだろう、と亮介は思う。今この自由を楽しんでおかなきゃ次の機会がいつ降ってくるかわからんでしょっ、と力説して諒もいいように遊びあるいている。今日もふたりで東京タワーまで足を運んできたばかりだ。

……なのに。

「お邪魔でしたか」

机のスケッチブックに目をとめて諒が言う。

「なに言ってんだよ」

亮介は顔をしかめた。床に座りこんだ諒の前に、自分も腰をおろす。

「なら、いいんだけどさ」

笑みを浮かべて諒は呟くけれど。

それはいっそ他人行儀だ。こんな風に気をつかわれるのは困る。亮介は対応に迷った。
諒は斜めに視線を落とし、缶をもてあそんでいる。言葉が続かない……。
（らしくない……）
何かを用心しているのか。
亮介は何か言おうとして、結局口をつぐんだ。適当な文句が出てこない。どうしていつもこうなのだろう。肝心な時に何も言えない。
しかしこのままでは。
「あのさ……」
無理やりに切りだした。諒がふっと目を上げた。
「あ、えっと――腹減ってないか？」
目が合ってしまったら、言おうと思ったこともあっけなく吹っ飛んだ。全然関係ないことを口走っている。
こちらを向いた瞳が、あまりに無防備で。
まっすぐなのに、どこか途方に暮れたような色で。
「せんべいとかポテトとかあるけどっ……あ、なんだったら俺ラーメン作るけど」
焦りまくった言葉ではフォローにならない。舌がもつれて亮介は台詞を切った。もしかして自分は今泥沼にはまりつつあるのではないか。

きょとんとして諒は亮介を眺めている。
「だからあの……っ」
慌てて言いかけて亮介は喉をつまらせた。いきなり息がひっかかってしまって、咳の発作に襲われる。
ごほごほと咳こむ亮介をしばし呆然と見つめ、それから一瞬の間をおいて、くくくくく、と諒が笑った。
「あのねえ……」
言葉を噛みころし、くすくすとしつこく笑う。背中を丸めて、床にうずくまる。
呼吸をなんとか整えようとしながら亮介は恨めしげな目を上げた。そんなに笑われるようなことをしただろうか。諒はころがりまわっている。
「いやあ、かわいいなあ亮介君って」
「なっ……なんなんだっ」
「いやその、俺が悪かった。申し訳ない」
憮然とする亮介に手を振ってみせて諒が言う。それでもなかなか笑いをおさめきれずにいるあたりが失礼だ。
「別に、謝ることないけどさ」
表向きはむっとしながら亮介はぼそっと答えた。

「いや、勝手に考えごとしちゃったんで。悪かった、本当」
よいしょ、と座りなおして諒は真顔に戻ろうとしている。かろうじていつもどおりの雰囲気になってきた。
とはいえ、諒がこんな風に謝ること自体、いやそもそも亮介の前で言葉もなく考えこんでしまうこと自体が異常なのだ。こんなことははじめてのような気がする。
「……そんなに大変なことじゃないって」
諒の笑みが苦笑に変わった。
よほど心配そうな顔をしてしまっていたらしい。はたと亮介は口許を押さえた。思わず目をそらしてみたりする。
「べ、別にっ……言いたくないことだったら……」
もごもごと言ったら、ぽんと頭に手が置かれた。
「だからさあ、考えすぎだってば。本当。ちょっとあんまし突然決まっちゃったことがあってね、それでびっくりしとったわけです」
本当にそうだろうか。
亮介はそろりと目を上げた。諒の瞳に深い光。くしゃと髪を撫でてその手が離れる。
「……仕事か？」
「いや、はずれ」

「え？」

仕事で東京を離れねばならないのかと思った。違うとなったらいよいよわからない。

「家庭の事情」

ぽつり、と諒が言った。

「――」

それが実感を持つまで、わずかに時間を要した。亮介は目を瞠った。諒の家族というと確か。

「広島……？　戻るのか？」

「うーん、どうしようかと思ってねー……」

頬杖をつきながら諒が呟く。

「要するに場所は広島じゃなくていいんだな。とにかく俺の身柄があいてればいいわけで」

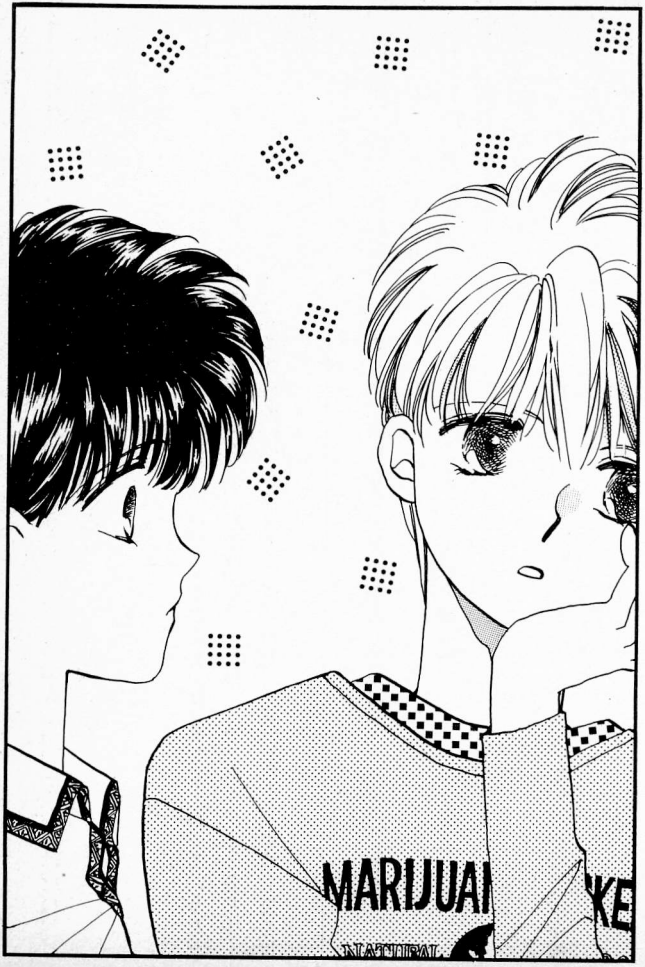
「？」

話が見えない。ぽかんとしている亮介を見やって、諒はにっと笑ってみせた。

「だからね……ついさっき、婆ちゃんから電話があったわけですよ。で、それによるとですね、なんかうちの爺ちゃんが病院入りしなきゃならないらしいんだな、これが。五日間ほど」

「病院って!?」

「あ、いや、急な事態じゃなくてね。倒れたとかいうんじゃないんだけどね。前から心臓の強


MARIJUAI
KE
NATURAL

くない人だし、いいかげん歳だし。検査入院ということで。……そうするとその間はだね、どうしても俺がその……俺の、妹さんをさ、預からなきゃならんというわけだ」

「……ああ……」

亮介は頷いた。淡々と諒が続ける。

「結局婆ちゃんは病院行きっぱなしになるし、そうすると誰もその妹さん——彩っていうんだけどね、まあこいつの、面倒を見る奴がおらんのだな。ちょっとやっぱりなんか……婆ちゃんとしては、そのへんの知り合いとかにあいつを任せるのは避けたいみたいだし。どうしても世間体というものがあるので」

「え、なんで」

世間体、という単語が引っかかった。何も考えず訊きかえしてから。

——しまった、と亮介は思いついた。

やわらかい笑みを残したまま、諒は困ったように両眼を細めた。

「……まあ、そういうことです」

漠然と伝わるものがある。

「言ってしまえばその、ちょっと『普通』じゃないので。例の、ショックというやつで。学校にも行ってないみたいで」

「……そっか……」

それはあの——過去の一件に起因することなのか。

諒の沈黙は決して重苦しいものにならない。だからなおさら、心に痛かった。

失われた諒の家族の、ただひとりの生き残り。彼女について諒はなにも語らなかったし亮介もわざと何も問わずにいた。それはそのまま過去の諒の罪を問うことになるから。何歳なのかとか何をしているのかとか、そんなことは、少なくとも今の自分と諒の間に意味を持ちはしないのだし。

何も問わない、つもりだったのに。

「こらこら。暗いっ。暗いぞ亮介っ」

こつん、と諒の指が額をこづいた。

「くじけたらいかんっ。空に輝く星を見ろっ。遠く輝くあの星を、青春の星をふたりでつかむのだっ」

「あのね……」

「青春は思いこんだら試練の道だっ。青春は男のど根性だっ。おおっ、姉さんも木のかげから見ているぞ飛雄馬っ」

「はいはい」

まったく、どこからこのノリが出てくるのだろうか。亮介は肩をすくめてみせた。

「少し芸風が変わったよね、おまえ」

「あ、そう？　いやあ、日々精進を重ねてますからね僕は」
「日々ネタが古くなっていくという気がするんですが」
「ううっ。そ、そうかしら」
他愛ないやりとり。それでいいと思う。諒が笑えるなら。
「……うん、やっぱこっちに連れてくることにするわ」
言葉の切れ目に、諒があっさりと言った。
「そっか」
「うん、忍に適当な部屋用意してもらって……つってもなあ、急な話だから忍がＯＫ出すかはわからんけどなー。そしたらホテル暮らしだな」
「え、今の部屋は？」
「だっておまえさん、ワンルームだよ俺の部屋。五日間ひとつの部屋で顔つきあわせるのはまずいでしょう」
諒は片目をしかめてみせる。冗談めかして言うわりには少し……。
「俺、一緒にいようか？」
唐突に亮介が身をのりだした。不意をつかれて諒が顔を上げる。
「どうせ休みなんだから、暇だし。なんか手伝えるかもしれないし」
あんまり考えないうちに口を開いていた。けっこう脈絡がなかったな、と亮介は言いなが

ら気づいた。なんだかひとりで放っておくわけにいかない気がして、衝動的に。
「あ、いや、もちろんっ……迷惑だったらやめとくけど」
諒が返答につまってしまった。亮介は慌てて口ごもった。
え、と思った。
眼を伏せて諒がそっと見せたのは、ひどく微妙な表情。見たこともない繊細な、泣きたくなるほど本当の。
「迷惑なんかじゃない。そんなことない……」
きっと本心からの微笑。
「……嬉しいよ」
ためいきのように静かに呟いた、それが諒の答えだった。

Ⅱ

「個人的にちょっと怒ってるのよね、あたし。だから気にしないでね亮介ちゃん」

五分遅れで現れた冴子の、第一声がそれだった。

「……はあ」

亮介としては答えようがない。

駅前の喫茶店。家に電話がかかってきたのは三十分前のことである。とにかく話したいから出てきて、という凄まじく強引な呼び出しにとるものもとりあえずやってきたものの、肝心な用件については何も聞いていない。勢いに押されてしまった。

アイスコーヒーをオーダーすると、冴子はテーブルの上に指を組んだ。

ゆるく編んだウェーブの髪に、黒い帽子。全体をシックにまとめた服装で、これがひどく新鮮だった。冴子というとセーラー服のイメージがあるせいかもしれない。こうして間近に相対すると、あらためてその才貌に感嘆せざるをえない。

きれいに背筋をのばした姿勢が似合う。おとなびて、激しくて、情熱的。火焔の如く。鋭いのに、冷たい印象は与えない。考えてみたら不思議な美少女だった。亮介はその名前しか、実は知らない。そういえば年齢も、いや名字すら聞いていない。

「だいたい失礼よねっ。そう思わない？」

どん、と冴子がテーブルを叩いた。

「……どうしたの？」

亮介は半ば逃げながら尋ねる。

「どうしたもこうしたも――あたしが勝手に怒ってるだけよっ」

「はあ……」

ヒステリーだろうか。

ふう、と小さく息をついて、冴子は運ばれてきたグラスを引きよせた。ストローの袋を破る。

「……愚痴っても仕方ないわね。亮介ちゃんの顔を見たら、ついつい怒ってしまったわ」

「えっ!?」

「別に亮介ちゃんのことを怒ってやしないわよっ！　なにもそこで思いきりびびることないでしょ!?」

「ご、ごめんなさい」

見事に表情を読まれていた。これはやはりヒステリーらしい。亮介は頭をさげながら、我が身の無事をひそかに祈ってしまった。

からからと冴子が氷をかきまぜた。

「彩ちゃんが上京するって、聞いてた？　亮介ちゃん」

抑えた口調で、静かに切りだす。

「ああ……うん、昨夜……」

「ついさっき、忍様から聞いたのよね、あたしは」

「へえ……」

ばん、と再び冴子がテーブルを叩いた。ぎょっとして亮介は身をすくめた。

「亮介ちゃんと忍様には言っといてあたしにはひと言もなしってどういうわけ!?　普通、女の子は女の子同士でとか、そういう発想って出てくるもんでしょ!?　違う!?」

うわ、と亮介は呟いた。そういうことだったか。

「あの、だからそれは盲点というやつで……」

「盲点になった時点で失礼なのよっ」

ばんばん、とテーブルを叩く音が連続技になった。店内の視線が集まりはじめる。ただでさえ人目を引くのに。

「自分ひとりで面倒見られると思ってるあたりが甘いのよね、そもそも。彩ちゃんだっていい

かげん小さな子供でもないんだから。それくらい真っ先に考えてこっちに頭下げてくるのが筋だと思うのよ、あたしは」

「……彩ちゃんって、いくつ？」

冴子の理屈も今ひとつわからない。ふと引っかかって、亮介は訊きかえしてみた。

「確かふたつ下だから、十四ね」

「えっ……そんなに大きいんだ」

「男どもの中に放り出すわけにはいかないわよ、やっぱり」

ちら、と上目遣いに冴子が睨みつける。う、と亮介はつまった。確かによく考えると……中学生の女の子とひとつ屋根の下というのは……。

「それは本当に……俺なんかじゃわかんないこととかあるだろうし……冴子ちゃんのほうがいいんじゃないかと……」

ぼそぼそと呟く。冴子がいらいらと指を動かした。

「亮介ちゃんはしっかり話が通じるのよねー……。問題はあのバカなのよね」

「うーん……」

「やっぱり強行手段かしら、これは」

なにやら空気が不穏である。

「……なんでそんなに怒ってるわけ？」

なんとなくわかるような気はしたが、亮介はあえてそう訊いてみた。
案の定、やたら不機嫌な表情で冴子が言葉を切った。むっとして目を上げる。
「――仁義、というやつよ」
「仁義？」
「仮にもね、仕事仲間なんだから、それくらい聞く権利はあるわよ」
「そうなの？」
ばしゃんっ、とテーブルが平手打ちを受けた。
「なによっ。信じてないわねっ。いつからそんなにかわいくなくなったのよっ」
「そんなこと言ってないでしょ」
「顔に書いてあるわよっ。それくらい自覚しなさいよね、まったくもうっ」
「……ごめんなさい」
下手なことは言わないほうがよさそうだ。亮介は素直に謝ることにした。
謝られてしまうと、冴子もさすがに口をつぐんだ。気を落ち着かせるように椅子の背にもたれかかる。しばしの沈黙。
亮介はティーカップに手をのばした。
（やれやれ……）
……要するに冴子にも、ままならぬことというのがあるのだろう、と思う。

いかなる不可能も可能へと転じかねない強さは、そのまま彼女の魅力でもあるのだが。

（仕事仲間、ねえ……）

諒ほどのペースで年がら年中全国を渡り歩いているわけではないらしいが、忍の指示で動いているという意味では確かに冴子も同じだ。〈妖の者〉が絡んだトラブルを解決に導く。時々は諒のアシストをすることもあるのだという。

そんな話を聞くにつけ、ますます冴子の正体はわからなくなってくる。なんのために、誰のために、まともな学生生活を捨て去ってまでそんな仕事に関わっているのか。

諒のこともかなり知っているようで、それでいて彼女にとって諒がどんな意味を持っているのかは、まだ……よくわからない。

想像は想像でしかないから。

「……そうね、これはやっぱり……ちょっと忍様に頼ってみようと思うわ」

ぽつりと冴子が言った。亮介は目を上げた。

「忍さんに？」

「つまりね、あたしたちが彩ちゃんと一緒にいて然るべき状況、というやつを設定してもらえばいいのよ。どうせ今の諒の部屋は街なかにあるから彩ちゃんを呼ぶには不向きなのよね。ワンルームだし。だからどこか人里離れたところの、とにかく不便な家しか用意できなかったことにすれば、おのずと人手が必要になるでしょ。その人手があたし」

「周到だなー」

亮介は感心してしまった。いつもこの調子で手を打っているのだろうか。

「だってそうでもしなきゃこっちの言うこと聞くわけないじゃない……あのバカ」

冴子は遠い目をして低くつぶやくと、思いなおしたようにストローに指をのばす。その大きな瞳が亮介を向いた。

「わかってるだろうけど、亮介ちゃん、他言無用だからね」

「はあ……」

なにも隠すことはないのに、と思いつつ亮介は仕方なく頷く。

氷の鳴る音。

窓の向こうに冴子が視線を転じた。駅前の光景。行きかう人々。

亮介は黙ってその横顔を見上げた。

「本当は、余計なお世話だって知ってるのよ」

しばしの間をおいて、唇がそう動いた。

すきとおって、静かに。

その双眸が微かに揺らぐ。——綺麗だった。

「でも、放っといたら煮つまるだけなんだから」

苦笑するような口調で、言葉を続ける。肩をすくめて亮介を見返った。

「ほんっとに……馬鹿よね」
「うん……」
亮介は頷くことしかできない。
頷きながら、ふと思っていた。もしかすると冴子の内面には、何か大きな枷があるのではないか。気のせいだろうか。
なにか……思うままに心を動かすことを、その一点に限って禁じられているような。
（考えすぎ、かな）
根拠もなにもない。探りすぎるのも失礼だ。
「ちょっと！　そこで黙りこまないでよ」
「あ。ごめんなさい」
「亮介ちゃん……その『ごめんなさい』って癖になってない？」
テーブルに頬杖をついて、呆れたように冴子が言う。
「う……そうかもしんない」
「別にいじめてやしないんだから、勝手に怖がらないでよね」
「は、はあ……」
確かに、女の子相手にいつまでも受け身のままでは困りものだ。亮介は深々とため息をついて前髪をかきあげた。

それを見やり、冴子がふっと淡い微笑を浮かべた。
「なんにしても、亮介ちゃんがいてくれて本当によかったわよ」
「え？」
「亮介ちゃんって便利な存在なのよね。大好き」
「あのね――」
亮介は情けない声を出した。便利、というのはなんなのだろう。あまり嬉しくない形容のような気がする。男として。
くすくすと冴子が笑う。……面白がられているかもしれない。
これは反撃に出ねばなるまい。
「あのさ……冴子ちゃんって、いくつ？」
おもむろに思いきって、亮介は顔を上げた。この際、前後のつながりは置き忘れることにする。きょとん、として冴子が見返す。
「やだ、何……知らなかった？」
「うん」
「同じだってば。十六。亮介ちゃんとそんなに変わらないんじゃない？　一月生まれだから」
あっさりと答えられてしまった。秘密でもなんでもないらしい。
「えと、じゃ……フルネーム聞いてもいい？」

「――」

今度は、冴子がやや返答につまった。そうねえ、と呟く。

「一応、表向きは、七瀬冴子という名前があるけど」

「……何それ」

「ふっふっふ」

笑ってごまかす手に出られたか。

「ああ、でもね、親兄弟健在です、あたしは。だからあんまり家のことは気にしないで」

「へえ……？」

聞いたら聞いたで、かえってよくわからなくなってきた。亮介は首をかしげた。うまくはぐらかされているような気がする。

「じゃあ、どうして忍さんの側にいるわけ？」

「それはもちろん」

亮介の問いを予測していたように、冴子がにっこりと笑った。

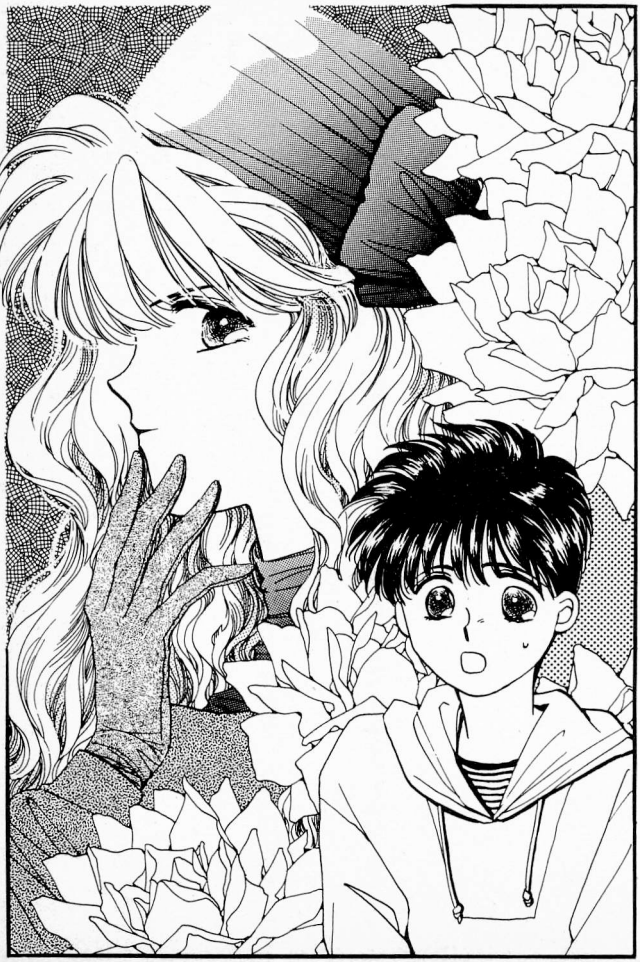
「忍様が大好きだからよ。決まってるでしょ」

「――ちょっと、それって……」

これはひょっとすると問題発言だ。

気にする様子もなく、冴子はストローをもてあそんでいる。

「……とにかく、忍様の役に立ちたかっただけよ」
ぽつりと冴子がそうつけ加えた。
「ふうん」
これ以上はどうも踏み込めそうにない。亮介は追及を諦めた。
諒がいなくてよかった、かもしれない……。
(いや、そう考えるのにもまた問題が……うーん……)
「ねえ亮介ちゃん」
がらりと冴子の口調が変わった。ずい、と身をのりだす。
「せっかくだから彩ちゃんが来てる五日間、本腰入れて合宿やるわよ」
「え？　あ、うん」
「合宿というからには頭数が必要よね。そこで命令。亮介ちゃんの責任でもって、亜衣ちゃん誘ってちょうだいね。よろしく」
「――え!?」
いきなりの展開に亮介はぽかんと口を開けた。
はたと我に返ってテーブルのへりをつかむ。
「ちょっと、あの、なんで……」
「あら、だって他に女の子って思いつかないじゃない。女手があたしだけじゃ辛いもの。それ



に人数少ないと飽きるのよね、こういうのって」

しれっとした答えが返ってくる。亮介は言葉を失った。

「どうせなら楽しくやりましょーよ。――それとも何？　まさかあたしの言うこと聞けないとか……まさかねええ」

「あ、あ、あのねえ」

「素直が一番よ、亮介ちゃん。ふっふっふ」

満面に笑みをたたえて、冴子は正面から亮介を見据える。……ただならぬ気迫が伝わってくる。

（……こ、こういう報復があるとは……）

不覚である。がっくしと亮介は肩を落とした。これはえらいことになってしまった……。

Ⅲ

「……ああ、確かに、冴子の言うとおりだよ。間違いない」

テノールの声。

「……別にそんなことは考えていないよ。信用がないんだな」

しんと空気の静まった部屋を、穏やかな言葉が渡ってゆく。かすかに笑みを含んで、けれど本質はまるで見せぬままで、淡々と響く。

非の打ちどころもなく整えられた洋風の居間。生活感というものが完全に削ぎ落とされた空間。半ばまで上げられたブラインド。冷ややかに広がるフローリングの床。

「都心では刺激が強すぎる。それについて異議はないだろう。さらに言えば、この土地には吸引力があるからね、いつ考えなしの妖者が近づいてくるかわからないということもあるんだよ。特におまえたちは先日の件で少し目立ちすぎたばかりだ。彼女を巻き込むようなことは避けるべきだな。違うか？　……そういうことだ」

夕闇の薄い光線が射しこむだけで、照明はない。

彼がただひとり、影を落としながらソファにかけている。脚を組んだ姿勢。受話器を持つ白い指。

「いい場所を選んだつもりだよ。……そんなことはないよ、もちろん。これくらいの手配はこちらに任せてくれると嬉しいな。詳しいことは改めて冴子から伝えさせる。……まあ、頑張ることだな」

他人事だと思って、と電話の相手が――水沢涼が――ぼやいている。彼の横顔が苦笑に似た表情を宿す。

「同情は惜しまないつもりだが」

薄紫から群青へと染め変えられてゆく光線。その内で、彼の瞳が時折強くきらめく。闇を裂く。

ふ、とその瞳を一瞬伏せて、彼はソファの背から身を起こした。

「……ああ、わかった。――彼女にはよろしく伝えてくれ」

最後のひと言だけ、微妙にその語調が改められた。受話器をおろすと、斎伽忍はつと立ち上がった。

窓際に足を運び、ブラインドを上げる。都会の海を覆いつくす乾いた光。夜景。

月光――。

白々と冴える月を仰ぎ、忍はただ黙して立った。
冷艶たるその容貌は果てもなく清らかに澄みとおり、さらに一切の他者を遮絶した厳しさを湛え、それが現世に存在することを疑わずにおれぬほど貴く崇く、それでいて確かに自然な生気をそなえる。
人ではない。
人に生まれながら人に非ず、されど生身の姿をとどめて現に在る。ただひとり降臨を果たした〈空の者〉。若き神の化身。
その胸中を知る者はない。そしてその呟きを聞く者も。
——出会えるだろうか、と。
出会えるだろうか。近づいて、いるだろうか。
待つことしか許されぬのなら、そうするまでのこと。それもまた報いであろう。
無言の祈り。
銀光を浴びて、暫くのあいだ彼はそこに佇んでいた。
やがて、ブラインドが引きおろされた。窓辺から長身の影が消えた。

一日目——嵐の前の掃除合戦

I

せっかくの休みなのだから小旅行もいいだろう、という名目で忍が手配してくれたのは、なんと軽井沢にある別宅であった。

詳しいことは知らないが、どうも彼は呆れるほどの大金持ちらしい。そもそも斎伽の「本家」というのは何をやっている家なのだろう。想像もつかない。

「崎谷君、お弁当、サンドイッチでかまわない？」

「あ、うん」

「よかった。嫌いじゃなくて」

上野駅のホームに降りたところで、亜衣がほっとしたような笑顔を向けた。亮介はたと目を瞠った。

「えっ……作ってきてくれたの？」

「だって、二時間くらいかかるんでしょ？　ちょうどお昼時だと思ったし」

「あ、そうか……嬉しいな……」
彼女の手料理だと思うとこれは本気で嬉しい。思わず呟いたら、亜衣の笑みがさらに眩しいものになった。——どきっとした。
「えと、その……どうもありがとう、いろいろと……」
「気にしないで。あたしも嬉しいから」
「でもあんまり急に誘っちゃったし」
口ごもる。意を決して「春休み軽井沢ツアー計画」をもちかけたら、亜衣はふたつ返事でOKしてくれたのだ。体操部の練習もあるのに……。
「仕方ないわよ。事情が事情なんだし」
スポーツバッグを持ちなおし、亜衣はそう言う。
細身なうえに小柄な彼女に、膨れあがったバッグはかなり辛そうだ。肩からはデイパックもかけている。女の子はこれだから、と亮介は内心で苦笑して、手を伸ばした。
「持とうか、それ」
「あ、やめて。重いから」
「重いから持つんだってば」
強引にひきうけた。亮介のほうはナップザック一個なのだ。
特急列車のホームへ向かう階段を上りだす。

「やっぱり違うなあ、男の子って」
並んで歩きながら、感心したように亜衣が息をついた。
「あたしも男の子になりたかったな」
「……亜衣ちゃんが男だったらちょっと困るよ、俺」
亮介は顔をしかめた。くすくすと亜衣が笑う。
「そしたら大親友になって、水沢君と争奪戦やってたのに」
「あのね……」
むむむ、と亮介は思う。微妙な発言だ。
（大親友、ねえ……）
正直言って、現時点で亜衣との関係がその「大親友」の域を出ているかどうか……難しい線なのだ。実は。
半年前に比べたら格段に仲は良くなったけれど。しかし果たしてその本質は変化しておるのだろうか。つまるところ、その——約束も保証も確認もない状況というやつで……。
先日うっかりそれを漏らしたら、何をもたもたしているっ、のろまっ、と希沙良に怒鳴られてしまった。言うんじゃなかった。
（そんなに器用だったら、はじめから悩んでないって……）
なまじ亜衣がやたら可愛かったりするから、ますます気がひけてしまうのだ。狙っている奴

なら学校にもごまんといるし。
「余裕で間に合ったみたいね」
亜衣がふりむいた。シーズン中でホームはえらく混んでいるが、冴子の渡してくれた切符はぬかりなく指定席だ。時刻は午前十時。
こうしていると、なんだかふたりきりで旅行するような錯覚にとらわれる。諒が広島まで彩のことを迎えに行く関係で、現地集合ということになったのだが。
「冴子さんは、この電車じゃないの？」
「さあ。全然聞いてない」
亜衣に問われて、亮介は首を振った。
「まさか諒と一緒じゃないとは思うんだけど。いくらなんでも広島までは行かないよね」
「そっか……偉いわよね、冴子さんって」
特急を待つ列に加わり、亜衣がしみじみと言った。亮介はふとその横顔を見返していた。なんだか語調が意味深のような――。
「偉い……というと……」
「偉いわよ。だって冴子さんって水沢君のこと好きでしょ」
「――っっ」
思いきり息がつまった。

（すすす鋭い……）

しばし言葉が出ない。

「……あの……それって……」

「一目瞭然じゃない？　そういうの」

「そ、そうだったのか……」

なかなか気づく人はないだろうと思っていたが、これはあまりに甘かった。亮介は宙を仰いだ。なんということだ。

「まあ、問題の水沢君がどう思ってるかは知らないけど」

「それは言えるなー……」

「水沢君って他人事には気がまわるくせに、自分のことになると全然わかってないのよね」

苦笑まじりに亜衣が言う。

「……亜衣ちゃんって、すごいね」

亮介は真顔になって呟いた。前から思っていたことではあったけれど。

決して多くはない材料の内から、確実に真実をつかみ出すのだ。彼女は。

「そんなことないわよ」

「あるよ。鋭いよ、絶対」

いつもいつも本当のことを言ってくれる。見落としてはならないことを知っている。

話せば話すほど驚かされて……教えられる。
ほとんど尊敬の念すら抱いてしまう。自分がぐらぐらと迷ってばかりいるから、なおさらそう思うのかもしれない。
「頭がいいんだよね……そういうのって、すごいと思うよ」
正直な気持ちでそう言ったら、亜衣が少し困ったような顔をした。
「でも、それって……」
うつむき加減で口ごもる。上目遣いに、ちらりと見上げた。
「かわいくないと思わない？」
「――」
絶句。
「……か、かわいくないって……」
亮介は発作的に笑いだしてしまった。亜衣がかっと赤くなる。
「ちょっと……崎谷君っ」
「だ、だって……」
そんなことを気にするところがかわいいんだってば、とは言えない。
「亜衣ちゃんらしいなー」
「どういう意味？」

亜衣は不満げである。ひたすら笑いをひきずりながら、亮介は前髪をかきあげた。目を上げた。

「……あのね、そんなことないと思うよ。少なくとも俺はそう思うけど」

「思いきり笑われてから言われても、説得力ないのよね」

やや拗ねたように亜衣は言い返したが、責める響きはそこにはなくて、亮介が重ねて口を開こうとしたところに——列車が入ってきた。

Ⅱ

中軽井沢の駅に着いたら、いきなり真冬の寒さだった。
天気はいいのだが、空気の質がそもそも違う。しん、と澄みきった大気。
決して大きくない駅の改札を出ると、駅前の広場が目の前だった。混みあった切符売場や待合室をざわざわと人が動く。はぐれそうになって亜衣をふりむいたら、ばんっ、と勢いよく背中を叩かれた。
「ご苦労さま、亮介ちゃん」
「――あれ!?」
巨大なスーツケースをひきずって立っているのは冴子である。
「え、あれ……待ってたの？」
「まさか。今着いたのよ」
「……じゃ、同じ電車で……もしかして」

「同じ車両でした、実は。ふっふっふっ、気をきかせてしまったわ」
「あのねえっ」
がっくりと脱力感に襲われて亮介は呻き声をあげた。まったく趣味が悪い。文句をつけようとしたら、きゃー亜衣ちゃんそのスカートかわいい、あっ冴子さんもそのスーツ素敵、と女の子だけで盛りあがられてしまった。
（ったく女の子はこれだから……）
先が思いやられる。
「行くわよ、亮介ちゃん」
「はいはい」
冴子はタクシー乗り場に足を向けていた。半ば諦めの境地で亮介はバッグを持ちなおし、それに続いた。
「どうしたの？」
亜衣が罪のない表情で顔をのぞきこむ。
「いや、まあ……」
小さく息をつき、亮介は言葉を捜した。
「その……楽しくなりそうだなあ、とか……」

駅からタクシーで三十分程度。

ペンションと山荘の群れをあとにして、車は鬱蒼とした森の内へ走りこんでゆく。いわゆる「別荘地」を抜けてしまうと、道ばたに見える人影も極端に少なくなった。

木々の緑に、透明な陽光。冷えた風。

やがて、とうとうアスファルトが途切れた。地肌をむきだしにした道に乗り入れたところで、冴子はタクシーを止めさせた。

「ここからは歩いていけるはずなのよ」

地図を開き、冴子が言う。タクシーが戻っていく音を背中で聞きながら、亮介もそれをのぞきこんだ。

「な……なんか、陸の孤島だね」

周囲に何もない。標高は随分ありそうだ。確かに都心の人ごみを避けて静養に来る分には最適のように思うが……それにしても人気がなさすぎる。

「二キロくらい歩いたところにマーケットがひとつあるわね。とりあえず、食糧の調達はなんとかなるわよ」

「もしかして買い出しだけでも大変という……」

「いちいち心配しないでよ。住めば都っていうでしょ」

ごつごつした小道を十分ほど歩いただろうか。

最初は、行き止まりになったのかと思った。目の前の壁が実は私有地を囲む塀だと気づいて、亮介は嫌な予感を覚えた。塀に沿って視線を流すと、こぢんまりとしつつも細工のやたらに流麗な鉄門が目に入り、ますますその予感が強まる。

「崎谷君……」

亜衣も同じことを考えたらしい。やや眉をひそめながらこちらを見上げる。

一見してその敷地内がだだっ広いということはわかる。さらに言えば、その……いいように荒れている、ような気がする。石塀の朽ち方といい好き放題に伸びている雑草といい錆びて変色した門の様子といい……。

「ぬかったわ」

地図に目を落とし、ぽつりと冴子が言った。

「忍様が完全主義者だというのを忘れていたわ」

「は？」

「人里離れてとにかく不便な家、という条件を完璧に満たしてるわ」

ぎしぎしぎし、と蝶番を鳴らして冴子が門を開ける。

「なに考えてんだ、あの人……」

亮介は思わず唸ってしまった。

サッカーコートがふたつは収まりそうな庭の向こうに、二階建ての古風な洋館が見える。その洋館の裏にはおそらく野球スタジアムどころでない面積を誇る林があるのだ。二十年くらい前にはきっと手入れの行き届いた閑静な居城だったのであろうが、つまるところ要するに、二十年くらい何の整備もせず放っといたような惨状が現在、亮介の眼前に広がっていたりする。屋根は破れベランダはけずれ窓は蜘蛛の巣に埋もれドアには穴があいて、手を触れたら屋敷が一度に崩れそうではないか。

「……退屈はしないですみそうだわね」

扉の前に立ち、漆喰の壁を見上げて冴子が呟く。

「もしかして忍さんって、ここの掃除をさせたかっただけなんじゃ……」

「甘いわ、亮介ちゃん。掃除と修理と草むしりよ」

「……」

この手のことには慣れているのか、冴子はほとんど動じていない。亮介は亜衣と目を見合わせた。励ますように亜衣が肩をすくめてみせる。

「大丈夫よ、崎谷君。こういう掃除とかってあたし好きだし」

「はあ……」

（女の子ってつくづく強い……）

埃の舞う室内に踏みこんでゆく彼女たちを見送って、亮介は畏敬の念すら覚えていた。

洋館自体は、それほど大きな建物ではない。一階には吹きぬけの居間にキッチンとバスルーム、二階に寝室が三部屋並んでいる。それぞれの部屋にベッドがふたつずつ備えてあり、冴子はまずばたばたとその布団を干しはじめた。

亜衣は一方で家中の窓を開けて風を通し、ほうき片手に動き回っている。

「えっとー……」

雑巾がどうのはたきがどうの、という女の子たちのやりとりは活気に満ち満ちていて、亮介が口をはさむ隙もない。ただぼけっとしているのもあまりに間が抜けているので、仕方なく亮介は居間のど真ん中に据えられたストーブの煤払いにとりかかることにした。

それにしても冴子と亜衣が思いのほか意気投合しているのは、見ていると楽しい。よく考えるとあまり接点のないふたりなので、少しばかり心配していたのだが。

（そもそも出会いが出会いだったからなー）

思い返すと情けない。亮介はため息をついた。どうして自分はいつも彼女たちの前でカッコ悪い姿ばかりさらしているのだろうか。なまじふたりとも「カッコいい女の子」なので、ますますたちが悪い。

「たのもーう」

玄関のほうから、妙に間のびした声が響いたのはその時だった。


Andante

「ちょっとこの家ってば何ー？　どうしろっていうのこの屋根。これってばやっぱりワタシが直すんでしょーか……」

ぶちぶちと不満げに呟いている。予想外に早い到着だ。亮介は急ぎ足で部屋を出た。開け放した扉に、人影がふたつ。

目に入った瞬間。不意に。

（え!?）

――視野の回転。

玄関の柱に手をついて立ち止まった亮介に、諒はいたずらっぽい笑顔を向けた。

「どうしたの？　亮介ちゃん」

息をつめて立つ亮介のことをからかうように。

亮介は言葉を失ったまま「彼女」を見つめていた。

大切な宝物のように、壊れやすい硝子細工のように、そうっと諒の腕が彼女の肩を包んでいる。

小さな子だった。華奢で静かで……。

肩の上で切り揃えた黒髪は日本人形のようだ。

伏せられた瞳。

「……こんにちは」

ようやく亮介は我に返って、おずおずと口を切った。彩は答えなかったが、かすかに会釈(えしゃく)を返した。髪が揺れる。

なぜ自分が息を呑(の)んでしまったのか、その時は亮介にもよくわからなかった。

Ⅲ

二十年間空き家、というのはさすがに亮介の考えすぎだったようで、台所からは三年前の缶詰と米袋が見つかった。

「三年前、ですか……？」

食卓に広げられた夕食を見渡し、おそるおそる諒が呟く。

「要らないの？」

ぎっと冴子が睨みつける。

「いや、いただきますけど……いただきますけどねー……そうか、三年前か……」

「おかしくなってたりしたら食べさせやしないわよっ。しつこいわねっ」

「冴子ちゃんがいじめる……」

「気持ち悪い声出さないでくれるっ!?」

このふたりの間に割りこむのは命知らずというもので、亮介はあえて沈黙を保ったまま諒の

隣の椅子を引いた。

六人がけのテーブルは丈夫な木製で、諒の正面には黙然と彩が座っている。その両隣を冴子と亜衣が占めるかたちだ。

ここに着いてから、彩は一度も声を発していなかった。

周囲がばたばたと掃除やら食事の支度やらで駆けまわっている中、居間のカーペットにすとんと座りこんだまま身じろぎもせずにいた。

彩を放り出したまま諒がまったくかまおうとしないので亮介は最初のうち少々とまどっていたのだが、きっとそのほうが彼女にとっても良いのだと納得することにした。下手に世話を焼いてもうるさいだけなのだろう。実際、そうしてじっと座っている様子を見ていると彼女は決して寂しげでも心細げでもなく、むしろひどく落ちついて穏やかだったのだ。

「彩ちゃん、お味噌汁熱くない？」

亜衣がのぞきこむ。ごく小さく頷いて、彩は黙々と箸を動かす。

「はっ。もしかして味噌も三年前なんだろーか」

「インスタントよ」

さっと青ざめる諒に冴子が冷ややかな目を向けた。

「こんなこともあろうかと――と言いたいところだけど、実は忍様が持たせてくれた荷物の中に入ってたわ」

「あ……遊んどるなあいつ……」
諒がげんなりした表情で頭を抱えこむ。
「どうしてそういうせこいことしかできんのだろう。レベルが低いぞレベルがっ。いじめっ子だし嘘つきだし自分勝手だしっ。いつか痛い目にあっても知らんぞ俺はっ」
「馬鹿ね、あの人にそんな隙あるわけないでしょ」
「……あるかもしれないでしょ」
「ないわよ、絶対！　失礼ねっ！」
有無を言わせぬ語調で冴子がぴしっと言いきった。たじたじと諒が退却する。
「ごちそうさまです」
おそらく二重の意味をこめた台詞だろう。神妙に言って、諒は席を立った。
部屋の中央に置かれた巨大なストーブの脇に座りこんで、マンガ雑誌のページをぱらぱらと繰っている。
「……」
口をつぐんだまま亮介はちらりとそれを見やった。
（なにもそんなにいじけなくても……）
後ろ姿がやけに哀れっぽい。それともこれは演技なのだろうか。
「亮介ちゃん、サバ缶残さないで片づけてね」

「あっ、はいっ」
釘を刺すように冴子がこちらに目を向けた。視線を読まれたらしい。思わず背筋を伸ばして答えてしまってから、亮介はやれやれと息をついた。別に何も後ろ暗いことをしているわけではないはずなのに、つい反射的に逃げ腰になってしまう自分が悲しい。
石油ストーブの炎がオレンジ色に照り返す。
日が沈んでしまうと空気は凍りつかんばかりだ。セーターをしっかり着こんでも、暖房を欠くわけにはとてもいかない。
「……なんなんだこの寒さは」
ぼそぼそと諒の背中が呟く。
「空しい。南方はあんなに春爛漫してたのにさー。何が悲しくて今どき軽井沢なのかしら。風呂入ってさっさと寝よっと」
「ちょっと！　食事作らせといて後片づけのひとつもなし？」
のそっと動きだそうとしたところに冴子のひと言が飛んだ。べしゃっと諒が膝をつく。
「お風呂は当然レディーファーストよね。その間に洗いものよろしく。彩ちゃん、一緒にお風呂入ろうねー」
「そうそう、ここのお風呂大きくて立派なのよ。そんなに荒れてなかったし」
一方的に話を進める冴子にすかさず亜衣が同調している。恨めしげに諒がふりむいた。

「……亮介君……もしかしなくても俺って迫害受けてませんか」
うっ、と亮介は返答につまった。三方から視線の集中砲火。
「えっ……と」
正直言ってつくべき陣営ははじめから決まっている。
箸を置いて、亮介はゆっくりと諒のほうを向いた。観念、というやつである。
「手分けして、やろうな。後片づけ」
「亮介ーっ、俺は悲しいぞーっ」

三部屋ある寝室は、間にひとつ空室をおいて両端を女性陣と男性陣がそれぞれ占めることにした。三つ目のベッドを運びこんだ「女の子部屋」に女性陣は早々に姿を消し、亮介は突如静まりかえった一階の居間に諒とふたりでとり残された。深夜、というにはまだ早い時間だ。
ストーブがごうごうと低いうなりをあげる。
「元気か？」
床のカーペットに座りこんで、亮介は改めて短くそう訊いてみた。
「うん。元気」
片腕でガッツポーズを作ってみせて諒が言う。並んでストーブの灯を受けている。

「なら、よかった」
「うん」
子供のようにじゃれついては馬鹿にされる——そんな姿も間違いなく諒なのだけれど。けれど、そればかりでもないから。亮介は知ってしまっているから。だからと言って何ができるわけでもないこともわかっているのだが。
緊張しているのだ……諒は。
今日ここに着いてからというもの、傍目にも痛いほどに緊張しているのだ。
それがわかるからこそ、冴子も亜衣も決して気遣いなど見せない。いつもどおりに、いつもどおりにと意識して意図して引き受けて。だから亮介も。
「寒くないか？」
「うん。平気」
「……なんか、隙間風感じないか？」
「あー……明日、壁の修繕やらんとなー」
「屋根もだろ」
「んー」
静かに淡々と交わされる会話。
旧式のストーブの小窓に燃えさかる炎の影が映る。それを見つめる諒の横顔は幾分安らいで

自然で、そんな小さなことに一喜一憂する自分は一体何なのだろうな、と亮介はぼんやり思う。

緊張の源は、きっと彼女。

それは諒がはじめて彩のことを語った時点からわかっていたことだ。けれどいざ彩を目のあたりにしてみると、なぜ諒が彼女に対してそこまで緊張を強いられなければならないのか、その理由はかえってわからなくなってきた。

物静かで内気な少女、という印象はあるが、それはそれだけのことだ。一緒に過ごしてもなんらズレを感じない。

『普通』ではないのだ、と諒は言ったけれど……そんな風に言ってしまってはいけないような気がする。そんなに簡単に言ってしまえない。あんなにきれいな空気をまとっているのに。

（あ……）

亮介は目を上げた。言葉をみつけた。

「あのさ……」

「ん？」

「うん、あの……彩ちゃんのことをさ、はじめて見た時に思ったことがあったんだけど……どう言っていいか、なんだかわかった気がするんだ、今」

意外そうに諒が見返る。

「ああ、あれ……美人だなあっつってびっくりしたんじゃなかったの？」
「――ま、それもあることにしとくけどー、それだけだったらいちいち考えないよ」
「不満そうに言うな、不満そうに」
「言ってないってば！　……だからさ、そうじゃなくて」
諒がまぜかえすのは何かを避けるためだろうか。そう考えるのはまた少し辛い。真顔に戻って亮介は口を開いた。
「空気がきれいだった」
「……空気？」
「うん……だからもう、オーラがどうこうって話じゃなくてそれ以前の……まわりの空気がさ」
不思議な清涼感。
あんな風に澄んだ空気を周囲に感じさせる人物を亮介は他にひとりしか知らない。――斎伽忍である。
「へえ……」
諒が意表をつかれたという顔でぽつりと呟いた。
「それは初耳」
「……いい子だよ」

かすかに笑みを浮かべて亮介が言う。
ちらりと視線を返して、諒が自慢げに両眼を細めた。
「当然でしょ。俺の妹だもん」

二日目——傷

I

翌朝は、目覚ましが鳴る前に自然に目がさめた。
窓からまともに射しこむ朝陽に亮介は顔をしかめ、それから隣に並ぶベッドを見やった。
——空になっている。
（……？）
もそもそと上体を起こす。ぐるりと部屋を見まわしても諒の姿はなかった。
時計の針は六時半にさしかかろうとしている。
（あいつ……）
微妙な直感があった。胸の片隅に、なんとも説明しようのない重い気持ちが生まれる。わざとゆっくりベッドから抜け出し、亮介はカーテンの破れた窓に歩みよった。
案の定、白く眩しい陽光の中、広い庭の一角に長身の後ろ姿が見えた。かがみこんで、どこからか紛れこんできたらしい子犬とじゃれている。

窓を開けかけて、亮介は手を止めた。

諒に気づかれたくなかった。こちらをふりむかれたら、自分が何を考えているかすぐに知れてしまうだろう。

眠れなかったのだろうな、という思いがあった。夜中に、何度も身を起こす気配を隣のベッドに感じていた。何を言うこともできなくて、結局寝ているふりをするしかなかったけれど。そうして、いつの間にか自分は眠りこんでしまったらしい。諒は……彼は少しでも休むことができたのだろうか。知る術はない。

もどかしい。亮介は自分の抱える感情が苛立ちに近いことに気づいた。怒りさえ含まれているかもしれない。どこへ向けられるものなのかもよくわからない。何もできぬ自分に、か。あるいは。

（――諒に？）

自分に何もさせぬ彼に対するもどかしさ……。

嫌な、感情だ。亮介は唇を噛んだ。自分はきっと、今一歩諒の内側に踏みこめない自分自身に苛立って、それを諒のせいにしようとしているのだ。

「だって、わからないじゃないか……」

雑種の野犬をからかってステップを踏む諒の背中から視線をはずして、亮介は思わずひとりごちた。わからない。言ってもらえなければわからない。諒が何を恐れているのかなんて、そ

んなこと全然わからない。

そしてそれを問うことは自分にはできなくて。それを訊いて彼の傷に踏みこむことはできなくて。その傷を深めてしまうのが怖いから。——さらに言えば、それによって諒が自分から離れてしまうかもしれないからだ。

（！）

亮介は頭をひとつ振ってがらりと窓を引き開けた。

耳ざとく気づいて諒がふりかえり、やっほー、と手をあげた。

「早いな」

窓からは小さなベランダに出られるようになっている。声を投げて、亮介はその手すりにひじをついた。冷えきった空気が肺を洗うようだ。

「あんまり天気がよくてねー」

諒が笑ってみせる。もう考えすぎることはやめよう。そう思って亮介は笑顔を返したが、一方でひどく悲しくなってしまった。

「せっかくの軽井沢なんだから遊びに行きたいところだけど」

朝食を終えた席で、冴子は改まった言い方をした。

「とりあえず、体裁を整えるほうが先だわね。こう隙間風がひどいんじゃおちおち寝てもいられないわよ」
「わざわざ俺のほう見て言わなくたって、ちゃんとやりますよ、大工さん」
ぶつぶつと諒が答える。
「わかってるならいいのよ。屋根だけでもなんとかしてよね」
「……せめてもう少し、いたわりの情が欲しいなー」
「何か言ったかしら」
「いえ……」
はあ、と大げさに諒はため息をついた。見ぬふりをして冴子は亜衣のほうへ向きなおる。
「で、あたしたちは午前中に買い出しに行くということで」
「それじゃ、必要なもののリスト、簡単に作っておいたほうがよくない？」
「言えるわね」
「あの、俺……」
とり残されて亮介がおずおずと口を開いた。
「ああ、いいの。亮介ちゃんは留守番」
すかさず冴子が決めつける。「は？」と亮介は訊き返した。
「でも、あの、荷物持ちとか……諒のこと手伝ってもいいし」

「いいのよ、亮介ちゃんは彩ちゃんと一緒にお茶でも飲んでて」
（――あ）
さらりと言う冴子の台詞の裏には確かな意図がある。
（ああ……そっか……）
ならば彩のことを引き受けることにしよう、と亮介は納得した。ちょうど彼女とじっくり向き合いたい気持ちでもあったのだ。
「……じゃ、お言葉に甘えて」
冴子に了解の微笑を返す。いいなあいいなあ、と隣で諒がテーブルに貼りついた。
彩はただ、しんとしてカフェオレを口許に運んでいる。
それにしても冴子の仕切り方は見事なものだ、と亮介はひそかに感心していた。きっと何も考えず体を動かしていたほうが諒は楽になれるだろうし、それに……多分、いま自分が抱えている思いも冴子には見えてしまっているのだろう。
「ではっ。働かせていただきましょ」
勢いよく諒が席を立っていった。続けて冴子が立ちあがり、台所に残っているものの確認に行く。
コーヒーの最後のひと口を飲み干して、亮介は大きく息をついた。
「――」

視線を感じて、つと顔を上げる。メモ帳を開く亜衣と真正面から目が合った。
「？　どうしたの？」
「……ううん、別に」
何か言いたげだと思えたのだが、亜衣はメモに視線を落としてしまった。
（？）
よくわからない。亮介は彼女を見つめ返した。亜衣は下を向いたまま買い物のリストを黙々と書きこんでいく。
「なにか、怒ってる……？」
「別に。なんでもないの」
口調が明らかに台詞の内容を否定している。なにか彼女の機嫌を損ねるようなことをしただろうか。亮介は混乱してきた。
「……なんでもないって顔してないよ。何か言うことがあるんじゃないの？」
声のトーンを落として助け舟を差し出してみる。
「わからないなら、仕方ないわよ」
ぴしゃりと亜衣がそれを突き返した。亮介はかっとなった。
「言ってくれなきゃわからないよ！」
思いのほか声が鋭くなった。びくっ、と亜衣が指を震わせた。

こちらだって、今はそんなに余裕のある精神状態ではないのだ。いい加減つきあっていられなかった。いちいち亜衣のほうにまで気を回していられないのに。

がたん、と椅子を鳴らして亜衣が立ちあがった。

苦い沈黙。無言のまま目をそらして台所へ歩み去る。

ドアを閉める音。

（わかるはずないじゃないか、他人なんだから！）

コーヒーカップを両手で包んで、亮介は心中で怒鳴った。こんなに亜衣に腹を立てたのははじめてだった。

できないことを要求しないでほしいと思う。それは身勝手というものだ。少しはこちらの事情も考えてくれたらどうなんだ。人の気も知らないで……。

（――）

憤った思いは、けれどすぐに鈍い痛みにとって代わる。

……駄目だ、落ち着け、と亮介は自分に言い聞かせた。どうも変に神経質になっているのが自分でもわかる。落ち着け、そしてよく考えろ。

自分ひとりが、全部背負っているわけじゃない。自分だけが神経を尖らせているわけではないのだ。

（やつあたり、だ……）

情けない。彩と向かいあったテーブルで亮介は自分の指に爪をたてた。情けない。これではまるっきり子供じゃないか。

じりじり、と痺れるようにこみあげる焦燥感。

ふっと目を上げた。何の変わりもなく座る彩の姿があった。

いま眼前で亮介の発した言葉になど、まるで関心をはらっていない。波ひとつ立たぬ彼女の内面。

吸いこまれるような静けさに満ちて。

一瞬、亮介は息を止めた。すっと心が冷えていくような気がした。

ひきずられる。醜い気持ちが嘘のように流されて、空白になる。怒りも苛立ちも。

(何……?)

影響された、のだろうか。彼女の身を包む空気に。

それはまるで、同調——。

「!」

はじかれるように亮介は席を立った。

台所のドアを開く。戸棚を見上げていた亜衣と冴子が同時にふりかえった。

亮介は肩で大きく息をして、声を押し出した。

「あの、ごめん……」

冴子は他人事のような顔をしてくれた。かすかに泣きそうな表情になって、亜衣が小さく、気にしないで、と呟いた。

結局、亜衣が何にこだわっていたのかは聞かなかった。女の子たちが食糧調達に出かけ諒は屋根の上に姿を消し、広い居間に残るのは彩と亮介のふたりきりである。暇つぶしになれば、と亮介は荷物からスケッチブックとクレヨンを取り出した。写生でもするかと思って持ってきたのだが。

「描いてみる？」

彩の前にスケッチブックを広げてみた。こくんと素直に彩が頷いて、亮介はかえって少し驚いた。なにか、嬉しい。

クレヨンをとる彩は左ききだ。亮介はテーブルに頬杖をついてそれを見守った。

自分にも妹がいたらこんな感じなのだろうか……。

がんがんがん、と上方から派手な音が響きはじめた。諒の金槌だ。

「新しい穴作ってんじゃないだろーな……」

天井を見上げて亮介は眉をひそめた。やりかねない。

「みどり」

小さな声が耳に届いた。

「――え？」

はたと亮介は視線を戻した。はっと胸をつかれた。

彩の声だ。

「みどりは？」

彩が話しかけている。目は画用紙に向けたまま。か細い声。

はじめて、聞いた。聞かせてくれた――。

「あ、緑？」

緑色のクレヨンがないのだ、と亮介は気づいた。十二色のクレヨン。

「ごめんね、この前折れちゃって……買うの忘れてて、ないんだ。ごめんね」

せきこむように謝った。彩は少し思案して、青のクレヨンを取る。

彩が描いているのは一軒の家だった。

ごくシンプルな描き方だ。小学生のころよく描いたような、三角屋根に四角い窓の小さな家。色づかいも明るくかわいらしい。

たんねんに色を塗って、それからその家の傍らにちょこんと黒い犬を描くと、彩はクレヨンを置いた。

「もうおしまい？」

亮介の問いに無言で頷く。
「住んでる人は？」
重ねて訊いてみると、彩はふと考えるような目をした。
「……住んでるのは、あや」
ぽつりと言う。
「それから、まこと」
「まこと？」
知らない名前だ。
「それから、お父さんとお母さん」
続けて彩は言うと黙りこんでしまった。
（お父さんとお母さんと……？）
亮介は目を瞠った。もしかしたら。
「まことって……弟？」
無感動に彩が首をたてに振る。亮介はその顔を見つめ、絵に視線を転じた。
（そうか、そうなんだ……）
「じゃあ、これさ、これ、クロだよね」
犬の絵を指さすと彩がまたこくりと頷いた。

「ふうん……」

亮介は言葉を切った。

家族のことを語るのは、彼女にとってはどんな意味を持つのだろう。苦痛だったりはしないだろうか。彩と話をできるのは嬉しいが。

と。

何かが、引っかかった。何かが心の端をわしづかみにした。

「あ」

亮介は自分の声がこわばるのを感じた。

彩が描くかつての彼女の家庭に、欠け落ちているのは。

「……彩ちゃん……お兄さんは？」

まさかと思いたかった。

思い違いだ。きっと深い意味なんてないのだ。今だけ、今に限って忘れただけで。

（だって、そんな）

「――」

何の揺らぎもなく彩が首を横に振った。

はじめから兄などいないと言わんばかりに。

「ど、どうして？　どうして諒のことだけ……」

亮介は絶句してしまった。すると諒は。諒はどうなる。
彩は何の反応も返さない。誰も立ち入らせぬ不変の障壁。凍りついた硬い沈黙。まるで突き放して、一瞥も投げない。ついさっきまでの交流が嘘と消える。
——それはひどい。
これはひどすぎる。亮介は口許を押さえた。こんなことだとは思わなかった。
それでは、諒はただひとりの妹からその存在を拒絶されているのではないか。
過去も現在も、すべてその意識から排除されているのではないか。
「だって、一緒にいるじゃないか……彩ちゃん、それじゃここまで一緒に来たのは、一緒に来たのは誰なの？　わからないの？」
思わず問いつめる語調になった。黙りこくる彩が、ふとうるさげに視線を流した。
今までになく感情を含んだその動きに、亮介が一瞬目を奪われた時だった。
「亮介ーっ、雑巾どこにあるか知んない？」
何の気なしにかけた言葉だったのだろう。彩の背後にあたる窓から諒の声が——不意に響いた。
「!!」
心臓を狙われたように彩が肩を震わせてふりむいた。はっと窓の向こうで諒が顔色を変えた。彩の悲鳴を亮介は聞いた。

椅子が倒れクレヨンが床に散った。信じられない激しさで彩がぶつかるようにしがみついてきた。勢いで亮介も床に膝をつく。

「――！」

言葉にならない悲鳴をあげつづけて彩はがたがたと瘧のように震え、その身をわけもわからず抱きとめて亮介はとにかく両の腕に力をこめた。ひどい怯えがそのままま っすぐ伝わってきて、自分まで恐怖にひきずりこまれそうだった。ただごとではない。

炎を見た、と亮介は思った。一面の炎を見た。ほんの一瞬。

幻覚だろうか。確認する余裕もなかった。

「大丈夫、大丈夫だから……」

背中を叩きながら、必死になって彼女をなだめる。彩は泣きだしていた。

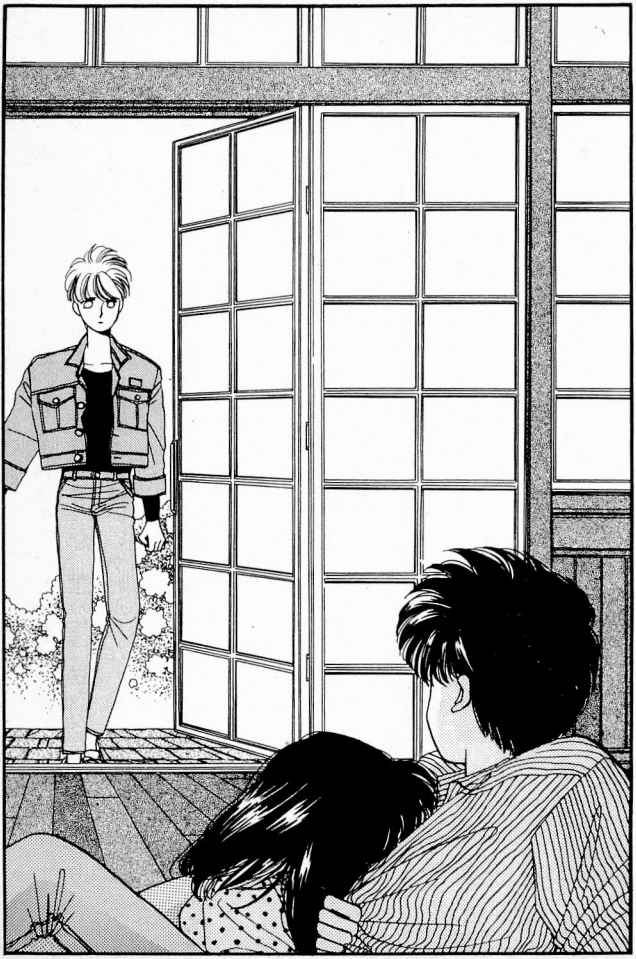
すがりつく彼女の力は、亮介以外のすべての世界が彼女の敵であり苦しみであるかのように強い。追いつめられて哀しい。

……これだったのか、諒が恐れていたのは。

亮介は自分を怒鳴りたい思いだった。なぜ気づかなかった。一触即発の危うい激情。氷面下の溶岩。

知っていたらもっと気をつけていたのに。

「大丈夫だよね……ちょっと驚いただけだよね……」



ゆっくりと囁く。少しずつ……彩の震えがおさまりはじめた。

はっ、と亮介は顔を上げた。ずきりと心臓が鳴った。窓の外に立ちつくす諒の姿――。

見つめあったまま、声が出せない。何を言えばいいかわからない。

「ごめん、悪かった……」

低く言ってひらりと手を振り、諒は目をそらして窓を離れていく。沈痛な色を隠しきれぬその眼差が、深く亮介の胸に刺さっていつまでも残った。

Ⅱ

「誠君って、末っ子でね。諒の五歳下だったかしら」
冴子は木の幹にもたれかかり、腕を組んだ。
「まだ四年生だったわ」
屋敷の裏に広がる林の片隅。
いくらか離れて、彩がしゃがみこんでいる。彼女のまわりをうろうろと一匹の犬が歩きまわっていた。今朝諒がかまっていた犬とはまた違う種類だ。このあたりは野犬が多いのだろうか。
特に危害を加える様子もなく彩のほうも邪魔とは思わないようなので、とりあえずそのまま放っておく。
亮介は冴子の傍らの地面にすとんと腰をおろした。
彩をここまで連れ出したのは冴子である。彼女たちが戻るころには諒はもういつもどおりに

笑顔を見せていたのだが、冴子が異変を見逃すはずもなかった。少し諒から離しておいたほうが彩は落ちつくだろう、と冴子は言ったが、これはきっと裏返しだ。落ちつかなければならないのは諒のほうだった。

痛々しくて、見るに耐えなくて、亮介は彩にかこつけて逃げてきたのだ。多分、冴子も。

「考えてみたら、亮介ちゃんには諒のこと、ちゃんと話したことなかったのよね」

「うん……」

それはそれでよかったのだ。

明るいけれど熱はほとんどない陽射しを浴びて、亮介は膝を抱えた。

「別にあれ以上聞こうとかは……わざわざ昔のこと蒸し返さなくても、今のあいつはあいつなんだし……」

ゆっくりと呟いた言葉が途切れる。言おうとしたのは嘘じゃなかった。今まではずっとそう思っていて……けれど。

声にした自分の台詞は他人のもののようで。

「――でもさ、でも嫌なんだ！」

亮介は頭を振った。ごまかせない。ごまかしきれない。

「だって知ってたらもう少しなんとかなったのに……！　知らなかったら、知らなくて傷つけたら自分が今傷つけたんだってことにも気がつかないままで……全然見当違いのことを言って

いい気になったりして！　それを聞いて相手が何思ってるかなんて俺には……俺にはわからないのに。あいつ、傷ついてるかもしれないのに……」

それは無邪気で、だからこそ残酷だ。

その怖さを知りもしないで不用意に動いて――彩を刺激したのはきっと自分のほうだ。そして結果的に諒にとって何より辛い事態を招いて、そればかりでなく。

（ばかだ、俺は）

痛い慚愧。全身が石になってしまえばいいと亮介は願った。

自分は馬鹿だ。まともにショックを受けたという顔をして諒を見るなんて。

その瞬間で諒と自分の間の距離を、諒の過去と自分の実感とのズレを、いやというほどさらけ出して諒を打ちのめした。わからない、と。おまえのことはわからない、と宣告して。救いようもなく無知で甘えた自分を露呈して。……諒はそれをどう思ったか。

「こんなんで友達なんて、全然嘘だよね……。俺って結局いつでもそうで……いつも何もできなくて。諒にはすごく助けられてるくせにさ……俺のほうからは……なんか重荷ばっかりで……」

「それは言いすぎよ、亮介ちゃん。自分を卑下するのって相手に対しても失礼よ」

冴子が強い調子で口をはさんだ。

亮介は唇を結んで黙りこんだ。事実は変わらないから……慰めてもらってもどうにもならな

い。

少しばかり困ったように冴子はそれを見やり、改めて口を開いた。

「……一昨年の夏よ、忍様が諒を連れてきたのは」

話さなければ亮介の内面がおさまらないと踏んだのだろう。

「でも正直言って、それって大変なことだったのよ。忍様が直々に出向いて全部ひとりで片づけて東京まで連れてきて、しかもまわりには全然知らせてなかったから……後になって本家の連中が、あんな馬の骨のために伽羅王の力を無駄遣いするとは何事かって騒いだりして。あたしはその前から忍様のところに出入りしてたから、歳も近いからってことで引き合わせてもらってたけど」

亮介は目を上げた。忍がいなければ今ごろ自分は生きていない、という諒の言葉を思い出していた。

妖者の誘惑にのって家を燃やし家族を失い自分も死にかけて、それを忍に救われて。だから、今度は忍のために働くのだと。でなければ自分は許されないような気がするからと……。

「あの頃の諒って、今とは全然別人よ。とにかく何も話さなかったし、笑ったりなんかもちろんしないし、部屋から一歩も出ようとしないし」

肩をすくめて、冴子が続ける。

「そもそも中学の時の諒って勉強一筋の優等生だったって言ったら信じられる？　友達なんか

ほとんどいなくて、受験のことで頭いっぱいにして」

「――」

返す言葉がない。

予測の域を越えていた。亮介は呆然として冴子を見上げた。

「中三の夏でそのプレッシャーが神経に来ちゃって……それで〈妖の者〉を呼びこんじゃったのよ。その妖者を受け容れたことがそれまで眠ってた術力を一気に爆発させるきっかけになってね、妖力も手伝って発火現象が起きて。家が燃えたのはそのせいよ。憑いてた妖者は同化する直前になんとか忍様が落としたんだけど、家族は……彩ちゃんだけが奇跡的に助かって」

そしてただひとり東京へ連れてこられた諒は、それから半年ほど忍の許で暮らしていたのだという。

半分死んだようだった諒がやがて言葉を取りもどし笑うようになり独りで生活できるようになるには、それだけの時間が必要だったのだ。その時期に忍と諒の間でどんな交流がなされていたのか、何が変化を導いたのか……冴子はすべてを知るわけではない。

「高校にあがる頃から、例の『仕事』を引き受けるようになったの。まあ一応、それで忍様から報酬を受けて彩ちゃんに送金するっていうもっともな理由はあるんだけど……」

よく思いきったものだ、という響きがそこにある。

「……そうなんだ……」

亮介は乾いた声で小さく呟いた。

諒の強さは、絶望の底から這いあがり乗りこえた者の強さだ。

その時、諒は何を思い考えていたのだろう。もう自分の憶測など届かない次元の話だ。手をのばしたいけれど。たどりつきたいけれど。けれどもう。

どうしたって届かない。

違いすぎる。世界が違いすぎるのだ。わかるなどと思ったらそれは傲慢だ。

事情や説明を聞くことはできても、本当の真実のその時を知ることは決してできない。そんな苦しみの悲しみの痛みの実感を自分は知らない。

「……考えすぎないでね、亮介ちゃん」

冴子の言葉。

「亮介ちゃんはドンと構えてればそれでいいのよ。窓開けて待ってればいいの。それをできるのは亮介ちゃんだけなんだから」

「うん……」

わざと突き放した言い方にこもるあたたかみが、胸の内に染みる。ありがたいのだけど……けれど。

でも、と言おうとして亮介は草を踏む気配に顔を上げた。

亜衣だった。遠慮がちな足どりがどこか彼女らしくなかった。

「お昼ごはん作ったんだけど……どうする？」
「ああ、ありがと」
冴子が声を返す。亮介は立ちあがった。
「亮介ちゃん、先に戻ってて。あたし彩ちゃんの様子見はからってあとから行くから」
「えっ……でも」
「あたしの言うこと聞けないの？」
反論を許さぬ構えで冴子に睨まれ、亮介はあえなく引きさがった。
「……じゃ、行こうか」
亜衣を促して、歩きだす。亜衣が無言でそれに続いた。

「諒は食べるって？」
「うん、先に食べちゃうって言ってた。日が暮れるまでに直さなきゃならないところがたくさんあるんだって」
「そっか……」
木々の間を抜けてゆっくりと歩く。
「俺ってさ、見てて苛々しない？」

亮介はふりむいて、突然訊いた。亜衣が意表をつかれた顔で亮介を見つめかえす。え、と聞き返した。

「なんかすごいちょっと……頭の中ぐしゃぐしゃしててさ、全然くだらなくて嫌なことばっかりいろいろ考えてるから……。そういうの、見ててわかっちゃうよね」

「……」

「わかるんだけど……理屈じゃわかるんだけど、でも理屈だけだから、それって。つまり俺自身が全然だめだから。俺の人間のほうが全然だめだから。すごく狭いし……自分のことばっかり考えてるし」

自嘲の響きが含まれてしまうのはどうしようもない。

「ちょっとあんまり情けないから……だから、だからさ、そういうの見てて亜衣ちゃんが嫌だって思うのは仕方ないし当然だよね」

「――崎谷君？」

「一応、自覚はしてるからさ、腹が立つんだったら気をつかったりしないで言っていいよ。悪いのは俺のほうなんだから」

「ま、待って……ちょっと待って、崎谷君」

思いきったように亜衣が割りこんだ。

「なんのこと？　今朝のこと言ってるの？　どうしてそんな風にごまかすみたいな言い方する

の？」
「え？」
「全部言えばいいじゃない、全部話してくれれば！　そんな漠然としたことだけ……言ってくれなきゃわからないなんて言っておいて、崎谷君のほうがずっとずるいじゃないの！」
言葉が正面から叩きつけてくる。亮介は呆然と亜衣を見つめた。
予想外の反応だった。
「なにかずっと考えてるのはわかるわよ。なんだか大変そうだって思うわよ！　でもあたしは、あたしは冴子さんや水沢君と違って普通の人間だから、外から見ているしかないじゃない!?　見ていることしかできないじゃない!?　あたしだけどんどん外に追いやられて……崎谷君がふりむいてくれなかったら、本当にもう関係のない人間になるしかないじゃない！」
ぎりぎりで吐き出したような必死な――。
言いたくて言いたくてけれどずっと抑えていた。そんな表情。握りしめた白い拳。
「あたしの気持ちなんか全然わかってないんだから！」
立ちすくんだ亜衣がみるみる目を潤ませていく。
風が林をざわざわと鳴らす。亮介は希薄な感覚のまま彼女をただ見ていた。
……そうだ、彼女も決して器用ではなくて……颯爽としている分、本当は弱音を吐けなくて……。

彼女にもわからないことはあるし迷うこともある。あたりまえのことだ。あたりまえのことなのに。

「……普通だから仲間はずれだなんて……」

ゆっくりと、亮介が口を切った。

「そんなこと……どうして？　術者だからどうこうなんて……」

わずかにかすれたその声。

「俺……亜衣ちゃんがいなかったら困る……すごく困るよ……」

「――」

くっと息をつめて亜衣がうつむく。

「なんか俺……ちょうど諒のことでいろいろ……亜衣ちゃんが今言ったのと同じようなこと考えて……あいつに言いたかったこと自分に向かって言われちゃったよ。おかしいよね……」

亮介は静かに笑みを浮かべた。

「人のことなんて言えないよね……」

「……」

「ごめんね」

自分のほうに余裕がなかったのだ。いつもいつも。

亜衣のことなど気にもとめていなかった。彩が来てから……。

うつむいたまま、亜衣がぽつりと言った。
「だって」
「え？」
「……だって崎谷君、彩ちゃんには優しいんだもの」
一瞬、亮介は意味をとりそこねた。
ちらりと濡れた瞳を上げて、亜衣が重ねて言う。
「彩ちゃんのほうばかり見てるんだもの」
「――なっ」
がんと頭を殴られた気がした。
「な、何それ!?　違う！　全然違う!!」
力一杯言いきる。泣きそうになったまま、くすくすと亜衣が笑った。
「うん、わかってる」
「わかってるって……本当に、本当にそういうんじゃないから！　諒がすごく気にしてるから、だから俺も彩ちゃんのこと……あ、いや、好きは好きだけど、あ、あれ？」
「うん……」
慌てふためいて言いたてる亮介に笑ってみせて、亜衣が頷く。
「わかってるけど……わかってもやっぱり……気になるし。今朝もそれでちょっと……切れ

ちゃったなあ、とか……」

気になるのは不安だから。

亮介はふと沈黙した。

――自分の気持ちなんか全然わかってない、と彼女は言ったけれど。

不安なのは好きだから。好きなのに届かないから。彼女が言外に訴えつづけていたこと……気づかなかっただろうか、自分は？

そうじゃない。わかっていた。ずっと前から全身でわかっていた。知っていたのに。本当は心の奥底でわかっていたのに。

わざと見ぬふりをして。そんなはずはないと言い訳をして。『親友かもしれない』なんてごまかして、ふわふわした関係に甘えて。

自分にはそんな力量がないからと。自信がないから。釣り合わないから。もし見限られたら。裏切られたら……。

彼女がふりむくのを待っているように、気持ちをすりかえて。そんなことばかりを考えて。閉ざしていたのは自分のほうだ。

ただ自分が傷つくことを恐れて。

もう亜衣のほうにはこれ以上どうしようもないのに。自分が一歩動きださない限り――。

「……崎谷君？」



見つめたまま動かない亮介に、亜衣がそっと呼びかけた。
ふっ、と亮介が表情をやわらげた。
「……き……なのにね……」
吐息のように言葉が消える。
「こんなに好きなのにね……」
亜衣がゆっくりと目を瞠った……。
木々が海のようにざわめいて、それ以外何も聞こえない。
「馬鹿だよね……どうしてそれから逃げようなんて……」
意外なほど静まった心。
透明な時間。
この空気だけ閉じこめてしまえればいい。この時間だけいつまでも続けばいい。
緑の影と。
「俺、弱くて……臆病で、全然だめだけど」
低い囁き。
「一緒にいたいよ……」
亜衣が両手で口許を覆う。肩が震える。
涙が指を伝って地面に落ちていく。

「……馬鹿……」
声にならない声で、亜衣が言った。
「ほんとになんでそんな……ほんとにばかなんだから！　もう……人のことなんだと……」
「だからごめんってば」
「謝ればいいってもんじゃないでしょ!?　さんざん待たせといて……今頃そんな不意打ち……ひどいじゃないっ、責任とってよっ！」
「そんなこと言ったって」
「だいたいなんでそんな崎谷君だけ落ちついてるわけ!?　ずるいじゃないのよっ!!」
「落ちついてないよ俺！　言っとくけど、全然頭おかしくなってるよっ！」
泣いているのか笑っているのかわからなくなってきた。亜衣はしゃくりあげながら涙を拭った。
苦笑まじりに亮介が肩をすくめる。
「……ごめんね」
目を伏せて、もう一度謝った。今までのすべての分。
亜衣が面を上げて、強くかぶりを振った。
「お互いさま」
「……お互いさまなのに、俺に言わせたわけ？」

「そういうことになる……のかな」
「ずるいよ――」
亜衣はくすくすと笑う。亮介はがっくりと首を倒した。
「あ！　お昼ごはん、冷めちゃう」
「あ、そっか」
屋敷に戻ろうとして、亮介ははたと気づいた。立ち止まった。
「どうしたの？」
亜衣がふりかえる。次の瞬間、目を円くした。
さしのべた左の手。
「戻ろう」
亮介が短く言う。
「……うん」
声が出るまでの空白。
亜衣の右手がスローモーションのように亮介の手中におさまった。

Ⅲ

ゆらりと揺れながら階段を上る足。

小さな一軒家は夜闇に包まれ眠りに沈みこんで、階段のきしみが嘘のように大きく響く。手すりに手をのばすと丸太づくりの手すりがするりと身をそらして逃げた。壁もない。階段の上に大きな扉。わずかに明かりがもれて、こちらを監視している。逃げなければ。逃げなければならない。しかしふりむくともう下の段まで闇に覆われ何も見えない。自動的に足は上へ向かい動きつづける。上りきったら扉が開いてしまう。誰か止めて。誰か止めてください。

これは夢だ、と返ってくる声。これは夢だ。夢じゃないわ。夢だからなんだというの。それならここにいるわたしはどうなるの。夢でもいい。なんでもいい。誰か止めて。

ああ扉が。

ぐおっ、と唸り狂って燃えさかる炎が扉を焼きつくして吹きあげた。頬に叩きつけてくるのは熱と痛みと。憎悪嫌悪厭悪。火だるま。灼ける。血が流れないでかたまる。裂ける。どこに

いるの。喉をおかす瘴気。どこにいるのお兄ちゃん。みしみしと家が地面が床が揺れる。見えない。黒煙とガス。お兄ちゃんが見えない。轟音。頭の中で悲鳴。

紅炎の彼方にうずくまる黒い怪物。

生きているのか死んでいるのか。いや、動いた。じわりと起きあがり頭をめぐらせ——こちらを向いた真っ赤な眼はかっと見開かれ、そして宣告。

オマエナンカ死ンデシマエ。

殺してやる殺してやる。意志の奔流。殺意の沸騰。やめてやめてやめてお兄ちゃんをかえして。

絶叫。

はっ、と亮介は目をさました。まっ暗な部屋。

眠っていたのだ、と気づくまでがひと苦労だった。亮介はベッドに身を起こした。夢か。本当に夢だったのか。

耳に残る甲高い声は少女のものだ。

(え!?)

隣のベッドに諒がいない。ドアが開いたままになっている。床に落ちた毛布。

「！」
何かあった。亮介は部屋をとび出した。
「どうしたの!?」
女の子部屋の扉も開け放たれていた。パジャマ姿の亜衣がふりむく。
「彩ちゃんが」
彩の姿がない。冴子も。
「出ていっちゃったの、外に！　今、水沢君が追いかけて」
「外!?」
突然悲鳴をあげたと思ったら、制止する間もなかったのだという。
「わかった、俺も行ってみる。危ないから待ってて」
階段を冴子が駆けあがってきた。
「亮介ちゃん、懐中電灯」
「サンキュ」
とりあえず手近な上着をひっかけて亮介は玄関へ向かった。ドアまで冴子がついてくる。
「どっちに行ったの、諒は」
「庭じゃないわ、門を出たはずよ」
悪い夢を見たのよ、と別れぎわに冴子は呟いた。懐中電灯を受け取って亮介は真っ暗な庭に

走り出た。

（悪い夢……？）

ではあの叫びはやはり彩のものなのか。するとあの夢は、彩が見たものを自分も共有したということだろうか。昼間見た幻覚のこともある。彩の精神は強い影響力を持ち、そして亮介は特にそれを受けやすいようだ。考えられないことではなかった。

屋敷を離れると、どっぷりと闇だけが広がった。街灯のひとつもないのだから、東京の夜とはわけが違う。せいぜい頼れるのは月光くらいか。おまけに深い山の中だ。もしも彩が迷いこんでしまっていたら……。

門は開いていた。そこからは三方に道が分かれる。生い茂る木々におし潰されそうな山道。人の気配はまるでわからず、静寂だけがのしかかる。しばし足が止まった。

思いついて、亮介は懐中電灯のスイッチを切った。

塀に沿ってずっと目をこらす。

「諒！」

闇の中にぼんやりと、透明な影。なじんだオーラだ。

「亮介……」

点けなおしたライトの光に照らし出されて、諒が駆けよってきた。

「いないのか？」

「わからない……」

見失ったのか。どきりとするほど弱気な声は諒のものとも思えなかった。――それは駄目だ。諒が諦めては駄目だ。亮介はぐいとその腕をつかんだ。

「しっかりしろ！　大丈夫だから！」

怒鳴りつけていた。目をさましたように諒が顔を上げた。

諒の腕をつかんだまま亮介は明かりを消した。暗闇に全神経を向けてめぐらせる。じわじわと目が慣れる。星あかり。……わかるか？

「この先！　まっすぐだ！」

見えた。亮介の声に反応して諒が走りだす。亮介もそれを追った。

とらえたのは、彩のオーラ。術力を行使しているわけでもない――術者でもない彼女の気を感じるのは本来至難の業のはずだった。自信などはじめからありはしない。やってみたらできたというのが正しい。

感覚を集中したせいか、夜道を走るのもさほどつらくない。案外、月光というのは明るいものだと思えた。

そういえば無我夢中で諒にすごいことを言ってのけたな、と亮介は気づいた。深く考えると怖い……。このところ自分は大言壮語ばかりしている。

「!?」

諒が立ち止まった。
道の真ん中。彩の後ろ姿が植物のようにひそやかに立ち尽くしている。それから。
追いついて亮介も息を呑んだ。
裸足のままの彩は動揺のかけらも残さず静まって——彼女の視線の先に、すらりと高いもうひとつの影。
「……誰だ？」
おしころした声で諒が尋ねた。
返答はない。すうっとその影が揺れたように見えた。
彩の瞳が貫くようにそれを見ている。
亮介がそっと懐中電灯の光を向けた。彩から十歩も離れているだろうか。黒い服。ジーンズ。ひどく傷んで、ぼろぼろだ。
かすかに眩しげに目を細めたのは、若い男。
「誰だ？」
諒が繰り返した。いつでも抗戦できる構えで、彩をかばって前に出る。
「……私、は……」
ぽつりと、男が呟いた。
抑揚のない、妙にかすれた声だった。低い。

言いかけて、口をつぐんだ。

「――？」

困惑の色がごくわずかにその表情に現れた。自分自身をあやしむような反応。

ふわりと彼は自分の右手を持ちあげた。掌を見つめ、その存在を確かめる。深く思惟に沈みこむ瞳。

よくわからないまま亮介はそれを見守っていた。二十歳くらいだろうか。若いが、しかしどう見ても少年の域は脱している。

端整というのか、むしろ繊細な顔だちは、けれど他人に対する親しみの念をまるで欠いている。突き放している。自分にかまうなと言わんばかりだ。

痩せた体がぐらりとよろめいた。

「ちょっ……」

反射的に諒が手をのばした。諒とほとんど変わらぬ長身がずるっと崩れて倒れこんだ。

「なんだ、こいつ……？」

肩で支えて、諒が眉をひそめた。意識を失っている。

こんな山奥をこんな時間にうろつく者など……どう考えてもまともじゃなかった。全身から疲れはてた様子が伝わる。何者か見当もつかない。

「まさか迷子ってわけでもないだろーに……」

ひとりごちて、よいしょ、と抱え上げる。放っておくわけにもいかない。

「どうする？」

亮介が問いかけた。

「とりあえず、朝まではどうしようもないでしょ。わけがわからんわ」

「うん……」

なんだか本当に、頭が事態についていけない。亮介は彩をふりむいた。とにかく彼女に何もなかっただけで良しとするべきか。

落ちついてみると冷えこみがすさまじい。彩はパジャマ一枚だ。亮介は慌てて上着を脱ぎ、彩の肩に着せかけた。

「彩ちゃん」

戻ろう、と呼びかけて、彩の視線がひたすらまっすぐにその青年を射ていることに亮介は気づいた。

それは一抹の不安を呼び起こした。

三日目——とても簡単な、たったひとつの真実

I

「なーんか、変なことになってきたなあ」
ずずず、とコーヒーをすすって諒が呟いた。
結局、寝直すこともできなくて、居間のテーブルで夜明かししてしまった。鳥のさえずりが遠くに聞こえる。亮介は肩をすくめながらストーブのほうを見やった。
急遽運びおろして広げた布団に、例の青年が横たわっている。
夜が明けても一向に目覚める気配はない。怪我をしているわけではないし、生命の危機、という様子でもないので、冴子の能力に頼ることもできない。とにかく眠らせておくしかないようだ。
彩を寝ませたほうがいい、ということで冴子たちは上の部屋に戻っている。
「……あのさ」
少し間をおいて、亮介が切りだした。

「誰かが思ってることとか、見てる夢とかさ、そういうのがこう……まるごと見える、みたいな力って、術者にはあるのかな」

「テレパシーみたいなやつか？」

眉をひそめて諒がテーブルにひじをつく。

「さあどうでしょうねー……。現実にそういうことはあると思うんだけどさ。同じ夢を見るとか、虫の知らせとか。でもそれが術者の、術力を使ったものかどうかはわからんでしょ。そもそも術者の数そのものがえらく少ないから実例がないし」

「そっか……」

「まあ亮介くらい感覚が強かったら、そんなこともできるかもしれないけどさ。なんたって桁外れじゃん、亮介の感覚って」

なにやら自分のことのように自慢げにそう言うと、諒は亮介を見おろしてふと微妙な表情になった。亮介が考えこんでいるのに気づいたのだ。

「見たくないな、そんなの」

囁くように小さく、亮介が言った。

諒は口をつぐんでそれを見る。

「そういうのは……ずるいし、汚いよ……。絶対見られたくないことかもしれないし——実際、どんなことでも見たら辛いし……」

本当は、気を見ることさえ卑怯な行為と言って言えないこともないのだ。

意識して注視すれば、そのオーラの状態で本人が元気かどうか、悩んでいたりはしないか、誰かを恨んでいたりはしないか……漠然とわかってしまうことがある。常時ではないにせよ。無意識に感覚を働かせて相手をさぐろうとしている自分に気づく時など、たまらない。眼鏡はもう使わなくていいだろうと忍には言われたが、不安になるのはそのせいだ。やはり自分にはそういった枷が必要なのではないか。

ましてはっきりと映像として意識が伝わってしまうと、これはもう間違いなく覗き見と同じだ。大切なものに土足で踏みこむのと同じだ。先日の事件で希沙良や十九郎の意識に感応した時は正体のわからぬ痛みばかりを覚えたが、今度の彩のことでそれが何だったのか、何が辛かったのか……答えが見えてしまった。

「ふむ」

諒が息をついて目を上げた。

「ま、確かにいつもいつも考えてることが筒抜けだったら大変だけどさ、とりあえずそういうわけでもないし。おまけに亮介君はそのへん自分に厳しい人だと俺は確信しておるし。いいんじゃないでしょーか」

「でも」

それでは片づかない。現に自分は今おまえの中に踏みこみかねないような奴なんだから、と

亮介は胸中で呟く。

諒は知らないのだ。自分が何を見たのか、何を彩と共有したのか。あれはきっと——いや絶対に、諒にとって触れることも触れられることも耐えがたい記憶の領域。

炎のイメージュ。

「まあ聞きなさいって。だいたいね、術力なんてのはそんなに便利で万能なもんじゃありません。所詮は人間の力なんだからさ。それよりも俺はその、一般的なテレパシーのほうがすごいと思うんですが」

「一般的？」

「だから術力と全然関係ないってこと。つまりねえ……極端なことを言ってしまえば、優しい人はみんなテレパシストだと思うんですよ、俺は」

「へ？」

なんだか突飛なほうに話がすっとんだ。亮介はぽかんと諒を見上げた。

「だってさ、優しい人というのは要するに思いやりのある人だと俺は思うんだけど、この思いやりというやつは、相手が今なに考えてんのかなあってことをその時のそいつの顔とか雰囲気とか状況とか全部ひっくるめてだーっとぶちこんで、それであっこいつ今こんなこと考えてるなって結論を出すわけでしょ。つまり相手が何も言わなくても考えてることがわかるという。これはテレパシーと呼べないだろうか、いや呼べる。反語」

「……はあ」

「すると思いやりを持った優しい人がさらに特に心配な人とか大切な人とか好きな人のことをものすごく思いやったら、目の前にいなくても相手の考えてることがわかってしまうかもしれないではないか。気にするあまり夢なんかも見てしまうかもしれない」

実に簡単明瞭な語り口で諒が続ける。

「で……まあ、亮介が見たものはさ……何を見たかなんて俺は聞きませんけどね、例えば彩のことを言うなら、もしかしたらそれは彩の見たものとは違うかもしれないではないですか。証拠なんてないからさ。しかしだ、彩のことを亮介が、夢に見るほど心配していたという、これは確かでしょ。本当でしょ。そのことだけで、俺は大変に嬉しいんですが」

「――」

「こないだのきーさんのことにしたって、別におまえさん、きーさん本人に『さっきこれこれって思ってたでしょ』なんて確かめたわけじゃないでしょ、まさか。ただ状況からかんがみて亮介君本人がそれ以外考えられないって判断した『今こんなこと考えてるな』かもしんないでしょ、それは。人の心がわかるってのはそういうことだし、せいぜいその程度のことでしかないのよ」

こういう時、やけにきっぱりと断言するのが諒の癖だ。迷いもためらいも見せない。自信に満ちた言葉に聞こえる。人によっては傲慢ととるかもしれない。……違うのだ。亮介

は知っている。これは違う。自分が欲しがっている言葉を欲しがっている言い方でくれるために、諒は。

「以上のことから言えることはだ、亮介君は非常に優しいということですね。うむうむ」

勝手に頷きながら、諒はぽんぽんと亮介の背中を叩く。亮介は一瞬言葉をつまらせた。

「……んなことないよ」

「あります。諒ちゃんの論理的な頭脳を疑うのですかキミは」

「おまえ、証明問題苦手だったじゃん」

「数学の話をするなというのにっ。なんでそんなこと憶えてるんだおまえは！　早く忘れなさい！　――違うっ。話をそらすな馬鹿者っ」

諒が叱りつけ、亮介はテーブルに顔を伏せてくすくすと笑った。かなわない。

優しいのは自分なんかじゃない。こんな風に自分を楽にしてくれる諒のほうだ。これだから諒にはいつもかなわない。

「あら。お邪魔だったかしら」

よくわからない発言とともに冴子が階段をおりてきた。

「何を言うておる」

憮然として諒がふりかえる。亮介は対決を未然に防がんとして慌てて割りこんだ。

「あっ、おはようっ」

「おはよ、亮介ちゃん」
「も少し寝てていいぞー。俺が許可する」
「何言ってんのよ、もう八時よ、八時。朝御飯どーすんのよ」
にっこりと亮介に笑いかけたと思うと、冴子は思いきり冷ややかな目を諒に向ける。やれやれと亮介は天を仰いだ。
「あとふたりは？」
「もうすぐ降りてくるわよ。――で、どうなの？　彼」
諒の問いに答えて、それから冴子はおもむろに視線を転じた。
「いっさい変化なし」
両手をあげてみせて、諒が言う。冴子はストーブの傍らに眠る「彼」に歩みより、そっと枕元に膝をついた。様子をみるため、額に手をのばそうとした。瞬間――。
疾風。まるで暗殺者から身をかわすような動きで青年が身を起こした。冴子が息を呑んだ。
諒が椅子を蹴って立ちあがり駆けよろうとする。
ひどく間近から冴子を見上げて、彼は動きを止めた。
床に手をつき上体を半分起こした姿勢。冴子の瞳をのぞきこむ。短い沈黙。いぶかしげに、食い入るように。
「……あなたは？」

「え？」

低く問う声。冴子が思わず聞き返した。

「……違うのですか？」

その場の誰にも意味のつかめぬ呟き。なにか息づまる切迫感があった。魅入られるように彼を見つめかえし冴子も動けない。

ふっ、と青年が両の眼を細めた。

雰囲気ががらりと変わる。冴子から目をそらし一瞥もしない。ゆっくりと床に座りなおし、姿勢を正した。無駄や隙のまるでない動きだ、と亮介は気づいた。

「失礼を、致してしまったようです」

視線を下に落としたまま、ぽつりと彼が言った。

その言葉でようやく部屋の空気が溶けた。我に返ったように諒が前髪をかきあげる。

「ああびっくりした」

どこか間の抜けた独り言とともに、青年に近づく。布団の際まで行って、目の高さを揃えるためしゃがみこんだ。

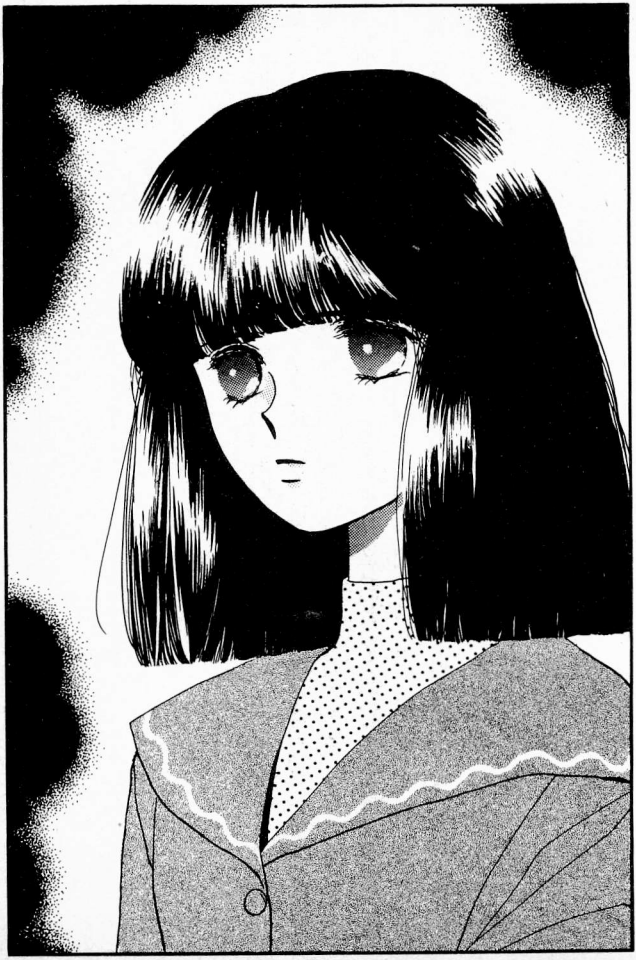
「勝手に連れこんじゃいましたが、よろしかったんでしょーか」

「……よくわかりません」

諒の問いに、彼は要領を得ない答えを返す。

「わからない？」
「はい」
涼は冴子と目を見合わせた。
無表情に口を閉ざし、青年はじっと端座（たんざ）している。
状況を自発的に説明しようとする親切心はどうやらないようだ。えーと、と涼はため息まじりに呟いた。
「……つまりその……例えばですね、真夜中にこんな山奥にひとりきりでいらっしゃったという件については、何か深いわけでもあるんですかね」
「わかりません」
「へ？」
「憶えて、いないんです」
彼は誰とも目を合わせようとしない。
深みのあるハスキーなバリトン。
「あなた方にお会いしたことは、わかります。憶えています。……その前は、わかりません」
ひとつひとつ言葉を区切る話し方。
「……そいつはまた」
涼が顔をしかめた。これはどうも面倒なことになってきた。

「せめて何かその……身元のこととかですね……」
「――牙、です」
唐突に彼が言った。
「は？」
三人が三人ともついていきかねた。脈絡はどこへ行ったのか。
「……牙……だと、思います。多分、それが名前です」
相手の反応にはまったくかまわず、青年がそう続ける。
（キバ……？）
ずいぶん変わった名前だ。微妙な違和感を覚えて亮介は首をかしげた。違和感というのか既視感というのか……何かがひっかかる感覚。
「！」
彼が顔を上げた。鋭い空気。
視線がぶつかった。部屋の入り口に立つ彩が正面から彼を見返していた。
言葉はない。
しかし間を置かず、目を伏せたのは青年のほうだった。それはまるで彩の姿から逃げるような動きに見えた。



「記憶喪失……とか？」
亜衣が小声で尋ねる。キッチンの片隅。
「さあ……。しかしそんなこと滅多にないと思うんだけどさ」
亮介は肩をすくめた。
とりあえず朝食を兼ねながら、諒と冴子があの手この手で青年の記憶をひきずり出そうとしたことはしたのだが……「牙」と名乗る彼のほうは、出された料理にはいっさい手をつけぬまま、すべての質問に対しても「わからない」の一点張りで通したのである。つっぱねるでもなく心細い顔を見せるでもなく、ひたすら淡々とそれを言われると訊いているほうが参ってくる。諒は何度も「いちぬけた」を言いかけては冴子に睨まれて逃亡に失敗していた。亮介は食器をさげる亜衣につきあってキッチンまで逃げのびたのだ。——恨めしげに見送った諒の目が忘れられない。
「亜衣ちゃんはどう思う？　彼」
声をひそめて訊いてみる。
「あ……カッコいいなあ、とか」
「あのー。それはちょっと……」

無邪気に答えられてしまって亮介はがっくりと脱力した。
「それは？」
上目づかいに亜衣が見上げる。
むむ、と亮介は言葉につまった。これは……狙われていたのか。
「それは……」
亜衣が待ちかまえている。ずるいぞ、と心中で唸りながら亮介は台詞を押し出す。
「それは困ります、俺が」
「やだな。そういうんじゃないのに」
ほっとしたように笑顔になって亜衣が言う。ぐしゃぐしゃと亮介は前髪をかきあげた。
（まったく……）
なんだかんだ言って、しっかり主導権は向こうに行っているのだ。役者が違うのだろうか。
「カッコいいっていうか……あのね、誰かに似てない？　あの人」
「え？」
思いもよらないことを言われて亮介ははたと顔を上げた。
「何？　誰？　俺の知ってる人？」
「うん……多分」
「芸能人とかじゃなくて？」

「ちょっとわからないんだけど……でも絶対、第一印象で思ったんだけど。誰か、すごくよく知ってる人」

「……？」

そう言われても、誰も思いあたらない。亮介はドアのところまで行って、「牙」にそっと目を向けた。大人っぽくて静かで無愛想で……孤高の空気。

そこまでいってふとある人物の名が浮かんだが、しかしお世辞にも似ているとは言えぬ人物で、亮介はいやいやとそれを打ち消した。顔だちからしてまるで違うし、そもそもあの人に比肩して美しい人間などこの世に存在するとも思えない。

決定的に違うのは、輝きだ。

あの人から伝わるのは圧迫されるほどの輝き。戦慄さえ覚える刹那の煌き。闇にかざした白刃の閃き。凍りつくほどに鋭くて、かなしいほどに眩しくて。——牙にはその光がないのだ。一片たりとも。

「こりゃやっぱり警察に届けますかー？」

テーブルに貼りついて諒が呻いた。

「そうねえ……事故かなんかに遭った可能性高いし」

息をつきながら冴子が答える。

「牙、っていうのもなんだか通り名っぽいじゃない。本名じゃないと思うのよねえ」

彩はひっそりと椅子に身をおさめて、テーブルの板を見つめている。
牙がつと目を上げた。
「ご迷惑を、おかけするわけにはいきません。私は出ていきますから、どうぞおかまいなく」
「出ていくったってあんたね、その後どこ行くの」
唖然として諒が身を起こす。まるで他人事のように牙が呟いた。
「さあ……」
——すべてを流し去って、自分自身まで捨ててかまわぬと……言わんばかりの、その響き。
「ちょっと待て、こらこら」
「飢えて死ぬわよ、そんなこと言ってたら」
諒と冴子が同時に声をあげる。
聞き入れる様子もなく、牙は目を伏せて黙りこんだ。と、その動きに重なるように。
ふうっ、と彩が動いた。
サイレントの映画を見ているようだった。透明な瞳を上げ、それからゆっくりと顔を起こし、じわじわと左の腕を持ちあげ、静まった空気にその腕が浮いて、迷いもなく確実に直線を描き、いささかのぎごちなさもなくひどく自然に——。
彩の手が牙の腕をつかんだ。
雷撃にうたれて牙が彼女を見つめかえす。信じられぬものを見る表情。

目前で何が起きているのか把握しきれず、諒と冴子は動けずにいる。
テーブルの上に彩が身をのりだした。牙は見ている。
「……どこに、置いてきたの？」
腕をしっかりとつかんだまま、彩が言った。
幼さを含みながら、果てしなく大人びてすべてを悟りきったようにも聞こえる、不可思議な問いかけ。か細く、高く、力弱く、穏やかで。
牙が何かを言いかけた。彩が言葉を続けた。
「牙の、影」
空白に、余韻。
確かにその時、部屋は真空と化した。
「――」
亮介に並んだ亜衣が叫びをあげかけて喉を押さえた。声が出ない。
冴子がガタッと椅子を鳴らした。
「彩っ」
鋭く呼んで諒が彩を抱きよせ、牙からひきはがした。テーブルからとびのく。
腕にしがみつく亜衣を反射的に自分の身でかばいながら、亮介は牙から目をそらせずにいた。

牙は動いていない。テーブルについたまま、引き離された彩に漠然とした目を向け、テーブルの上に置いた己の手に視線を転じて、そして片手をそっとかざしてみる。

窓を背にして座る彼は日光を容赦なく浴びて——けれどそこに当然生まれるはずの陰影は。

彼の影は。

「まいったね、これは……」

低く、抑えた声で諒が呟く。

「何者だよ、おまえ……。何のつもりでここに近づいた？」

影を持たぬ人間など、存在するわけがない。

それを可能とするのは、人外の者のみ。つまり。

（妖の者……？）

あれ、と亮介は思った。

〈妖の者〉にも影はできる。人の体に憑依している限り。

するといわゆる精神体というやつか。または〈妖の者〉にとって分身のような意味を持ち、その身を妖力により形成される〈影〉か。しかしそれらがこんなに克明な姿を持ち人格を持つものなのか。第一、牙の姿は亜衣にも見えているのだ。本来、精神体のままの〈妖の者〉や実体の不鮮明な〈影〉なんて、術者にもなかなか見えないものなのに。

そして何よりも、妖気の不在。牙からはそういった気配が何も伝わってこない。自分の感覚

が及ばないのか。彼が巧妙に隠匿しているのか。それとも……それとも？

「諒」

声を落として、亮介は呼びかけた。

「なんだか変だ。……違うんじゃないか」

「え？」

「オーラが全然見えない」

彩の肩を抱えたまま、諒が口をつぐんでふりむいた。

牙は自分の指を見つめて、端然と背筋をのばし、ただ座っている。それを見ながら亮介は重ねて言った。

「〈妖の者〉じゃないし術者でもない。〈影〉とも違う……そんな気がする」

もちろん、これは亮介の主観だ。正しいなどという保証はない。

諒はしばし沈黙して、眉をひそめ立ち尽くした。身構えた姿勢からは力を抜き、しかし張りつめた神経はゆるめない。

「……言われてみると、そうだわ、確かに。あたしもそう思うわ」

ぽつりと冴子が言った。

「〈妖の者〉ならもう少し、その匂いみたいなものがあるはずよ」

「……」

肩を抱く指にこもった力。
一瞬の間をおいて、諒は大きく息をついた。彩からその手をそうっと離す。
「ま、いいでしょう。亮介君の感覚を信じましょう」
「なにひがんでるのよ」
「黙ってろ、冴子」
冗談めかした冴子の嫌味を、諒がいつになく冷淡に切り捨てた。ふりむきもしない。冴子がわずかに目を瞠った。
「忍に連絡してみる」
短く言って、諒は玄関脇の電話へ向かう。
亮介は冴子に目をやった。冴子は表情のない顔で亮介を見返る。反応のしようがないのだ。それは亮介も同じだった。
「……そうですか……」
誰に言うともなく、牙が静かに——虚ろに、呟いた。
「私は、どうやら……間違えてしまったようですね……」

Ⅱ

少々できすぎの感がある。亮介はぼんやりとそう思った。

滅多にいない「術者」――しかも三人も揃っている――が、たまたまやってきた軽井沢で「人間以外」に偶然出会う、なんてことはそうそうないような気がする。ものすごい確率を狙いすましてころがりこんできたような事態だ。こちらのほうは言ってしまえば人外の者に対して多少の免疫はあるし、牙にとってもこういう連中と遭遇したのは結構ラッキーだったのではと思える。

（……ひっかかるなー……）

何が、と言われても困るがどうも釈然としない。

「あんのボケっ」

がしゃん、と諒が受話器を叩きつけた。これで三度目だ。

やれやれと思いつつ亮介は玄関先に出てみた。ダイヤル式の黒電話の前で諒がきりきりと歯

を鳴らしている。
「駄目なのか？」
「留守電にもなっとらんのだ。許せん」
こんな時に限って、というやつで東京の忍にはどうしたことか電話がつながらない。時間をおいて何度かかけなおしているのだが、単調な呼び出し音が空しく響くだけだ。まさかいやがらせではあるまいが。
「んにゃ、あいつは俺をいじめるためなら手段は選ばんぞ」
妙に確信をこめて諒が言う。目が据わっている。
「そ……そんな、いくらなんでも……」
「そーゆー奴なのっ。あいつはっ。いきなり常識すっとばす奴なのっ」
ほとんど投げやりである。相当根深いものがあると見た。亮介は小さくため息をついた。
「あーもーやめた。頭きた」
床に座りこんで諒が唸った。そのままごろんと板張りの上に横倒しになってしまう。
「東京のほうでなんかあったのかもしれないじゃん」
亮介はその脇にしゃがみこんだ。床は冷えびえとしている。
べたっと転がったまま諒は答えない。
「里見さんあたりに訊いてみようか？　あの人、家にいるはずだから」

「んー。やめときましょう。お勉強の邪魔だわ」
「邪魔ったって……もし一大事でも起きてたら」
「そしたら忍のほうから連絡してくるのが筋でしょうがっ。違うか!?」
頭だけ持ちあげて諒が噛みつくように言った。亮介は口をつぐむ。
亮介と目を合わせて、ふっと諒が表情を変えた。言葉を呑みこんだ。
「……どうした？」
床に腰をおろし、そっと亮介がその顔を覗きこむ。
真顔になって諒がそれを見上げた。
微かな声。
「胃が痛い。死にそう」
「え、えっ？」
「嘘」
身をのりだす亮介にクスッと笑ってみせて諒は起きあがり座りなおす。亮介は言葉を切ったままその動きを見守った。
「亮介君。そこで黙りこまないように」
「あ、えっと……」
いたずらっぽい諒の口調。一瞬口ごもってから、亮介は諒を睨み返した。

「嘘つき」
「すみません」
諒は首をすくめる。
いいかげん限界なのだろうか。亮介はそんなことを思っていた。彩のことだけで手一杯のところに牙まで現れて、ストレスが許容範囲を超えてはいないか。
もちろん諒はひどく努力しているのだ。今までのように。意固地なまでに。決してそんな素振りは見せまいとしているのだ。しているのだが、それでも覆いつくせぬところまで余裕は崩れてしまっている。きっと冴子にもそれはわかっている。わかるけれど口に出して問うこともできなくて……。
（なんでそんなに……）
少なくともさっきまでは——牙が人間でないとわかるまでは、諒もこれほど神経を尖らせていなかったはずだ。
牙に対してそれほど懸念を抱く必要はあるのだろうか。何にこだわっているのか。何が気に入らないのか。亮介は見ていることしかできない。忍がいてくれたらまだよかったのに。
「壁の穴ふさぎでもやってきますか」
投げ捨てるように言って諒が立ちあがり、靴を履く。亮介は思わず手をのばした。
袖をつかまれて諒がふりむいた。

「あ……」
亮介が言いよどむ。
刺さる痛み。
くるしい――。
「手伝おう、か？」
胸。喉が。
張りつめてささくれた何かが。ある。確かにある。
諒の内に。
「いいよ」
やわらかく言って諒が腕をふりほどいた。離れる指。
「あいつ。見てて」
さとすような、言葉。
「わかった……」
それは諒の懇願だ。亮介は頷いた。近づいたらいけない。ひとりにして。
触れられたら傷になる。
「では」
ちらりと手を振って諒は出て行った。扉が閉まり陽光を遮った。

「外？」
亮介を見るなり冴子が訊いた。諒のことを言っているのだ。
「壁をね……」
亮介も言葉少なに答える。テーブルに歩みより、椅子を引く。
「そう」
頬杖をついて呟く冴子の声。
テーブルには、冴子と亜衣と亮介の三人。彩はストーブの脇にクッションを置いて、すとんと座りこんでいる。それから。
部屋の隅に、長身をもてあますように片膝を抱えて、牙がいる。
ずっと無言だ。飲食もしない。触れれば実体があり体温も感じるのに、確かめてみたら脈もなかった。つまり心臓がないのだ。呼吸はするが、それは一種のカムフラージュで、息をしなくても生きて（？）いられるらしい。こんな存在を世に出したりしたら大変だ。たちまち大騒ぎになってしまう。
放っておくよりは自分たちで保護しておくべきだ、と冴子は言った。実際、人に害をなさない、という確証はまだないのだ。何かが起こってからでは遅い。多少危険かもしれないが、ま

がりなりにもこちらはその手のモノに関するプロフェッショナルなのだから、相応の対処はせねばなるまい。

「忍様がつかまらないってのは痛いわね……」

ウェーブの髪に指をからませながら冴子が息をつく。

「こういうことって、よくあるの？」

「時々ね。実は」

亮介の問いに、少し顔をしかめて答える。忍の動きを完全に把握しているわけではないのだ、彼女も。

「仕事とかじゃないのかな」

「……あのね、亮介ちゃん……こういう風に言って信じてもらえるかわからないけど」

ばさっ、と髪を払って冴子は顔を上げた。

「用事があるってはじめからわかってどう考えても今はいないって時に、それでもどうしても言わなきゃならないことがあって無駄を承知で電話したとするわね。そうすると、何故(なぜ)かちゃんと出てくれるような人なのよ、忍様って。距離も時間も関係なしに、何もかも読んでるような人よ。そういう人がこんな風に外からの働きかけをシャットアウトするのは、それはそれで必ず何かを狙ってるからなの。何の意図もなくあの人が動くなんて考えられないし、今までそんなこと一度もなかったわ。だからこのことにも絶対に意味があるはずなのよ」

「意味……って言ったって……」
電話に出ないことになんの意図があるというのか。亮介は言葉を途切らせた。全然わからない。亜衣が隣でかすかに眉をひそめた。
「それが何かは自分で考えろってことよ」
冴子が言う。それは厳しいな、と亮介は心中で呟く。反論はできないが。
「……それでいいのかな」
ぽつりと、亜衣が口を開いた。冴子と亮介が同時に目を向ける。
「そういうのってわかるけど……あたしも忍さんが凄い人だってことはわかるんだけど、でも何もかも完璧に全部見通しちゃって絶対に間違わない人だって……そこまで決めつけちゃったら、忍さん……重荷にならない？」
「――」
冴子が表情を変えぬまま沈黙する。
「だってもし本当に、まわりのこと、これから起きること、全部わかっちゃったら……わかってることをなぞるだけで生きてるんじゃ、それってたまらないと思わない？　そんな風に生きていても虚しいだけじゃない？　忍さんにだって見えないものはあるはずよ。そうでなくちゃ辛すぎるわよ。精神的に耐えられないわよ。そんな人があんなに自然に笑っていられるなんて……それこそ変じゃない？」

「それでも生きてなきゃならないのよ、あの人は……」

独り言のように、低く、冴子が言った。亜衣が言葉をつまらせた。

ぞっとするほど絶望的なその声。

「気が狂っても、どんなに苦しくても、人に責められても——わかってて何もしなかったことで誰かがあの人を責めても——忍様は生きていなければいけないの。絶対にいなくなってはいけないの。そういう風に決められているの。そういう風に生まれてしまった人なのよ。苦しいなんて言ってはいけない。弱音を吐くことは、救いを求めることは、心を見せることは許されない。それを要求されて、その要求を受け容れることもできてしまった人なのよ。完璧でいろと言われて、本当に完璧でいる人よ。それを崩したら忍様は忍様でなくなってしまう。完璧なんてあり得ないって言う人もいるし、あの人はもうとうに狂っているんだって言う奴もいるわよ。でもあたしは、あたしだけは——他の連中が何を言っても、いつか忍様から離れていっても、安全なところに逃げていっても、あたしだけは、死んでも、絶対、最後まで……！」

小刻みに震える。髪が。声が。指が。

「……あたしだけはあの人についていく。独りにしない。逃げない！　どんなに辛くても離れない！　だって……だってそうしなきゃあの人は……あの人はずっと……どこにも……そのまま……少しずつ自分を狂わせて……」

両手で顔を覆って冴子が——。

テーブルに落ちた涙を見て亮介は絶句した。冴子は泣いている。
「冴子さ……あたし……」
椅子を鳴らして亜衣が立ちあがった。
「ごめんなさい、あたし馬鹿なこと……」
肩を震わせながら冴子がかぶりを振る。
亜衣がその肩に手をのばした。痛みの塊を呑みこんだ表情。
「……うん、平気……亜衣ちゃんのせいじゃないの……」
囁くように、冴子が言った。
「いろいろあって……なんだか……違うの」
「うん……」
「駄目だなあ……ふふ」
小さく笑って涙を拭う。
「ごめんね。泣いたりして」
目を上げると、もういつもの冴子に戻っていた。のぞきこむ亜衣には憂いの色が残る。ぽん、と冴子はその腕を叩いた。
「平気。ごめんね」
それから目を伏せて、ゆっくりと立ち上がる。

「あたし、上に行ってていい？」
これは亮介に訊いているのだ。牙に対する警戒。亮介はこくりと頷いた。
「いいよ。大丈夫」
「ありがと」
あでやかに笑んで、冴子はふわりと身をひるがえし階段へ向かっていった。
気づかわしげな瞳で亜衣が肩ごしに亮介をふりかえる。亮介は、複雑な沈黙しか返せなかった。

自分の身を包む空間だけが一切の現界より遊離しているようだ。
壁に背をつけ床に座りこんでも、己が身に触れるそれらに確かな実感を覚えることができない。何もかもが遠い。そこに自分との接点は何もない。
何故、目醒めてしまったのだろう。
彼はぼんやりと眠前の世界を眺めた。人が動き、時間が動く。
しかしそれは自分だけをとりのこしていくのだ。
どこへ行こう。どこへ戻ろう。足がかりとなる記憶はまるで残されていない。自分はどこにいたのだろう。眠りについていたはず。何かひどく悲しくて、悲しくて悲しくて、凍りつくほ

ど悲しくて——眠りについていたはず。
何が妨げた？　誰が呼んだのか。誰かが自分を呼んだのだ……牙、と。
出会えると思ったのに。出会えると思ったのに。自分はどこかでとんでもなく間違えてしまったのではないのか？
牙は顔を上げた。人影。
「少し……話を聞いていいかな」
遠慮がちに問うのは、確か亮介という名の少年。
「どうぞ」
見れば、この居間に残るのは亮介と、あとひとり、人形のように座る少女だけである。無関心のまま牙は頷いた。
「暇になっちゃったからさ」
そう言って、亮介は床に腰をおろす。
自分とは世界を異にする存在。
どこかさめた目でしか彼を見返せなくて、今さら話すべきこともなくて、牙はそのまま沈黙を保った。
「ちょっと、腕、見せて」
亮介が手を差し出す。

意図は読めぬまま断る理由もなくて応じたら、すっと袖口を指でなぞられた。
「ずいぶん傷んでるわりに、そんなに古くないよね」
服のことを言っているのだ。
「布地の感じとか……全然ヘンじゃないし違和感もないし、こんな風に重さも感じるし」
そんなに腕一本だけをつらつら眺めないでくれないか、と言いたくなるが、見ているほうはなにやら真剣で口出しをしにくい。まあ、好きにすればいいのだ、珍しいのなら……。
「あの、さ……」
亮介が目を上げて牙を見た。
牙は視線だけを彼に返す。
「うまく言えないけど……俺はね、牙のこと、そんなに警戒しなくていいと思うんだよね……。人間じゃないから敵だ、とかって絶対違うと思うしね、現にこうして目の前に牙がいるのを見ていて、本当なら怖いとかそういう感じがあってもいいはずなのに全然ないしね。なんかそれを信じたいような気がして、少し……なんていうのかな……」
「……物おじ、なさらない方ですね」
亮介の手から自分の腕を取り戻しながら、ぽつりと牙は言った。
「え!?　俺？　とんでもない、俺すごく臆病で……」
いきなり亮介が慌てふためいて言い返す。よくわからない反応だ。

こちらはただ率直な感想を言っただけである。

「物おじはするんだ、俺！　すごくする。あ、だけど単に怖いもの知らずかもしんない。俺、世の中知らないから本当に怖いものってよく知らないし。そういう意味で言えば俺って臆病なくせに馬鹿ってことで……え？　なに言ってんだろ、俺……」

「……理屈は、わかりませんが……」

彼はきっと若いのだ、と牙は思う。その若さは決して不快なものではない。

「あなたの側に警戒がないのは、確かにわかります……そういうことです」

別にその言葉に何か好意的なニュアンスをこめたとか感情を乗せたとかいうことはなかった。

ないのに……。

「ありがとう」

ほっとしたように肩から力を抜いて、亮介がそう言った。

礼を言うようなことだろうか。牙にはわからない。

彼自身の言うとおりその無防備な姿勢は牙の正体を「知らない」ことに支えられているのかもしれないし、だとしたらそれは「知った」途端に掌をかえす無責任なものにすぎない。こちらはそれを否定も肯定もしていない。何をどう解釈したら自分に礼を言おうなどと言う気になれるのか。

いや……少し、違う。

牙はふと思いあたった。違う、それ以前のことだ。

彼は、自分が口を開いたことに対して礼を言ったのだ。

「……出ていくって、言ったよね」

亮介が言う。

「やっぱりそうしたい？」

視線の強さに牙は思わず目をそらした。ああ、彼もだ、と胸中で呟く。

彼の瞳も強すぎて、この身を貫き通してしまう。こんな瞳を自分は何度も見てきたように思う。……若武者。無垢で。残酷な純真。畏れを知らず、自身の価値も知らず……真の痛みも苦しみも知らず、それがゆえに……無謀な……繰り返して、何度も繰り返して、その犠牲の上にあの方はいつも……。

（え？）

はっと牙は我に返った。時間がひずんだような気がした。

「あ、いえ……私は、放置できぬと、そう言われましたから」

「様子を見ようってことだから、いつまでもそんな拘束してないと思うよ。どうせ俺たち、明後日には東京に帰るんだし、そしたら……」

どうする？　と亮介は訊いた。

そんなこと、考えてもいない。行きたい所などどこにもない。ただ、戻りたい。戻りたい。戻りたい。

どこへ？

「一緒に来る？」

「――」

愕然として牙は亮介を見返した。

本気で言っているのか。

「忍さんに頼めばなんとかなると思うんだけど……本当にね、ヘンな事の専門家みたいな人が何人かいるし……」

言葉が耳に入らない。何を言っているのかわからない。

駄目だ。行っては駄目だ。駄目だ、それだけは駄目だ。戻れなくなる。たどりつけなくなる！

「行けません」

きっぱりと、ひどく頑なに牙は言った。亮介が口をつぐんだ。

「……このままでは行けません」

「そっか……」

亮介は深くは追及しなかった。やや強引なもの言いを恥じるような気配がある。

「まあ、まだ時間はあるし……」

言いかけたところに、台所から亜衣が声をかけた。亮介はふりかえり、少し言葉を交わす。どうも亮介の手が必要らしい。

ぼんやりと見ていた牙に向きなおって、亮介が膝立ちになった。

「もう少し、何かわかってくればいいね。この先のことは、ゆっくり考えよう」

そう言って、立ちあがっていく。

年下の子供へ言うような言葉を使う。きっと本人は無意識なのだ。そんなところも彼らしい。牙は少しだけ可笑しくなった。

……可笑しい、なんてはじめての感情だ。

気づいて、牙は眉をひそめた。

なにか、不安定だ。なにかとても不安定だ。何かが起こりつつある。見えはじめている……の、か？　……わからない。

わからない……。

ゆっくりと牙は顔を上げ、もう一度この世界を……この空気を見つめた。

先刻と少しだけ違うのは、なんだろう……。

——ストーブの傍らで、少女はクッションに指を這わせている。

あれ以来、まったく口をきかない。動かない。あれだけまっすぐに踏みこんできておきなが

ら。

見るともなくその横顔を牙は視野に留める。

漆黒のくせのない髪。折れそうな肢体。

童とも女とも呼べぬ。微妙な境界。繊細に白い肌。崩れない姿勢。子供のようにクッションをもてあそんでいるのに、決して節度を失った動きを見せない。背筋にうなじに、凛と漂うものは何か。……巫女？

ふいと彩が目を向けた。

強い瞳。眩しげに目を細めながら、しかし牙は視線を逸がすことはしなかった。

髪と同様、漆黒の瞳。黒曜石だ。

あなたは何者なのか。

問いかけは、その瞳に反射されて我が身にはねかえる。辛い。重ねて牙は問うた。あなたは誰だ。

あなただけが違う。この世界、あなただけが違う。あなたもひとりなのか。

……わたし？　わたしは、わたし。

返答はふわりととらえどころがなく、すりぬけて逃げていく。

そうしてさらに牙に問う。あなたは？　あなたは。あなたは。あなたは。

反響。やめてくれ。辛い。自分には答えられない。あなたは強い。そうしてあなたは強いけ

れど、ここにいて強いけれど、自分は駄目なのだ。戻りたくて仕方がないのだ。頼むから訊かないでくれ。そんな風に尋ねないでくれ。

……牙は、いるね。

邪気もなく彼女は呟く。

牙は、ここに、いるね。

……存在。

自分が、ここにいるということ。

牙は繰り返す。

ここにいる？　……見えますか。

『見える』

確固たる証言。その声は明るい。

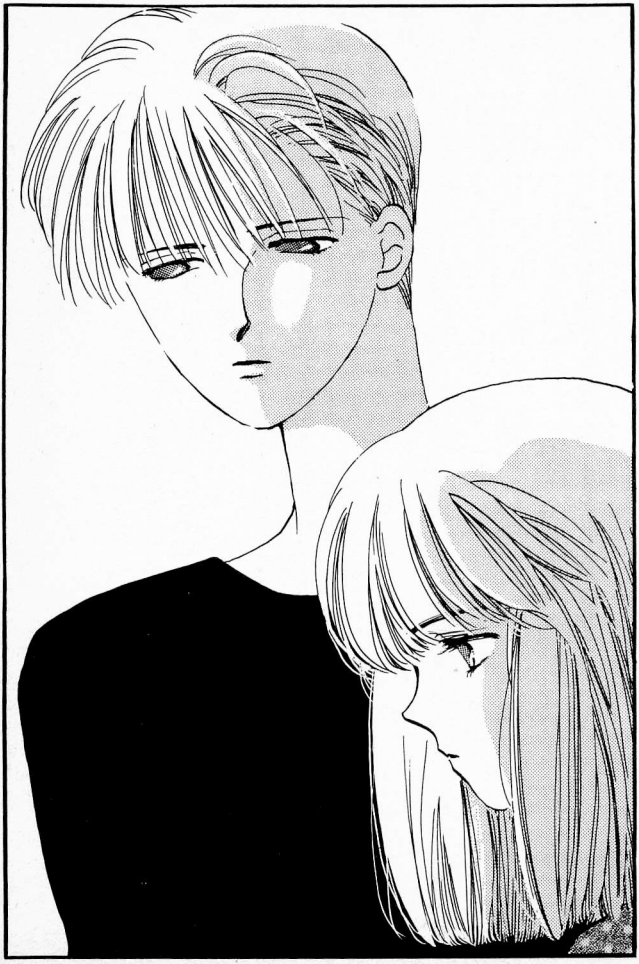
私はここにいますか。

『牙はここにいる』

あなたと一緒にいますか。

『一緒にいる』

本当に？　本当に。本当に？　これは何かの端緒。牙は手探りした。何かにたどりつけそう。何かがわかりそうだ。何かを感じている自分。



すぐ近くに、彼女の瞳がある。近づく。もっと。
ここにいる。触れて。確かめて。――
「貴様っ！」
糸が切れた。前触れもなく喉元をつかまれて牙は引き起こされた。世界が急転した。
自分は何をしていたのか。白昼夢？　がん、と背中から床に叩きつけられる。
「どういうつもりだ!?　彩に何をする気だった!?」
諒が怒鳴った。床に押さえこまれたまま牙は視線を泳がせた。すぐ真上から、怯えの色を孕んで彩がこちらを見おろしている。いつの間にこんなに近くまで自分は来ていたのか。驚愕の念が胸を占める。
「答えろ!!」
「知らない」
鋭く牙は言い返した。本当にわからないし、今のことを邪魔した彼に対して怒りが沸きあがりはじめていた。
「知らないで済むか！」
「わからない。少なくとも害意はない！　おまえが邪魔をしなければ!!」
声が激して、牙は諒の腕を振りはらった。するりと身を起こす。
「邪魔!?　よくもおまえそんなっ……！」

諒の拳は空を切った。風のような身のこなしで牙はそれを避け、さらに目にもとまらぬ勢いで相手の懐まで飛びこもうとした。

「諒！」

亮介の声で牙は我に返った。かろうじて止めた拳の前に、亮介が体ごと割りこんできた。

「やめろったら！　どうしたんだよ」

しがみつくように止めた亮介を突き放して諒が怒鳴る。

「こいつを見てろって言っただろ!?　なんで彩とふたりで放っといたりするんだよ！」

「牙が何かしたわけでもないじゃないか！　諒のほうがおかしいよ、牙のこと目の敵にして、わけなんかないのに手出して！」

「甘いんだよ！　甘いんだよおまえは！」

頭ごなしの諒の言葉。くっと亮介が唇を結んだ。

パン、と諒の頬で平手が鳴った。

「いいかげんにしろよ」

……低く、ひどく切なげに亮介が言う。

一瞬口をつぐんで、それから諒が何かを言いかけた。

「場所選びなさいよ、あんたたち」

冷静な声がそこに投げこまれた。亜衣に続いて、足早に冴子が階段を降りてくる。男たちに

は目もくれず、床に座りこんだままの彩に歩みよった。
見おろして、彩が必死に耳をふさいでいることに牙は気づいた。両の手でかたく耳を押さえ、がたがたと震えて小さくなっている。諒も亮介もそれを見て、はっとなった。
彩の肩を牙子が包むように抱きかかえて、小声で語りかける。
小刻みに震えながら彩は何かを呟いていた。泣きじゃくるようなその声。
「やだ……もうやだ……」
「彩ちゃん……平気よ、大丈夫よ」
「もうやだ……もう帰る……おうちに帰るっ……」
家へ帰る。
牙の内でその言葉は大きく響いた。帰る。帰りたい。帰れない。家なんてどこにもない。
……あなたも同じなのか。
頭を振りながら、彩は何度もくりかえす。
帰りたい。帰りたい。帰りたい。
……あなたも？
「――」
ゆらりと諒が動いた。階段へ向かって歩いていく。
「亮介」

階段の下で一度だけ足を止めて、肩ごしにふりむいた。指で、来いと合図する。
無言のまま亮介がついていく。諒は先に立って階段を上る。
見送って、牙はふと、亮介が割りこんでくれたことに感謝しなければ、と思っていた。
殺してしまうところだった……。

Ⅲ

決して軽くはない足取りで諒が階段を上り、廊下を歩く。足は寝室へ向かう。彼が黙りこくってしまうと、その長身の背中が本当に大きく見えて仕方がない。亮介は少しだけ距離をおいて、奥歯を噛みしめたまま諒の足取りをたどった。諒はドアを開き、それから部屋を突っきってベランダへ続く窓をがらがらと引きあけた。暮れかけた空が目にとびこんできた。

亮介は後ろ手に部屋の扉を閉め、そこで一瞬足を止めた。

ベランダへの出口で諒がこちらをふりむいている。

手招き。どういうつもりなのか予測もつかない。ただこちらを見ている。

観念して、亮介はまっすぐ諒へ歩みよった。ベランダへ出て、窓を閉める。

「そこ」

ベランダの端のほうを諒が指さす。座れと言っているのだ。

手を出したのは自分のほうなのだから仕方がない。言いなりになってやる。亮介は素直にそろそろと座りこんだ。

「あ。もう少し向こう行って」

どうしようというのだろう。

完璧にわからなくなりながら、亮介はさらに端のほうへと移動する。諒は少し眉をひそめている。

「ま、いいでしょう」

ひとりごちて、自分もすとんと床に腰をおろした。

「ごろん」

「うわあっ。びっくりしたっ」

亮介は悲鳴をあげた。いきなり膝の上に諒が頭を放りだしてきたのだ。

「やかましい」

ベランダになががと体をのばして諒が言う。これはいわゆる膝枕というやつではなかろうか。

「ごろにゃん」

「足首をなでるなーっ!!　わーっ！　気色悪いっ！　わーっ！」

「ごろごろごろ」

「さわるなと言うのにっ!!」
「わはははは。あー……」
調子のはずれた笑い方をして、諒はうす暗い空を仰いだ。
「亮介ー。ごめんねー」
「……」
むっと口をつぐんで亮介が見おろす。
ごん、とその頭を拳で小突いた。
「いてっ。おまえなー、いっぺんはたいたら強気になったわね」
「強気にもなるよ、バカ」
もっと早く言えばいいんだよ。そう言いたかったが、うまく言葉にできなかった。口にしたら涙が出そうで。
「あー、だめだ俺、本当だめだわ。どうしましょ」
ごろごろと転がりながら諒が言う。
「いやーね。男の愚痴って聞けたもんじゃないわね。しくしく。男のヒステリーってサイテーね。しくしく」
「おまえ……話つながってないよ？　大丈夫？」
「なによー亮介ちゃんったらえらそーに。ちぇーっ、亮介君ひとりでどんどん強くなっちゃう

んだもんなー。しくしく。いいんだ俺、グレてやるんだもん。俺がグレたら亮介の責任だからね。ふんふん」

「おいおい……」

支離滅裂だ。亮介はため息をついた。

「強くなってなんかないってば」

「嘘ついちゃいけませんよ。あ、そういや亜衣ちゃんとめでたくまとまったんですってね。おめでとー」

「馬鹿！」

「てっ。いたいじゃないのよーう」

床に頭をふり落とされて諒が情けない声を出した。なにやら反動的にすさまじくハイになっているらしい。

「もう少し落ちつけって」

わざと冷ややかに言って、亮介は膝を抱えた。諒は頭をさすりながら恨めしげに目を上げる。

亮介がそれを見おろした。

「……大変なんだろ」

短い、深い声。

それは真摯で寛い。優しくて毅い。いつもそうだ。亮介はいつもそうだ。きっと本人は気づいていないけれど。

深呼吸して、諒は目を閉じた。

「んー、やっぱねー……やっぱキツいわ。すごくキツいわ」

しみじみと実感をこめて呟く。

「しょーがないねー。最初っからさあ、キツいのはわかってたんだけどね、こいつをクリアしなきゃ進歩がないとか思ってねー、乗りきるつもりだったんだけどね……」

「うん……」

「根性で乗りきろうとか思ったんだがなあ、しかし試練というのはキツいからこそ試練だったのな。あー畜生、失敗したなあっ」

諒はごろりと寝返りをうった。庭のほうを眺める。その肩を見ながら亮介はゆっくりと口を開いた。

「言えばよかったのにさ……」

「だから今こうして言うておるでしょうが」

「遅い。俺は怒っている。もう手遅れ。絶対に許さない」

「おまえね」

声を殺して諒が笑う。

「そんなこと言ったら諒ちゃんは泣いてしまうぞ」
「おまえ、わかってる？　そんなワンパターンでね、そう毎度毎度折れる奴なんてね」
「亮介君くらいしかいないよね。わははは」
「ほんとだよ」
亮介は深々と息をついた。諒はしつこく身を震わせて笑っている。
もっと早く言えばよかったのに。諒の表情は見えなくて、ただその肩を見つめたまま亮介は思う。弱音なんて、いくらでも吐けばよかったのに。全部ひとりで抱えこんで、どこにも気持ちを逃がさないままで……。
「亮介ー」
間のびした調子で諒の声。
「ぶってくれてありがとー」
亮介はしばらく言葉をつまらせた。
ややあって、ボソッと答える。
「あの程度でよかったら、いつだって殴ってやるよ」
「そういうイミじゃないって」
「わかってる」
「本当にわかっとるんだろーか」

ぼやくように言って諒がよいしょ、と頭を持ちあげる。
「諒を助けるからリョウスケ、なんつって」
「く、くくくくだらない……」
「だまらっしゃい」
あまりのくだらなさに思わず絶句した亮介をじろりと睨みあげて、さらに膝を抱える亮介の腕をわざわざほどき片脚をしっかり確保しておいて、諒は再びすとんと頭をおろした。
「だから膝はやめろってば！」
「だーって気持ちいいんだもーん。ぐー」
「寝るなっ!!」
「だーって寝不足なんだもーん」
有無を言わせず、諒は完全にくつろいでいる。亮介は天を仰いだ。
「……やっぱり、でもねえ、ひとりでクリアしなきゃならないんですよ、これは。結局は」
ぽつりと、静かに諒が言う。
弱い光線を浴びて……わだかまりのない顔つきで。
「だってこれは罰だからさ。正当な罰だからさ……どうしても。だからキツいのはあたりまえなのよ。キツくなかったらそれこそ俺が困るわけですよ。ああ苦しいなあって思ってないと、俺ものすごくすさまじく不安で仕方がない」

亮介は黙ったままそれを見やった。

かすかな、寂しさ。

「だからねえ、例えば忍なんかは今回、彩が来るんだっつったとたん露骨にざまあみろって顔をしやがってさー、それでもってこれでもかこれでもかっていうお膳立てまでしてくれて、泣き言は聞かんぞーとばかりに雲隠れでしょ。もう完璧ですよ。お流石なのよ。俺がのたうちまわるのわくわくして待ってるのよ。……で、俺としても、実はそれくらいキツさを助長してもらってようやく……ああ俺はこんな思いをするだけのことをしたんだってことをさ、実感して、少しだけ……本当はまだ全然足りない罰なんだけど、それでも少しだけ……安心できるんだよね……」

「……」

「忍様にはかないません。本当」

噛みしめるようにそう言って、諒は微妙な笑みを浮かべた。そっと染みとおる……やわらかい想い。

こんな風に諒が忍のことを語るのははじめてだ。

「忍さん、か……」

普段は散々けなしまくっているくせに——。

大切な存在、なのだろう。きっと自分が想像するよりもはるかに。ひとり立つ孤独な総帥。

見えないことが多すぎるあの人を……もっと知りたい。そんな思いなら、自分の内にも確かにある。諒もそんなことを考えたのだろうか。

孤独な……。

「ああ……そういえば、さ……さっき、泣いたんだよね、冴子ちゃんが……」

「――なんで？」

動かないまま諒が問う。

「忍さんのこと話してて、少し……」

「ああ、忍ね。うん、それならわかる」

「自分だけは絶対についていくって」

諒は案外あっさりしている。重ねて言いながら、亮介のほうがかえって少々まごついた。

「あいつはなー、文句なしに忍を崇拝しておるからな。忍のためなら人を殺すぞ、多分」

「なっ……なんでまた」

「さあねえ、知りません俺は。こればっかりは本人の問題よ。しかしなー、あいつの場合ちょっと思いこみすぎのところもあるからなー……」

ひとりごとのように呟いて、諒は亮介と目を合わせた。

「亮介は忍のことってどう思っておるのかね」

「え、俺？　……いやあの……すごい人だなあ、とか」

「それから？」
「そ、それからー……」
改めて問われると難しい。けっこう怖いように思う。強い。高貴で、だから近寄りがたくて。けれど笑ってもらえると嬉しくて……。
そういえば頭をなでてもらった時はなにか途方もなく嬉しかった。
「好き、かな。やっぱり」
「ふむ、なるほど。いや俺はだね、だいっっ嫌いでしたよ忍は」
力一杯〈大嫌い〉を強調して諒が言う。
「嫌いどころの騒ぎじゃないね。憎みましたね。恨んだもん。殺意抱いたもん。顔見ると吐き気がしたもん」
「そこまで言わなくとも……」
「いや本当。別にわけもなく憎んだのではないぞ。いくらなんでも」
わけはある。
——世界中で誰よりも誰よりも憎んだ。わけは、ある。
冷ややかに名を呼んで生の岸へこの身を引き戻した、あの夜から。稲妻のようにこの眼を灼いて現れたあの時から。わけは……ある。
その姿しか視界に映らなかったからだ。

過去も未来も消えたその時、自身を占めるものが彼しかなかったからだ。

諒は夕闇の彼方を見つめた。

「……なんであのまま死ねなかったのかなあって、そう思ったら忍を恨むしかないでしょう」

亮介が沈黙する。

「情けないことにさ……一度助かってしまったらもう死ねないのよ。死にたいと思っても死のうってとこまで行かないのよ。ずーっと動かなかったら死ねるかなあって思ったりするのに、気がつくと腹が減っていたりするんだ、これが。人間ってのはほんとに強欲で……放っとくと生きてるのな。これは情けないですよ。どうしようとか思いますよ。妹は狂ってんのに、張本人は狂いもしないでしっかり飯食ってんだもん」

「諒！」

叱るような亮介の声が言葉を遮った。

亮介は顔を伏せてしまっていた。眩しげにそれを見上げて、諒は少し間をおいた。

「……露骨だけどさ、つまりそういう精神状態だったわけで……」

俺のためなんかに泣くんじゃないよ。安堵するような苦笑するような、つかみどころのない思いを諒は胸に沈める。

自分は、嬉しいのだろうか……。

「忍もわかってるからさ、もう顔あわせると火花バリバリよ。あいつはあいつで言いたい放題

言うし、俺は俺で全身で恨みまくってるし、だけど絶対腕力じゃかなわないし。手加減なしで殴るんだ、あいつがまた。これは本当なの。こっちはまだ体力ないガキだというのに、むこうより十センチは低いというのに、ろくに喧嘩慣れもしとらんというのに、しれっとして張り倒してくださるんだもん。いたいけなガキとしては、憎みましたよ目一杯」

自分自身への憎しみも忘れるほどに。

そして忍は宣告した。逃げるな。おまえが赦されることはないのだから。未来永劫、その罪は消えないのだから。命をもっても贖えぬほどにその十字架は重いのだから。

死は解放。そんな権利など認めない。

誰もおまえを赦しはしない。だからおまえは安心して罰を受ければいいのだ。

安心してもいいのだ、と……。

「ただ……わかったことがあってさ……」

どこか懐かしげに諒は呟いた。

「実はすごく簡単なことなんだけど、半年かけてようやくわかったことがあってね……なんだと思う？」

いきなり水を向けられて、困ったように亮介が考えこむ。

中空には月の光。屋敷から漏れる明かりがぼうっと庭を照らす。

「つまりねえ……冴子が言うとおり確かに忍は神様でさ、ものすごく強くてさ、何もかも全部

お見通しでさ……だけど、それでも、あいつにもできないことってのはあるんだよね。そういうこと。あいつは俺の家族、助けなかったんじゃなくて助けられなかったんだよなあって……いくらなんでも好きこのんで見殺しにしたわけじゃないんだなって……ま、当然のことなんだが」

「ああ……そうか……そうだよね……」

「盲点だしょ？」

——あの人にもできないことはある。

亮介は胸中にその言葉をくりかえした。

そのことであの人でさえ悩みも苦しみもするのだろう。どんなに感情を殺しても、どんなに超然としていても。おそらく自分たちになど見えないところで、その痛みは厳然として存在するのだろう。それを知ってしまったら……。

そして——諒は——どうやってたどりついたのだろう。その境地へ。時間をかけて。ゆっくりと手探りで。傷ついて傷ついて血まみれになりながら。それでも。

「……よかったよ」

ぽつりと、こぼれた呟き。

「わかって……よかったよ、な……。だから、おまえはここにいるんだろ」

諒が両の目を瞠った。

腕を持ちあげて、顔を覆うような仕草で前髪をかきあげて。
「……やだよー、この子は。ちぇーっ、なんなのよほんとにもう。サイテー」
「な、なっ」
「嘘。亮介くん最高。もうお手あげ」
亮介の目の前で諒はぱちぱちと手を叩いてみせる。どこまで真面目でどこまで冗談なのかわからない。わからないけれど……。
なにか、とても安心している。ここにいて自分は安心している。苦しいほど痛いほど、泣けてくるほどに安心している。自分自身に驚きながら亮介はその思いを見つめた。わからないけれど、それでいい。
諒がここにいる。自分の前にいる。それはなんて奇跡。それでいい。それだけでいいのだ。とても簡単な、たったひとつの真実。
「最高だろ」
震えそうな声を抑えつけて亮介が言う。
「会えてよかっただろ」
「亮介くん目一杯強気だなあ」
「ふてぶてしくなったんだってさ、俺」
「実にまったくそのとおり。諒ちゃんは愕然とするばかりだ、うむ」

「どうせ似合わないよ」
「うそうそ。亮介くんサイコーだ！」
くすくすと諒は笑っている。
この空気を動かしたくない。亮介は姿勢を変えぬまま、全身でこの時間を感じようとした。受けとめておかなければ。忘れないようにしなければ。
たとえ離れても……思い出せるように。必ずこの時に戻れるように。
祈りたい。
「亮介ー」
「ん？」
「来てくれてありがとー」
「その言葉さっきから安売りしてないか？」
「がーんっ。だって本当にそう思っておるのに。しくしくしく」
情けない声を出した諒が、ふと視線を転じた。
空気中に微弱な電流。音もなく身を起こす。亮介が息を殺した。
動物的な身のこなしで諒は手すりに近づき、庭の一角に射るような目を向ける。
「!?」
姿をとらえた途端、影は闇の内へ逃げこんだ。ひとつやふたつではない。小さな群れ。



「なんだ？」
立ちあがりながら亮介が問う。
「犬、だな……もう見えない」
野犬だ。諒は険しい表情になった。数が多すぎるように思えた。
「あっという間だったからちょっとわからんな。多分、まぎれこんできただけだと思いますけどねー……戸じまり用心、火の用心だな」
「なんか物騒だな」
明かりの届く範囲にはもう出てきそうにない。
「ま、気にしてもはじまらんな。放っときましょ」
諒はあっさりと肩をすくめた。
「いいのかな」
「その時はその時よ」
ひらひらと亮介に手を振ってみせる。
「それよりそろそろ下に戻りますか。殴りあってんじゃないかって思われてそうで怖いんだな、俺としては」
「げ。まさか」
そういえば、なにかひどく険悪な雰囲気で上ってきたように思う。亜衣あたりにちゃんとフ

ォローしておかなければ、と亮介は肝に銘じた。俺はすぐに自分のことで頭が一杯になるから……。

「まあ……牙のこともね、ちょっと俺は先走ったかなあと思っておりますが」

諒が少し声を落とした。

「ただしね、亮介、もしあいつが本当に〈妖の者〉だったら俺は遠慮なく斬り捨てるから、そのつもりで」

「……ああ……」

静かな言葉だが、その響きは厳しい。それはそうなのだ。亮介はあらためて思い知るような気持ちで、ゆっくりと頷いた。

部屋へ続く窓に手をかけながら、諒がふりかえる。

「やっぱり嫌だけどね、そんなのは……俺はいつも、嫌だけどね……」

自分も、一歩間違えたらそうやって斬り捨てられていたはず。

言外にそう語って、諒は窓を引きあける。

妖者を呼びこむのは当人の弱さ。それは理屈。それは理屈だけれど、だからと言って裁けるのか。……そんなことは自分にはできない。ただ、救えたらと。救うことさえできればと。

そこに残るものはいつも苦さと、無力感。

「ばかですねえ。そこでまた落ちこむんじゃありませんよ」

痛みを察しすぎてしまう親友を見やって、諒は苦笑を浮かべた。
こつん、と人差し指で亮介の額をこづく。
「諒ちゃんはね、何があっても後悔だけはしないんですから」

四日目——戦士覚醒

I

けたたましく鳴る目覚ましを必死の思いで捕獲して布団にひきずりこみ手探りでスイッチを切って騒音を撃退して、亮介はのろのろと霞がかった頭を持ちあげた。

なんだか久々にぐっすり眠った気がする。そういえば前夜は牙のおかげでほとんど寝ていないのではなかったか。すっかり忘れていた。

ぐらぐらと眠りこみそうになる意識を叱咤して毛布を引き落とし、亮介は上体を起こして、あれ、と思った。

頭がぼんやりしていて、何があれ、なのかわからない。さんさんと射しこむ陽光は昨日に引きつづいて濁りのない快晴のものだ。前髪をかきあげながら、そろそろと室内を見まわしてみる。

（おやおや……）

一気に目が醒めた。

なんと隣のベッドに人の姿が見えるではないか。
何かの間違いではなかろうか。
「諒」
呼んでみたが、頭まで布団に埋まった相手からは返事がない。
亮介は床に足をつけた。いたずらだったらどうしよう、などと考えてしまうあたり自分もけっこう素直じゃなくなってきたらしい。
ぽんぽん、と肩のあたりを叩いたら、もそもそと布団が動いた。
「朝なんだけど」
「頼むからあと三時間寝かせて……」
モーローとした声が返ったと思ったら、それ以後静かである。
「あと五分とか言えばかわいげがあるのにさ……」
朝食を食いっぱぐれるつもりだろうか。冴子の反応が少しばかり怖い。亮介は思いきってがばと布団を動かした。
ぐしゃぐしゃに乱れた髪のままで、本当に諒が眠りこんでいた。日光をものともせず、嘘のように熟睡している。
無防備に――。
「こら。知らないぞ」

子供みたいだ。ばふ、と亮介は布団を勢いよくその寝顔にかぶせてやる。変わらない深い呼吸。

亮介は自分のベッドに放りだした目覚まし時計を取りあげ、あらためて三時間後にベルをセットしなおして、音をたてないように部屋を出た。

なにやら急に笑いたくなったのは、廊下をすぎて階段をおりる頃になってからだ。

……どうも自分は、眠り方すら忘れたらしい。

ひやりと頬をなでる空気の中を、目的も定めず牙は歩く。朝の光はわけへだてなく我が身にも降りかかり、しかし踏みしめる下草に落ちる影はない。

気づいたら林をぬけて、また表の庭へ戻ってきていた。何度往復したのかももう忘れた。目の届くところにいれば屋敷を出てもかまわない、と言われたのは昨夜のことだ。眠ることはできなかったから、夜からずっとこんな風に歩きまわっている。疲れることも飽きることもなく。

何が不安なのだろう。じっとしていられないのだ。何かがたまらなく不安で、いてもたってもいられない。これは変化。……どうして？

乱されたくないのに。自分には必ず戻るべきところがあるのに。惑わせてほしくなどないの

に。

危険だ。このままでは危険だ。崩される前になんとかしなければ。大丈夫。自分は強い。この想いは何より強い。大丈夫。裏切ることなどありえはしない。

裏切る？　……誰を。

戻る？　……誰のところへ。

誰が。誰かがいるのに。確かにいるのに。一番大切なことがどうしても見えない。忘れるなんて。忘れるなんて。どうしてこの自分が。待っている。誰かが待っているはず。

……情けない……。

「――」

誰かが背後から歩みよる気配があった。

牙は歩調を緩め、自分の隣に小さな身体を見出した。わかっていた。

彼女。

わかっていたのに……胸に迫る息づまるような情念はなんだ？

「何故？」

牙は問う。並んで足を運ぶ娘は答えない。

さらさらと風に流れる黒髪。

彼女のほうが半歩だけ先を行く。牙もそれ以上を言葉にせず、ゆっくりと、ただゆっくりと

歩を進める。
　理由なんて本当はどうでもいい。そこに何かがあるから。何かを感じるからだ。それは引力。
　惹きつけてはなさない……。
　もっと近くへ。もっとよく見えるところへ。呼びかける眼差。つらぬく瞳。
　――彩がふりかえる。
『あなたを見ている』
　無言の声。あなただけいればいい。あなたを見ている。
　どうして？　牙にはわからない。何故そんなに純粋な瞳をしている。何故そうしてこの身をとらえ釘づけにするのか。わからない。あなたのことがわからない。わかりたい。わかりたいのに。
『あなただけいればいい』
　瞳は語る。
　迷いもせずに。それはあまりに性急だ。ひきずられる自分を牙は押しとどめねばならない。
　待ってくれ。もう少し待ってくれ。我が身のことも知れぬというのにどうしてあなたをわかれるだろう。あなたのそれは暴力だ。そうやって自分をぐらつかせ見失わせる。はじめからあなたは自分を狂わせている。

今すぐにも逃げ出したいのに。どうして自分は。
どうして？
「あなたは私を知っているのですか」
もしかしたら、とすがるような思いで牙は尋ねた。
「知っているのですか。だからあなたは……」
返る言葉はない。
彼女は笑顔すら自分に向けないのだ。牙は声を呑みこんだ。眩しい朝の光だけが周囲に散り、しっとりと景色を埋めつくし、そして少女はまたゆるやかに歩きはじめる。

「おはよー」
顔を洗ってから居間へ出ると、一番のりは冴子であった。
まじまじと視線を感じて亮介ははたと立ちどまる。
「やだ、亮介ちゃんってば」
「へ？」
「あらためて言うのもなんだけど」
すさまじく真剣な目が怖い。亮介はびくびくと身をすくめた。

感心したというよりは呆れたように冴子が呟く。
「パジャマ姿だとかわいい……」
「すみませんねえ――っっ」
何かと思ったらこれだ。がっくりと肩を落として亮介は台所へ行きインスタントコーヒーに熱湯をぶちこんで、カップ片手にテーブルへ戻った。
「だって諒が熟睡してるからさ……横でごそごそ着替えたら起こしちゃうかなあとか思ってさ」
とりあえずカーディガンだけ羽織って降りてきたのである。冴子が目を瞠った。
「まだ寝てるの？」
「うん。起こしても起きなくて」
「……起こしても起きない奴を起こすのが怖くて着替えない亮介ちゃんってどこか変……」
「あっ……あれ？」
亮介は頭を抱えこむ。テーブルに頬杖をついて冴子がのぞきこんだ。
「亮介ちゃん亮介ちゃん、どうして亮介ちゃんはこんなにかわいいの？」
「やーめーてーよっ!!」
「それは冴子ちゃんのためだよ、くらいそこで言ってよねー」
「言えますかっ」

冴子は妙に元気である。
確かに、なんと言ったって相手は冴子なのだ。心配するほどのことはなかったのかもしれない。あんまり元気すぎても問題があるなあ、と亮介は苦しまぎれに考えた。
どうにも雰囲気が平和で落ちつかない。
「……牙は？」
亮介は原因に気づいた。緊張感がないと思ったら。
「窓から見えるわよ」
やや意味ありげに冴子が亮介の背後を指さす。庭だ。
ふりむいて、驚かなかったと言えば嘘になる。
「へえーっ……」
けれどどこかで予想していたような気もするのだ。こんな光景。目を離せなくて、亮介はしばらくそのままでいた。
庭を歩く彩のあとを黙々と牙がついてゆく。
会話はない。しかしそこには確かに交流の空気。
視線さえ交わさないのに……。
「……いつの間に」
思わず呟いてしまう。

「なんとなくそんな気はしたわよね」
冴子が答える。彼女にもわかっていたらしい。
彼が現れたときから、彩が見つめつづけているのはただひとつ、牙の姿だけだ。
そして彩の前では牙は途端に脆くなる。なにかとてつもなく通じあうものがあるようで、だからこそ近づけてはならぬ危うさもあるようで……。
恋愛感情とは少し呼びにくい。もっと根本的な何かだ。人と人が出会って……ふれあって、それから。
「難しいな……」
簡単なことのはずで、いざとなると言葉にならない。
心を残しながら亮介はテーブルへ向きなおった。そうそう微笑ましく見ているわけにもいかない理由がいくつかある。
「いよいよ問題ね。牙の正体」
「そうなんだよね……」
冴子の言うとおりだ。彩は牙以外の相手には依然として心を閉ざしたままなのに。
人外の魔物。忘れてはいけない。牙といつまでもともにいられる保証など皆無に等しい。敵味方の区別すらつかない相手だ。
「悪いことじゃないと思うんだ。お互いに……悪いことじゃない」

どうにもならないことは亮介も承知している。しかしそれでも。

悲しいことにはしたくない。

「本当はあんまり近づいてほしくないとは思っていたりしたけれどね、あたしは……あのふたりには。でもそういうのって、仕方がないのよね。多分、諒もそのあたりのことは考えているんじゃないの？」

冴子の口調からはある程度、なりゆきに任せるしかないといった響きが伝わる。彼女のほうがリアリストだ。亮介は考えこんでしまった。彩も牙も大切で、自分は……。

諒の言うことも正しいのだ。牙に情けなどかけていられないということ。自分たちは人間で、そして我が身の安全を脅かすものに対して防衛はなされなければいけない。反論の余地はない。例えどんなにそれが辛いことでも、諒ならばきっと確実に手を下すだろう。それが諒の役目なのだから。

「ただ、諒が牙のことを目の敵にしているのって、それを見越したって言うよりは単なるヤキモチよ。絶対。あれは重症のシスコンだから」

冴子がきっぱりと断言する。そう言われてしまうと身も蓋もない。

「それはだって……彩ちゃんのこと大事だからさ、どうしても」

「それならそれで八つ当たりしないでほしいのよね。みっともないったらありゃしない」

「う。そ、それは……」

「あのね亮介ちゃん、あなたね、自分が被害者だって認識してないの？　もしかして自覚が足りないんじゃないの？　放っとくとどこまでもつけあがるわよ、あの手の人間は。はたから見てると呆れるもの、亮介ちゃんが心優しいのをいいことに怒鳴るわ愚痴るわ責任転嫁するわ」

「そこまで言わなくていいってばっ」

亮介は声をはりあげた。

冴子が言うこともかなりの線で真実だが、しかしだ。

「……それはそれでいいんだよ」

確かめるように、急がずに、亮介は静かに言う。

「だって……つまりそれは……それだって、諒なんだからさ」

うまい言葉にならないけれど、それが本音。本当はまだ自分には諒なんて、ほんの少ししか見えていないのだ、きっと。だからこそ。

「話してくれるなら嬉しいし……もっといろいろ見たいし……」

「……友情に水を差してごめんなさいだわ」

む、とむくれて冴子がボソッと言う。

（あっ）

亮介はひらめいた。これはつまり何かというと。

「冴子ちゃん、拗ねてるでしょ」

「――ちょっと！　どこの誰が!?」
「だから冴子ちゃんが」
「どこからどういう発想が出てきたらそういうことになるのよ一体っ!!　ああっ、信じられないっ、亮介ちゃんの発言とも思えないっ」
冴子がうろたえるさまというのはなかなか珍しい。亮介はテーブルにひじをついて身をのりだした。
「だって冴子ちゃん、かわいいんだもん」
「……」
テーブルに貼りつきそうになって冴子がなんとか踏みとどまった。
ぎっ、と上目づかいに亮介を睨みあげる。
「つ、強くなったわね、亮介ちゃん……」
「まだまだ全然足りないよ」
「そういうとこが生意気なのよっ。やだやだやだ……」
誰の影響かしらっ、とひとりごちながら冴子はなんとか体勢を立てなおす。いったい誰の影響なのだろう、と亮介自身もぼんやり考えた。責任の所在は一か所に留まらない気がする。
「悲しいわ。亮介ちゃんは永遠に変わらないってあんなに固く約束したのに」
「してないしてないっ」

「それでもかわいいと思ってしまう自分が口惜しい……。いいのよ亮介ちゃん、亮介ちゃんがどんなに堕落してもあたしはずっと亮介ちゃんの味方だからね」
「ダラクと言われても……」
なにやら勝手な理屈を冴子が並べたてるところへ、遅ればせながら亜衣が降りてきた。
「あ、おはよう」
救いの神とばかりにふりむいて、亮介は手を振ってみたりする。
神妙な目つきで亜衣がぽつりと言った。
「冴子さんってば崎谷君と仲良しだわ」
「――え!?」
亮介は凍りついてしまった。ちょっと待ってほしい。けたけたと冴子が笑いだす。
「だって仲良しだものねえ、亮介ちゃん。あたしたちって何かの糸で結ばれているのよねー」
「ぬけがけは卑怯だと思うのよね。順番から言えば目をつけたのはこっちのほうがずっと先だもの、悪いけど」
事態を混乱させるだけの冴子の発言に、迫力たっぷりで亜衣が言いかえす。挟まれて亮介は声もない。
「あら、愛に時間なんて全然関係ないわよ亜衣ちゃん。だって運命の出会いだもの、あたしたち」

「人生に運命の出会いなんて一回で充分よ、冴子さん。一年前の入学式の時点でそれは全部決まっていたのよね、残念ながら」

「亮介ちゃんかわいそうっ。がんじがらめに縛られているのねっ。挫けちゃだめよ、今おねーさんが救い出してあげるからねっ」

「崎谷君を惑わせないでよねっ。あたしがついている限り崎谷君に人生の裏街道歩かせるようなことは許さないわよっ。矢でも鉄砲でも持ってきなさいよ、絶対離さないから」

「ずるいわずるいわ、亮介ちゃんを独占するなんて。そんなことしたら泣く人間がここにもそこにもあそこにも。亜衣ちゃんって罪つくりな女だわっ」

「なんとでも言ってよね。蠍座の女は強いのよ」

ばしばしばし、と両者の間で火花が散った。

(ち、違う……何かが違う……)

喜んでいいのか悲しんでいいのか。亮介は頭痛すら覚えつつ、なんとか話の切れ目に割りこんだ。

「あのさ……」

「亮介ちゃん、女の戦いに口出しは無用よっ」

「だいたい崎谷君がしっかりしないから」

きっ、と両方から鋭い眼差が突きささる。条件反射で逃げだしそうになりながら、いや待て

俺の意志はどうなる、と亮介はぎりぎりで持ちこたえた。
「お話は大変ありがたいんだけど」
おそるおそる口を開く。
「……おなか、空いたな。俺」
冴子と亜衣が顔を見合わせた。
「冴子さんっ、今朝は洋食でいいかしらっ」
「じゃ、オムレツなんかいいかもねっ。ハムエッグもベーコンエッグも捨て難いけど、それからそれから……」
和気あいあいと台所に姿を消していくふたりを見送り、やはり自分はいいように遊ばれておるのだ、と亮介は確信を新たにした。

Ⅱ

今日一日をすごしたら、明日の昼にはこの地を発たねばならない。いわゆる合宿もそろそろ終盤なのだ。そんなわけで食事のあとはまた改めて掃除などをして、今夜の分の買い出しのことを話しているところにようやく涼が起きてきた。

「……なんかすごく疎外されてる気がする……」

恨みがましく涼が言う。

「自分で言ったじゃん、あと三時間寝かせとけって」

「俺本当にそんなこと言ったっけー？」

「言いました。俺、着替えてくるね」

亮介はばたばたと階段を上っていく。おかしいなあ、とぶつぶつ言いながら涼はちらりと冴子の顔色をうかがった。

「ところで俺の朝飯は……」

「働かざるもの食うべからず、よ」
ぴしゃりと冴子が決めつける。
「やはりそーきたかっ」
「当然でしょ」
「働けばいいんでしょ、働けば」
床に座りこみ、少々投げやりに言って諒はぐしゃぐしゃと髪をかきまわした。どうもなにかハンデを感じるのは何故であろう。
「庭の草むしりがまだだったわね」
見下して、いともあっさりと冴子が言う。がっくしと諒は床に倒れこみかけた。
「俺ひとりで!?」
「亮介ちゃんと亜衣ちゃんで買い出しに行って、あたしは家の中の片づけよ。牙に手伝ってもらったら？」
「わかりました、わかりましたよ。いいですよひとりで」
その牙の姿はどこにも見あたらない。テーブルへ移動しながら諒はふと表情を引きしめた。
「……彩は？」
「裏の林じゃないの？」
「おい」

「大丈夫よ、牙が一緒だから」
「おいおいおい」
諒が椅子から腰を浮かす。冴子の視線がその動きを制止した。
「心配ないわよ、少なくとも今のところは。亮介ちゃんの感覚、信じるんじゃなかったの？」
「……何かあってからじゃ遅いでしょうが」
「ごはん食べてる暇くらいあるわよ。そんっなに亮介ちゃん信じられない？　あっ、そーお」
「亮介亮介と強調せずともよかろうが」
これは当てつけに違いない。どっかりと座りなおして諒は苦い顔になった。別に冴子をないがしろにしたつもりはないのだ。つもりはないが……しかし結果的にそうなっていないと言いきれないのが困りものだったりする。
台所から諒の分の朝食を運んで亜衣が現れる。ほとんど同時に亮介が降りてきた。
「それじゃ早いうちに行ってこようか、買い出し」
階段から亜衣に声をかける。彼女の返事を受けながら亮介は上着の袖に腕を通し、それからテーブルの諒を見返った。
「どうかした？」
「いえ……亮介くん元気だなあとか思いまして」
「そうかな。寝覚めが良かったんだよ」

亮介の言葉は屈託がない。
何か言いかけて、諒はひらひらと手を振った。
「行ってらっしゃいまし」
「うん、行ってくる」
先に出る亜衣を追って、亮介は玄関へ向かう。ドアが閉まる音を聞いてから、諒は深々と息をついて箸をとりあげた。
「あいつもなあ、けっこう牙とおトモダチなんだよなー……」
「亮介ちゃん優しいから」
テーブルの脇に立つ冴子が答える。
「そういう人間ほど痛い目にあうというのが世の中の不条理だ……。な、なんか俺ってば損な役回りじゃないかー？」
「だから、まだそこまで考えることないって言ってるじゃないの。頭っから牙のこと敵視してるわね」
「本職ですから」
牙を敵にまわすことになったら亮介がどっぷり落ちこむのは目に見えている。感情がもろに表に出るという点では彩よりも厄介だ。どうしたものか。
「で？　彩がどうして裏の林？」

プレーンオムレツを口に運びながら諒が改めて尋ねる。
「朝からよ。今朝かなり早くに彩ちゃんが抜け出したから何かと思って見てたら、牙が庭にいて……」
朝食の時は、ちゃんと牙が彩を連れ戻ってきたのだ。例によって無言のまま。しかしその後また彩は牙を追っていってしまい、牙も拒まずにそうして一緒にいる。
確かに近づいていくのは彩のほうからなのだが、ふたりでいる姿は牙が彩につき従っているように見える。不思議な関係だ。語りあうこともなく、ただ一緒にいるだけ。
「ちょっと普通じゃないわよ」
「わからんな」
諒は小さく舌打ちする。
「冴子と牙って名前が似てるなあ。おまえら実は生き別れの兄妹だったりしないか？」
「安直すぎて涙が出るわね」
「むー」
面倒くさいの一語に尽きる。食事をきれいに片づけて諒は立ちあがった。別に自分だって好きこのんで彩や亮介に恨まれるような真似をしたいのではないのだ。断じて違う。
正直言って、牙とは関わりたくなかった。亮介のように素直に近づいていく気分にはなれない。牙を前にすると、どうしても苦手意識が先に立つ。こんなことは珍しいのだが。

嫌悪感を抱いているとか、そういうこととはまた少し違う。とにかく自分の目の届かない所にいてほしい。これは一体なんなのだろう。あの姿を見ていると苛々する……。

頑張ってね、と皮肉っぽい冴子の言葉を背に受けて諒は庭へ出た。

「言われなくてもね……」

外はひどく静かだ。高原独特の有機的な風。さくさくと草を踏んで諒は林のほうへまわった。

人影を捜すまでもなかった。

「お話が、あります」

まっすぐに近よってきたと思ったら、訴えるように牙がそう言った。

「それはまた」

呟いて、諒は視線を流す。彩はひとり、やや離れて林の中にたたずんでいる。こちらのほうを見るでもない。

諒が現れるのを牙は待ちうけていたふしがある。内心でやれやれと思いつつ、諒は彩からさらに遠ざかった木陰まで牙を誘った。もちろん、彩が視界に留まる範囲内である。

「聞きましょう」

改めて諒が促す。

定番のポーカーフェイスを崩さぬまま、牙は口を開いた。

「やはり、ここにはいられません」
低い声に揺らぎはない。
出ていく、と言っているのだ。
別に驚くことでもない。核心から少しずらしたことを諒は尋ねてみる。
「記憶でも戻りましたか」
「いえ……何も」
「出ていけば何かわかるわけですか」
牙が沈黙する。
どこへ行ってもきっと同じだ。このままでは。
「あてはありません……」
執着もなにもない言葉。
世界から離絶している。諒は眉をひそめた。
現実から遠ざかって、接点も持たず、支柱もなく、影も落とさぬ頼りない存在。そこから脱け出そうともせず外と関わろうともせず。こんな姿を諒は確かに知っている。
いや……知っていた。誰よりも知っていた。忍と過ごしたあの頃。
それまでの世界がすべて失われて途方に暮れていたあの頃。
何も見えなくて自分の姿も見えなくて暗闇で手探りで虚空に爪を立てようとして泣いてい

た、あの頃。

怖くて怖くて震えていた。傷つくまいとして自分を閉ざした。言葉を封じ、耳を塞いだ。背中を向け、膝を抱えた。こんな姿。何よりも誰よりもどこまでも知っている。

痛みが胸を貫いていく。そうだ、あの頃の。

縛りつけるものなど何もなかった——。

（自分自身だ）

……まるで過去の己を映した鏡。

だから嫌だった。だから見ていたくなかったのだ。

なんとも簡単な……。

「要するに逃げるわけだ」

わかってしまうとこだわりは薄れた。顔を上げ、手加減せず、すらりと諒は切りこんだ。キッと鋭い目を向け、しかし感情を奥に堪えて、牙が唇を引き結ぶ。

無言で諒が待つ。

目を伏せて牙は耐えた。衝動。激情。殺しても殺しても荒れ狂う嵐。この内面は何なのか。

こんなものは自分にはなかったはず。

長い長い葛藤の後に……どうしても留めきれず牙はそれを言葉にした。

「……つらいです」

諒は表情を変えぬままそれを聞いた。

「とてもつらいです……」

その声がかすかに帯びた震え。

どうしたらいいのかわからない。求めれば求めるほどつのる危機感。近づくほどに怖くなり、見つめるほどに我を忘れる。

このままでは堕ちる。自分は。このままでは崩される。

「あの方はつらい……灼かれてしまいそうで……怖いです」

まるで太陽だ。

全身で牙を照射する太陽。そしてそれによってさえ影を生み出せぬ自分がいる。彼女が存在を問う。くりかえし、くりかえしその存在の意味を問う。おまえは誰かと、彼女の存在そのものが己を問う。自分には答えられないのに。どうしても返せないのに。応えられないのに。

せめて彼女が回答を与えてくれるなら、それを信じようがあったものを。

生殺しでずると……灼き尽くされるだけか。自分は。どこへもたどりつけぬまま、消えるだけか。それはなんのために？

なんのために自分は今ここにいるのか。

「逃げるのだと、わかっています。不様だと知っています。しかしもうそんなことはどうでもいい」

今しかない。

「今をのがしたらもう……離れられなくなる。自分で、わかります。引き裂かれてしまう……」

「同情なんかしないね」

あっさりと諒が言った。

「同情されたいわけでもないんだろう」

「ええ」

そのとおりだ。牙は頷く。

「どうしようがおまえさんの勝手だよ。別にこっちはおまえさんの飼主ってわけじゃない」

――確かにそうだ。そうなのだ。

誰かの許可を求めることもできないのだ。自分はどこともつながっていないのだから。間違えてはいけない。

「おまえさんは人畜無害だから手を出さないでくれってさ、亮介が俺に言うわけだ。俺としても、そこまで言われておまえさんと立ちまわりなんかしたくないんだな。そんなことしてあいつに恨まれたら割に合わないでしょうが。おまえさんは出ていきたいと言うし、亮介はおまえを放っといても安心だと言う。するともうここにはなんの問題もないのよ。俺は『どうぞ』としか言えないね。それ以外どうしようもない」

「わかります」
牙は唇を噛みしめた。
引きとめてほしかったのか、自分は。彼に許しを乞うことで。何を求めたというのか、未練がましく。
逃げることを責めてほしかったのか。ともに来いと言ってほしかったのか。ここまで自分は醜く弱いのか。微塵の誇りもないのか、既に。
なんという甘えだろう。
「行けよ」
諒が言う。
もはやほとんど晴れやかな思いで、牙はその言葉を受けとめた。
「……ありがとうございました」

食料その他もろもろの詰まった袋を提げて小さなマーケットを出た時には、太陽が真上に来ていた。暑くはないが日焼けしそうだ。これから山奥の屋敷へ戻るのだと言ったら、ああ例の離れ小島、とレジのおばさんにやたらと同情された。
「そういえばここ三日くらい同じ顔だけ見てたんだな」

いわゆる『他人』と会話したのが久しぶりで、亮介はそんなことを呟いた。
「徹底的に隔離されてるのね、あの家って」
亜衣が答える。
「何かあっても外にわからないって感じがちょっと怖いのよね。かろうじて電話があるくらいで」
「やっぱり忍さんって今ひとつわからない……」
あの人自身はただごとではなく強いから、そういうことへは頭がまわらないのだろうか、などと亮介は考えて、しかしそれはいくらなんでも、と思いなおした。並んで歩きながら亜衣が口を開く。
「忍さんといえば……あれから少し考えてみたんだけど……」
「冴子ちゃんの言ったこと？」
「うん。なんだかすごく気になる。忍さんはこれからどうしたいのかなって……何をやろうとしてるのかなって」
それは亮介も漠然と考えていたことだ。亮介は黙ったまま亜衣の横顔を見やった。
「例えば……水沢君とか冴子さんってとても特殊な人たちでしょう。忍さんの手足っていうか、あの人のひと声で動くって決まってるみたいな。でも崎谷君や和泉君って、そういうわけじゃないでしょ？　ちゃんと自分の生活があって、学校にも行って、将来のことなんか考えな

きゃならないじゃない。少しだけ、他の人と違う力があるだけで……」

「そう、だね……」

「それでいいと思うの、あたしは。水沢君たちには水沢君たちにとって一番いいスタイルがあって、崎谷君には崎谷君のやり方があると思う。術力の質だってそれぞれ違うんだもの。だけど……忍さんは、いずれ崎谷君とか和泉君のことも自分の手の内に収めるつもりかもしれない。崎谷君自身は、そんな風に考えることってない？」

「……」

答えられなかった。亮介は地面を見つめて、しばらく無言で足を運んだ。

忍に利用される、という意識はなかった。

「助け合うのは大切だと思うの。この前みんなが顔を揃えたのだって、そのままだとそれぞれの身が危険だったからだって……理屈はわかるの、すごく。でもやってることは命がけのことじゃない。しかも警察にも誰にも頼れないようなことじゃない。見てるほうはたまらない……」

「反対してたもんね、亜衣ちゃん」

「あの時は反対しきれなかったけどね……だって避けられないことはわかっていたでしょ。手を出したのって向こうからだもの。でも、でもね……」

言いかけて、亜衣は少し困ったように声を途切らせた。

「忍さんを悪く言うつもりはないんだけど……あの人、必ず何かを考えていて、でも崎谷君たちには言ってないような気がする。忍さんの目的のために崎谷君たちが駒みたいに使われるんじゃないかって……今はみんなの自主性に任せているけど、もしそれも全部計算されたことだったりしたらって」

「まさか」

亮介は首を振った。少なくとも諒は違うと言うだろう。

「計算って言ったって……何を？」

「いろいろなこと……。だって冴子さんの考え方で言えば、忍さんにはわからないことがないってことになるでしょ。だったら……だったらもしかして宮倉先輩のこともはじめからわかっていたかもしれない……わかってて、でも崎谷君の能力を起こすために黙ってたんじゃないかって――」

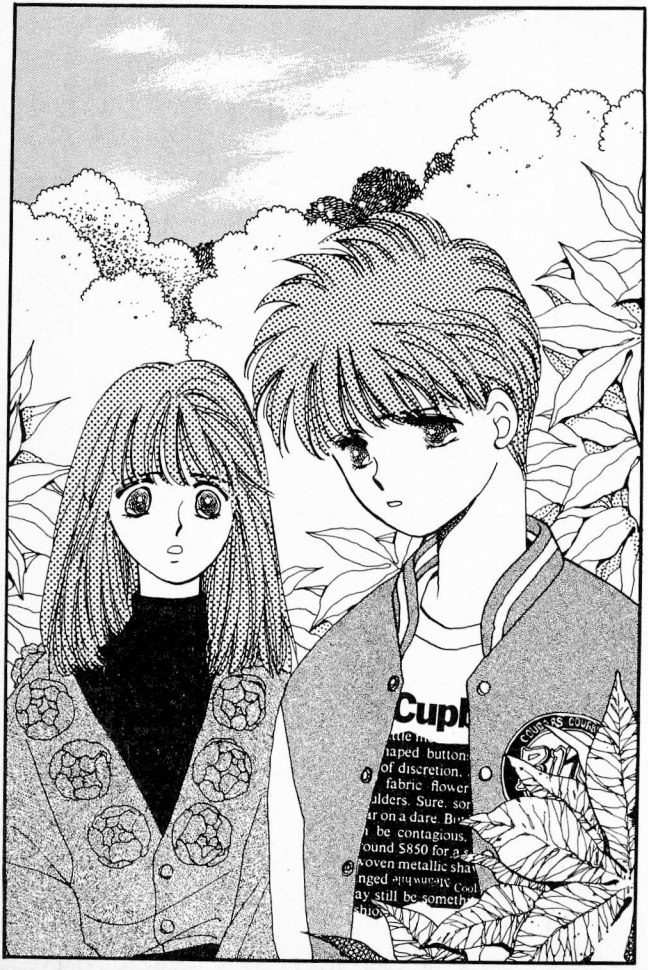
「！　それは……」

はじかれたように顔を上げて亮介は亜衣と目を合わせた。

忘れてなんかいない。自分たちふたりが今こうしているのは、払われた犠牲があったから。あれは……もうひとりの諒だ。

亜衣の心にそれはずっと重荷となって残っていたのだろう。自分だってそうだ。そうだけれど。

「それは……違うよ」
きっぱりと言って、亮介は亜衣の瞳を見据えた。
「そういう考え方は、悲しいよ……」
「……」
忍のためじゃない。亜衣のためだ。なんとかなったのではないか——本当は救えたのではないか、と悔やむような考え方は、亜衣を不幸にする。
「それに、忍さんがいなかったらもっとひどいことになってたんだからさ……。多分、俺たちのほうがすごく忍さんを頼ってるからそういう考え方になるんだよ。どっちみち〈妖の者〉は人間にとって天敵みたいなもんなんだし、善悪は別にしても、利害が違うんだから……仕方ないんだよ……」
自分自身にも言い聞かせるように、亮介が言う。考えこんでしまっていた亜衣が、そっと目を向けた。
「……天敵……だから、崎谷君が危険な目に遭うの？　力があるから？　たまたま術力があるから？」
「そう……かもしれない」
「自分だけ不公平だとか思わない？　……怖く、ない？」
「うん……」


Cupl
haped button
of discretion.
fabric flower
ilders. Sure. sor
r on a dare. Bu
be contagious.
ound $850 for a
oven metallic sha
nged
ay still be someth
hio

ふわりとやわらかい表情になって亮介が少し間をおく。
「……怖いよ、やっぱり……どうなるかわからないよね……」
どうなるかなんてわからない。忍が何を考えているのかもわからない。
「でも、自分がこの先どうなるかわかってる人なんて、どこにもいないと思うよ。いいんじゃないかな、それで……」
「――」
亜衣が目を瞠った。
「……ああ、そうよね……それはそうなのよね……」
独り言のように呟く。
どんな風に生きていても、明日何が起きるのかなんて誰も知らない。わかっているつもりでも、本当はわからない。
「やだ、崎谷君ってすごい……すごいこと考えてる」
「亜衣ちゃんの前だからカッコつけてるだけだよ」
「嘘ばっかり」
「嘘じゃないよ。今はこんな余裕あること言ってもさ、いざとなったらやっぱり怖くて逃げ出したくて泣いたりするかもしれない」
肩をすくめながら亮介が言う。クスッと小さく亜衣が笑った。

「……泣きたくなったら、言ってね」
「カッコ悪いよ、それは。普通、男から女の子に言うんだよ、そういうことは」
「いいの。逆で。崎谷君なら許されるから」
「理由になってないっ」
折角いつになくカッコつけてるのに、と亮介がぼやいているところに、すっと亜衣が身を寄せた。
「腕、組んでいい？」
「え!?　あ……う、うん」
完全に人目のない山道だ。亮介はいきなりうろたえて、どぎまぎしながら頷いた。
するりと亜衣が腕をからめる。
「でもね……本当、崎谷君って実はあんまり人を頼らないでしょう。ずっと自分の内にしまってる気がする。だから、言ってね」
「……うん……」
そうなのだろうか。自分ではよくわからない。頼らない、というよりは頼り方をよく知らなかったのかもしれない。昔から……。
「水沢君もそうなのよね。すごい意地っぱり」
「あっ、わかるっ！」

「どうなることかと思ったら、男の子たちだけでいつの間にかわかりあってるんだもの。ずるいわよねー。冴子さんとふたりでやけ食いしちゃった」

「や、やけ食い？」

道理でふたりして仲が良いわけだ。亮介は天を仰いだ。

「いいなあ、男の子たちって。つくづくそう思う」

「そうかなあ。女の子たちもいいよ。わけわからなくて」

「でも絶対違うの。何かが違うの。特に崎谷君と水沢君って、戦友だものね。ちょうどお互いを補いあってるって感じがする」

心底うらやましそうに亜衣が言う。

「うーん……」

亮介は唸ってしまった。

補う、というところまで自分に力があればいいのだが。こればっかりはちょっと自惚れるわけにもいかない。場数をこなしているという点では諒にかなうべくもないし。おまけに術力中和の能力はまったく制御できないままで……。

「――!?」

キッ、と亮介は視線を転じた。

ふりかえることはしない。周囲の気配をうかがうだけ。

雰囲気の変化に気づいて亜衣が息をつめた。
足は止めぬまま、亮介が低く声を押しころす。
「……離れて」
不安げに亜衣が亮介の表情を見上げる。亮介は耳をすますような目をこらすような、不思議な顔つきでゆっくり歩きつづけている。
ぎごちなく亜衣が亮介から腕を離した。
「周りを見ないで。急がないで、自然にそのまま歩いて」
さっきまでとは別人のような硬い声。
ぴりぴりと空気が張りつめる。亮介は何かを探ろうとしている。何か問いたげに、けれど無言で亜衣は亮介の指示に従う。
亮介は荷物を左手に持ちかえた。
「……先を、歩いて。絶対にふりかえらないで、屋敷までまっすぐ歩いて。俺がすぐ後ろにいるから」
「崎……」
「声、出さないで。俺が走れって言うまで走らないで。いい？」
「……うん……」
緊張を全身に走らせて、亜衣がこくりと頷いた。

彼女から三歩の距離をおいて、亮介は歩を進めた。刺すように背中に迫ってくる幾つもの意識。息づかい。

体温。

不自然な動作にならぬよう努力に努力を重ねて亮介は首をめぐらせ、肩ごしに背後をふりむいた。そして。

……見た。

何対もの眼——。

白昼に。

ひたひたと地に触れる足。爪の音。

とりどりの色。数えきれない。何種類も。少しずつ少しずつ、道を挟む森の木々の間から現れては群れに加わる。距離をつめる。

送り狼、という単語が胸をかすめた。

狼よりもランクは落ちる。

犬、だ。野良犬が、群れをなしてじわじわと近づき追ってくる。気配をひそめ、音もなく静かに。二十……いや、三十はいる。さらに増えつづける頭数。どこからそんなに集まってきたのか。

この静けさは異常だ。底にたぎるものは確かに——狂気。

何を狙っている。
連中が一斉に襲いかかってきたら身を守る術は何もない。
刺激しないように戻るしかない。屋敷には諒がいる。朱雀剣を使えばなんとかなるはずだ。
神経をフル稼働しながら亮介は亜衣の足取りを辿った。
妖力の気配は……ない……？　いや、少しだけ……かすかな……。

Ⅲ

「とうとう追い出したわね」
冴子が意味ありげな言い方をした。
「俺がそんなに非情な人間に見えますか」
彩の肩を抱いて戻ってきた諒は面白くもなさそうに言い返す。
「そりゃあねえ、いなくなってもらうのが一番楽だものねえ。渡りに舟ってやつよねー」
「あのなー」
彩は意外なほど静かだ。
別れも告げずに牙は去り、彩は見送りもしなかった。それほど深入りせずにすんだということだろうか。外から見ているだけではよくわからない。
「俺はなあ、亮介の感覚を信じただけ！　てなわけで彩よろしく」
「ちょっと」

玄関先で彩を引き渡して諒はそのまま庭へ逃げようとする。冴子が冷ややかにそれを呼びとめた。
「話があるのよね」
「……俺は勤労意欲に燃えておるのだが」
「あら、なんだったら夜どおし草むしりしてくれてもいいのよ」
「あ、なんか今いきなり火が消えたよーな気がする」
「ふん」
仕方なく諒は家の中へ上がりこんだ。彩の前で牙の話をするのは避けたい気分だ。彩がストーブの脇で落ちついているのを見届けたうえで、とりあえず台所に場所を移す。
「ちょっと早まったかもしれないわ」
戸棚のかげで冴子は声を落とした。
「何を」
「牙のことよ。もう少し正体つきつめたほうがよかったかもしれない。あたしどうしても牙が現れたのって、忍様と関係があるように思えてきたのよね」
「おいおい」
また忍か、と諒は少しばかり嫌な顔をする。
「そりゃあんまし短絡的なんでないかい」

「だってこの状況に牙が現れたことからして不自然だったじゃないのよ」
「だからってなー」
「それに、さっき諒ちゃんが自分で言ったじゃない。冴子と牙って名前が似てるって。それ、もしかしたら本当にそうなのかもしれない。忍様がつけてくれた名前だもの、『冴子』って。だったら『牙』のほうだって……」
「――え？」
意気ごむような冴子の言葉に、諒がふと目を瞠った。
しまった、とばかりに冴子が口をつぐむ。
諒の瞳が厳しさを増した。無言のまま見おろして、動かない。
ぐらついたのはほんの一瞬。冴子は正面からまっすぐに凛としてそれを受けとめ、その後の諒の言葉を待った。
長いとも短いともつかぬ沈黙が流れた。
――先に目をそらしたのは諒のほうだった。
「そいつはかなりこじつけに近いと思うが。俺は」
ぽつりと言う。冴子が小さく息をついた。
「それにしたって無関係って決めつけることないと思うわよ。多少の可能性くらいは認めたっていいじゃない。牙って忍様にどこか似てるところあるし」

「何がどうしたらあのふたりが似ておるのだ、おい。忍があのくらい地味で正直で殊勝な奴だったら俺は嬉しさのあまり万歳三唱だぞ」
「似てないところが似てるのよ」
「わからんっ。それは詭弁と言うのだ。おまえは頭の中が忍一色だからそういうことを考えるだけだっ」
「それはあんたのほうよっ。硬直した思考で忍様のイメージを作りあげてるからこの微妙なニュアンスがわからないのよっ」
「ニュアンスが聞いて呆れる」
「この石頭っ」
ギッ、と睨みあって両者ともしばし譲らない。
亮介がいたらこのへんで仲裁に入るのだが、と諒は頭の片隅でぼんやり考えた。どうやら冴子も同じようなことに思いいたったらしい。わざとらしく咳払いなどをしてみせて。
「……そーじゃないのよねー。そうじゃないんだってば」
「だからなんなのだ」
ほとんどげんなりしながら諒が口をはさむ。
「だから……牙について言いたいことはふたつよ。忍様のことはとりあえずこっちに置いといて」

「忍はどうでもいいって」
「やかましいわねっ。あたしが言いたいのは彩ちゃんのことよっ」
バカな兄持つと妹は苦労するわよね、と冴子はぶつぶつ呟く。むっとしつつも諒はおとなしく聞く側にまわった。
「彩ちゃんにとって牙ってやっぱり必要だと思うわ。なんでかって言うとね、牙は非現実の存在だから。人外の者だからよ。わかる？」
「わかりませんな」
「つまりこういうことよ。彩ちゃんは今、現実世界を全部否定しているわよね。あたしたちと一切関わらないようにしているわよね。何も目に入れないようにして、ひとりきりになろうとしているでしょ。でも……牙は現実じゃないから、見事なくらい非現実だから、きっと牙だけはひとりだけ、彩ちゃんの目に映るのよ。牙は彩ちゃんの世界に入りこめる唯一の存在かもしれない。あたしには、なんだかそう思えるんだけど」
諒が、かすかに眉をひそめながら沈黙する。
冴子がそれを見据えた。
「彩ちゃんが現在を否定するのって、きっと諒ちゃんを許すためよ。……わかってる？」
「……いや」
許せないからではないのか。諒はかぶりを振る。

「こういう考え方もあるわよ。現実世界を否定すれば過去も否定される。過去を否定すれば罪も消える。そうすれば彩ちゃんは誰のことも責めないでいいでしょ」

「……」

この世に起こるすべてのことを目に入れまいとして。

現実も過去も何もかもを否定すれば諒の起こしたこともなかったことになる。罪を責めないために。過去を責めないために。

自分の心が兄を責めることを禁じるために、彩は内にこもったというのか。

ただひとり、暗く寂しい世界に閉じこめられて。それを自分で選び取ったというのか。

「これが正解、だなんて言わないわよ。でもそんな方法もあるって、考えるのは自由よね。で――この考えで行くと、牙っていうのはもしかしたら彩ちゃんとあたしたちの間で接点になる存在かもしれないじゃないの」

切りこむように冴子が続けた。

「そういう意味で、早まったわよ。もう少し確かめてもよかったはずよ」

「……あいつのほうから言いだしたんだぜ。出て行きたいって」

抑えた声で諒が言う。言いながら、けれどわかっていた。

何も言わず姿を消すことだってできたはずだ。何故わざわざそれを自分に言いだしたのか、牙は。そこにどんな意味があったのか。

深く見つめればわかったことかもしれない。しかし自分は――。

（見たくなかったんだ）

……考えるまでもなかった。

腕組みをして冴子がじっと見上げる。

「あたしの言いたいこと、わかってるわよね」

「しかしなあ。おまえ、危険（リスク）を全然考慮（こうりょ）しとらんぞ」

「いつからそんなにじじくさくなったのよ、あんたはっ。何もしないうちからうだうだうだうだうだとっ。何がリスクよ、結果を恐れて何ができるのよっ。ただのバカのくせに頭つかわないでくれない!?」

冴子の一喝に、諒がふっと目を上げた。

「……そうか、俺ってバカだったんだ」

「な、何言ってんの？」

「いや……そういやそうだったなー、みたいな」

そうなんだよなあ、うんうん、と諒はひとりで納得している。冴子が気味悪そうな顔でそれを見守った。

走る前にブレーキをかけるような人間ではなかったはずだ、自分は。道理でずっと何かがずれていると思った。諒は台所のドアに手をかける。

「どうせまだそんなに遠くには行っとらんだろう、あいつも。捜すだけ捜してみましょう」
「いきなり素直になったわね」
「俺は昔っから素直で前向きです。しかしそれでも見つからなきゃそれはそれまでで――」
ドアを開き、諒は言葉を呑みこんだ。
「――やばい」
「何？」
冴子が諒の肩を押しのけて居間に出る。瞬時に事情を悟った。
「ひと言くらい声かけて行きゃいいのにまったくっ」
ひとりごちて諒は風のように駆け出していく。
彩の姿は、家の中からきれいに消え失せていたのである。

けもの道、というのだろうか。細々とした坂道をずっと歩くと、のぼりきったところでは木々が多少まばらになり、荒れた地面が広がっていた。
あの屋敷からどれほど離れたか、よくわからない。足にまかせてぐるぐる歩きまわったから、直線距離そのものはあまり稼いでいないかもしれない。太陽は頭の上にある。
道端にごろりと転がった岩があった。溶岩だろうか。黒い。体重を感じさせない動きで牙は

その上に腰をおろした。

本当は、記憶をたどって戻るつもりだったのだ。あの夜彩と出会う以前に自分がどこにいたのか、それをさぐるつもりだった。そこが己の墓場なのではないかと願いもした。眠りについてしまいたかった。消えてしまいたかった。

けれどいかに切に求めても——本能がそれを裏切って何も教えようとしない。記憶はきれいに断ち切られてたぐる先もない。憶えている光景は、ただひとつ。月光の下、立ち尽くしたこの身を砕くように包むように裂くように溶かすように見つめた彩の双眸。

それ以前、自分はどこにいたのか。もしかしたら自分はあの瞬間より前に、この身体をもってしては存在しなかったのではないか？

無、だったのだろうか。

そこへ帰りたい。そこへ帰りたいのだ。記憶も身体も捨てていい。もう何も要らないから。彼女のことも何もかも消し去ってしまえ。どこへ祈ればいい。聞き届ける者があるならすべてを賭けられるのに。

自分だけでは、この身を壊す方法すらわからない。

「神、なんて……」

地面を見つめ、牙は低く呟いた。

その時はじめて、果てしない絶望が胸を襲った。恐ろしい虚空。両手で顔を覆い暗黒の淵に

彼は身を任せた。神なんて信じない。信じない。
世界なんて要らない。生命なんて要らない。
それは無意味で、無慈悲だ。なぜなら。
なぜなら。
なぜなら……自分は、ひとりだ。ひとりぼっちだ。ただひとりなのに！
（タスケテ）
言葉にならないか細い思念が火花のように胸に散る。
（ダレカタスケテ）
火花は成長し炎になる。気づかないようにずっと見ぬふりをしてきた。感じないように心を殺した。知ってしまうわけにはいかなかったから。
誰か助けてくれ……誰か手を握っていてくれ！　このままではいられない。誰か心を向けてくれ。愛してくれなくてもかまわないから。
暴走する叫び。求めても求めても決して得られないと知っているのに。もう二度と手に入ることはないだろう。自分はそれを己の手で切り捨ててきてしまった――。
その時、耳元に降ってきたのはひとつの声。
「泣いているの？」
清冽な衝撃が牙の全身を支配した。

そんなことはありえない。あるはずがない。だって、どうして。

牙は硬直した指をそっとひきはがし、震えながら面をあげた。

嘘だ。

「悲しいの？」

彩は息もきらしていない。どうやってここまでたどりついたのか。どうやってこの場所を知りあてたのか。

冷静に見つめる表情。揺らぎのない声。彼女だ。ああ、彼女だ。

「いいえ。いいえ、泣いていません」

小刻みに頭を振りながら牙は答える。

「泣いてなんか……いません。私には……涙が、ないから……」

けれど牙はそこで声をつまらせてしまった。泣くことはできないけれど。そんな方法を自分は知らないけれど。

この世界中へ大声をあげて響かせたい想いがある。

「牙が、消えてしまうと思った……」

牙の前に立ち、彩はそう言う。

「そう……願っていました。消えてしまいたかった」

「どうして？」

「……私がまだ消えていないことを……確かめるためだったのかもしれません」
「そうだね。牙は今ここにいるから」
なんてあっさりと彼女は頷くのだろう。なんて確実に。
疑いもしない。自分自身さえ己の存在を信じきれずにいるのに。その確信が強すぎて、怖かった。怖くて……しかし一方でずっと救われつづけていたのだ。何故それを認めようとしなかったのだろう。
「あなたは……あの方々の所へ戻らなければなりませんね……」
牙は静まった心で彼女の瞳を見つめた。
彩は答えない。
「夢を、見てもいいでしょうか……やりなおせると……。見えるものをそのまま受け容れることができれば、いつか……私の捜しているものも、この目に映ることがあるのでしょうか……」
来た道をたどるのではなく、違う方法で戻ることはできるのだろうか。
新しいやり方であの方と出会うことはできるのだろうか。
言葉にせず、牙は問いかける。
彩が手を差しのべた。彼女には伝わっている。全部わかっている。
この人がいればいい。

その小さな手をとり、牙は解き放たれるように岩から立ち上がる――。

「！」

牙はふりむいた。空気が破られた。何かまったく異質なものが近づきつつある。

――妖気？

自分の内の何かが勝手に動きだしている。牙は戸惑いながら視線をめぐらせる。妖気。〈妖の者〉？　何故、どこからそんな言葉が出てくるのか。

自分は一体なにを知っているのか。

林の奥に、牙は黒い影を見出した。ぎらりと光るのは緑色の眼。

諒が庭へ出るのと、亜衣が門を駆けこんでくるのが同時だった。狂ったような獣たちの咆哮に諒が顔色を変える。

「水沢君！」

亜衣が叫んだ。その亜衣を叱るように亮介の声。

「早く！」

飛びかかった一匹を亮介がコーラのボトルで叩き落とす。ギャッと甲高い悲鳴があがった。隙のできた背中を狙って数匹が一斉に亮介に襲いかかる。

間一髪で諒が亮介を朱雀剣の結界へひきずりこんだ。ばりばりと散るプラズマに野犬たちが体当たりしては落ちる。

「なんだ、こいつら!?」

亜衣と亮介を結界で護り、玄関先まで引き返しながら諒が怒鳴った。

「狂ってる……」

亮介が答える。走り通して、息が荒い。

ただならぬ騒ぎに冴子が勢いよくドアを開いた。諒が一時だけ結界を解き、まず亜衣が家の中にとびこむ。

亜衣に続こうとして、亮介がハッとふりむいた。

「諒――」

おそろしく鋭いな、と内心で驚きつつ諒は頷いてみせる。

「まずいんだ……彩がちょうど……」

荒れ狂う犬の群れ。漂うのはまぎれもない妖気。

何が目的か。

「こいつら囮かもしれないわ。できなや足止めかもしれない。彩ちゃんのほうが心配よ」

冴子が言い切った。

「行っていいわ。こいつらは絶対中には入れない。早く！」

「――」

口をつぐんだまま諒は亮介を見返る。

前に彩のオーラを追ったのは夜中だった。太陽の下ではオーラの輝きは極端に識別しにくくなる。見えるだろうか。

「行こう……」

亮介が言った。確かめるように諒が問う。

「怪我、ないか？」

「平気」

「よし」

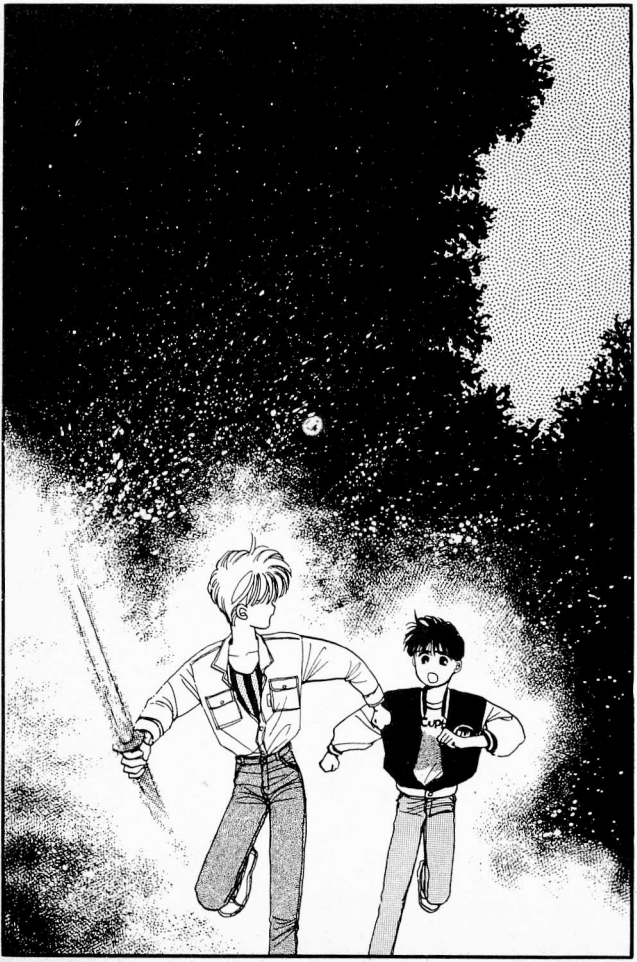
亜衣をかばいながらあの群れの中をくぐりぬけて亮介が無傷なはずはない。服は何箇所も爪の犠牲になり、手足のところどころにかすり傷が残る。しかし冴子の手に頼っている暇はなかった。

「任せた」

冴子に短くそう言うと、諒は亮介とともに走りだす。冴子は間をおかずドアを閉め鍵をかけ、亜衣をふりむいた。

「窓という窓ぜんぶ鍵かけて。バリケード作るわよ」

一体何匹の犬が集まったのか、もう見当もつかなかった。深く光る朱雀剣を前にかまえて諒



が群れの中を突き進む。

妖者が人間以外の獣に憑くことはごく稀にあるのだが、これらの犬どもがすべてそうだとはとても思いがたい。結界に阻まれて悲鳴をあげるこの連中は生身の動物だ。こういう相手が一番厄介なのだ、と苦々しく諒は思う。そうそう無闇に殺せないではないか。

これは洗脳、あるいは催眠だ。黒幕の妖者は別のところにいるはずだ。群れから伝わる妖気が漠然としてつかみどころがないのはそのせいだろう。

「亮介」

諒が呼んだ。プラズマに守られながら亮介は苦しげに顔をしかめている。

感覚を必死に研ぎますと、諒のオーラと犬どもの妖気の両方が強烈な刺激となって流れこんできて、いやおうなしに混乱してしまう。

「この奥だ……まっすぐ」

けたたましい騒音の中から小さな囁き声を聞き分けるようなものだ。極限まで感覚を集中して、なんとか手がかりをとらえる。諒がそれに従って再び走りだす。

亮介は唇を噛みしめ、諒のあとを追った。頭痛がしてきた。

(こんな時に)

術力中和の能力がめざめて以来、感覚のほうも昔よりは安定してきていた。しかし、もともと強すぎる感覚をさらに意図的に高めるとなると——。

「ちっ」
足元にまとわりつく雑種犬を払いのけて諒が舌打ちしている。
山奥へ入りこみつつある。亮介は傾斜の上のほうをふりあおぎ、目を細めた。きらり、と何かが光るような印象があった。
「？」
額を押さえながら亮介は目をこらした。
「諒……」
「え？」
「彩ちゃんは、術者なんだろうか」
諒が足を止めた。
一瞬の間をおいて、強くかぶりを振る。
「まさか」
確かに、そんな予兆は今まで一度も見えていない。亮介もそれ以上は追及せず、林の中を指さした。
「上だ」
進むうちに、犬の数は少しずつ減っていった。殺してはいない。プラズマに撃たれて体が痺れ、ぽつりぽつりと脱落していくのだ。あるいはショックで正気に戻るのだろうか。

白樺の点在する林を諒は駆け上っていく。

彩と牙は出会っただろうか。牙はこの犬たちと関わっているだろうか。吉と出るか凶と出るか。牙が彩を守りきるような奴でなかったら——その時はなんとしてもこの手でぶった斬ってやる、と諒は胸の内で呟く。

しつこくぎゃんぎゃん吠えながらついてくる連中があと十五匹ほど。

「やかましい貴様らっ」

向きなおって諒は一気に朱雀を振りおろした。雷鳴に似た音があがり、閃光が円を描いて周囲を白く灼いた。

電撃にうたれて野犬たちが哀れっぽい鳴き声を発した。地面に転がり、のたうちまわっている。

「恨まないでほしいんだな」

これでも精一杯、情けはかけているのだ。追っ手のなくなったところで諒はとりあえず朱雀を消し、亮介に目をやった。ふと息を呑む。

「おい——」

「え？」

声をかけられて亮介が見上げる。途端に目の前がまっ暗になった。身体がバランスを崩し、諒の腕に抱きとめられる。

「あ……あれ？」
「あれ、じゃないでしょうが」
頭がくらくらしてなんだかよくわからなかった。何度かまばたきして、亮介はようやく状況をのみこんだ。
「あ、あ……ご、ごめんっ。ごめん、大丈夫……」
なんとか自分の二本の足で立つことには成功したものの、頭痛とめまいはなかなか収まらない。久々だったので、かえってショックが大きかった。
「いや、俺のほうが悪かった。集中させすぎた……」
低い声で諒が言う。——と思ったらその直後。
「馬鹿者っ！　キツかったらキツいとはじめから言えばよかろうが、このたわけものっ！」
「そんな場合じゃないだろ!?」
いきなり頭から叱りつけられて、思わず亮介も怒鳴り返していた。
「場合もくそもないっ。おまえにここで倒れられたら俺はどーしようもないぞ、はっきり言ってっ。おまえだけが頼りなんだからっ」
「——」
そう言われると……確かに言い返せない。
しかし、倒れるつもりはなかったのだ。彩のところへたどりつくまでは絶対に、我慢できる

と思って……。

「大丈夫だよ……行こう」

頭をひとつ振って亮介は歩を踏み出す。

「走らなくていいからな」

「馬鹿！　急がなくてどうするんだよ」

彩に何が起きているかわからないではないか。諒を睨みつけて、亮介は無理やり走りだそうとした。

と。

目指す方角に——かっ、と燃えあがったのは強力なオーラ。諒の感覚でもしっかりととらえられるほどに。

「なんだ!?」

諒が鋭い目を上げる。

「……妖気じゃない……」

呟くように亮介が言う。妖力じゃない。あれは術力の気配。

何があったというのか。

「よう。ずいぶん捜したんだぜ」
緑色の眼を牙に向け、その黒い犬は人の言葉を発した。不自然で、聞く者に不快感を覚えさせる声だ。
身体はがっしりと大きく、引きしまって敏捷。
――低級妖者か。
「私を……？」
彩を背にして、牙が問う。
「正確には、ちょっと違うねえ。そっちのお嬢さんのほうだよ」
品のない語調。
「あんたがいきなり実体化したもんだから、こっちまであおりを食らって目が醒めちまったじゃないか。ところがいくら捜しても手ごろな器がありゃしない。仕方ないわな、こんな山奥じゃなあ。不本意ながらこんな下賤な身体を利用したってわけだがね、嬉しいねえ、あんたの気配を追っかけていったらちょうどいい器があるじゃないのさ」
「待て……何を知っている？」
牙は顔色を変えた。この妖者は自分のことを知っている。
「おやおや。嫌だねえ、すっかり骨抜きかい」
すたすたと歩み寄ってきたと思ったら、黒犬は牙の膝にあたる高さからつらつらとその姿を

見あげた。

「これじゃ仇を討つ意欲も失せちまうね。つまらんねえ、もう何百年たったのかも知れんが」

やけに馴れなれしい。牙は仇、という言葉に心をとめた。

彩は動じる様子もなく、ことの成り行きを見守っている。

「最期の時はひどかったねえ……このへん一帯も全部、どこもかしこも戦場だった……あれでもうすっかり片がついたと思ったんだが、あんたが今こうして実体化してるってことは、あんたの主さんどうやら御健在だね。ちぇっ、つまらんねえ。また同じことのくりかえしかい。まあ俺は暇をもてあますのにも飽いたがね」

「――頼珂？」

知らぬはずの名が、ぽつりと口をついて出た。

目の前の黒犬がぱたぱたと尻尾を振って笑う。

「いい調子だね。そうだよ、そう」

頼珂。

……憶えている。あれは最後。

本陣へ伝えねばならぬことがあった。この山へ入ったとき、敵方の妨害にあって戦った。その時の相手の名が――頼珂。

勝てる、はずだった。いや、勝っていた。あと一歩というところで。

あと一歩――そこで、最期の時が来た。何もかもが終わり、自分も頼珂も……。

（あの方は）

牙は目を瞠った。

そうだ、あの方は自らを封じられたのだ。すべてと引き換えに。遠く離れて、自分はそれを知ったのだった。何もできなかった。守ることもできなかった。

すべてを終わらせるために。

「俺も、もうひと働きせねばなるまいよ。ああ、面倒くさくて仕方がないね。まあとりあえずは、そのお嬢さんの身柄をいただかないことにははじまらんね。これだけおいしい器も珍しいんじゃないかねえ。俺はついてるよ」

牙の瞳に険しさが宿った。

「それは許すわけに行かぬ……頼珂、命惜しければ手を引け」

「嫌だね。こちとら命なんか惜しくないのよ。そもそも骨抜きの〈使〉ごときに負けをとれば来世までの恥よ。ふん」

鼻で笑って頼珂はゆっくりと歩きだした。牙を中心に、半円を描くように。

「術者の連中には足止めをくらわせておいたよ。まあ長持ちするとも思えん足止めだが。俺は催眠暗示はあまり得意じゃなくてな」

「頼珂」

「おいおい。あんまりがっかりさせないでくれないか」
黒犬をとりまく空気が不意にがらりと変化した。
殺気、だ。
何かがまだ不鮮明だ。一番肝心なことがつかめない。牙は彩の盾となって立ち尽くし、頼珂の動きを目で追った。どうすればいいのか。どうすれば。
「牙」
彩が呼んだ。
ふわりと……牙の身を包みこむのは暖かいオーラ。
これは信頼。ふりむかなくても牙にはわかった。これは彩の心。その強さとその聖性は——かつて己を支えていたものと同じだ。あれは。
ずっと自分を包んでいた。惑うことなどあろうはずがなかった。
(あれは……あなただ)
求めつづけていたもの。その答えは。
(どこにいるのですか)
歓喜に似た情念が全身を埋めつくした。体中が熱く燃えあがり、沸きたつのはさかり狂うオーラ。
答えはここにある。

（どこにいるのですか伽羅王）

見えた！　――牙は叫んだ。とうとうつかんだ。

フィードバック。安全弁は外れた。もう何もこの身を縛りはしない。覚醒せよ。解放せよ。

恐れるな、時は来たのだ。

喉を鳴らし頼珂がとびかかる。ざっ、と鋭い犬歯が牙の胸元を切り裂いた。傷は残らないが痛みは走る。しかしその痛みすら今は快楽への序章だ。戦うために己は生まれた。戦うために。

昇りつめる――。

「！」

限りない昂揚に牙は身を委ねた。

溶ける。

全身を構成する分子が変質を開始した。この身をかたちづくるのは有機体にあらず、術力の分子だ。自分は知っていた。ずっと長いこと、確かに。

もっとも戦闘に適した形態へ。組み替えは瞬時に完了した。

そこに生まれたのは、白銀の毛に覆われた美しい成犬。

「気持ちがいいねえ、実に気持ちがいい」

頼珂が心底楽しげに称賛する。

「これで五分五分だね。あんたのそういうとこが俺は好きでねえ」

変形（メタモルフォーゼ）。

だから、実体など意味を持たなかったのか。同等の条件で頼珂と対峙（たいじ）し、牙はもはや言葉など要しなかった。戦うだけだ。ただ、戦うだけ。

守るべきものがあるかぎり。

牙は地面を蹴（け）った。唸（うな）り。風が鳴る。すれちがいざまに目にもとまらず展開される攻撃と防御。

互いにとって、互いの身体そのものが武器となった。血は流れない。頼珂が牙の喉元にくらいついて妖気を流しこみ、牙はそれを振りほどいて頼珂の腹に爪痕（つめあと）を灼きつける。一撃一撃が閃光（せんこう）のように加えられ、体勢はぐるぐると入れかわる。

ふっ、と飛びのいて黒犬がぼやいた。

「面倒くさいねえ」

すらりと立ったまま銀白色の犬は応じない。

「つけは払わんといかんなあ。なんたって前の時は、俺にとどめ刺す寸前にあんたときたら消えちまったからねえ。器はぼろぼろだってのに生殺しだ。あんまり馬鹿馬鹿しくて俺はふてちまったよ」

かさかさと前足で土を掻（か）いて頼珂は言い、それから不意に緑色の両眼を異様に輝かせた。

かっ、と開いた口から放たれたのは強力な光の塊。
背後に彩がいる。避けることはせず、牙はその光へ向けて跳躍した。
妖力の塊は前足の一撃で崩壊し、そして同時に頼珂の首筋には深い傷が残った。爪にこめた術力を一点に集中してうちこまれたのだ。
「ちぇっ。つまらんなあ。ちぇっ」
それほど落ちこんだ様子もなく頼珂は呟く。
そこへ、枝をかきわけて彩の後方から諒が現れた。しかし二頭の獣の戦闘を前にして言葉を失う。
「……牙……？」
遅れてたどりついた亮介が目を瞠った。えっ、と諒が聞きかえす。
彩は動いていない。おそれもせず、嵐のようなぶつかりあいをただ見守っている。牙と彩の間に厳然として流れるのは交流のオーラだ。介入を許さない。
これでは手を出せない。
何度目かの激突があり、二匹はそれぞれが離れて着地した。外から見るかぎり牙はまったくの無傷だ。黒犬のほうは体のところどころをえぐるように傷つけられ、そろそろ足元が危うくなってきていた。実力の差ははっきりとしている。
牙の戦法はまるで容赦がない。冷徹に、正面から致命傷を狙う。なぶることはしない。

身構えて、牙はやや間をおいた。

「ふん」

頼珂が低く笑った。

「実はだね、もう俺はとうに飽いちまってるのさ……五百も一千も歳を数えるなんざ……俺はもう本当に飽いちまったよ……」

白銀のけものは身をひらめかせた。

一閃。懐にとびこむ姿も見えなかった。心臓を貫かれて頼珂はさらに笑った。

「やれやれ……あんたの主は……俺の性格も計算の内かい？」

牙が何を答える間もなく——目を灼くような光が破裂して頼珂は九百年来のこだわりを解消し、霧のように失せたのである。

Ⅳ

地面に転がったままの「玉」を諒は拾った。来るまでもなかったか。
彩の腕に抱きしめられて、牙は人の姿への変形を果たしていた。言葉はない。何もなくとも……通じあう空気。
お姫様には騎士がついているってか、とふたりを見やって諒は苦笑ぎみに考える。お兄様の出る幕なんてないのだ。それでいい。
「大丈夫か？」
亮介をふりかえる。大きく息をつきながら亮介は諒を見上げた。
「大丈夫じゃないよ。ものすごく驚いた」
「俺は健康状態を聞いておるんだが」
本来の姿に戻って牙はゆっくりと立ちあがる。本来、と言ってもこれは最も己の本質に近いというだけで、変えようと思えば顔も服装も好きなように変えることができる。それが〈使〉

の特質であり、そして自分は——。

「牙」

はじめて聞く声が牙の胸を射抜いた。

知っている誰の声とも違う。誰とも……違う……。

林の奥。落葉樹のかげ。

亮介が目を円くし、諒が露骨に嫌な顔を作った。

牙の瞳には何も映らない。何も。歩み出てくるその人影。

光のあたる所まで足を運び、そこで立ち止まる。彼は——この人は。

まだ若い。ようやく少年を脱したばかりの、完成されつくさない年代。自分よりも華奢な体に、負いきれぬほどのものを負って、なおも——いや、それがゆえに輝きを高める。髪は漆黒。光に透けて色を変えた双眸。

おだやかな表情。高貴で、鮮烈。冷たいほど澄んで、けれどその奥に何もかも包みこむような広がりを暗示して。ああ、何も変わっていない。九百年の時を超え、まったく新しい姿をとりながらあなたは……何も変わっていない。

吸いよせられるように牙はまっすぐに彼に近づいた。彼は待っている。

笑みもせず、ただ見つめている。

あなたに置いていかれた者どもの悲しみを、あなたはどれほど知っていただろう……。

彼の目前まで歩みより、そして牙は崩れおちた。彼の足元に跪き、頭を垂れ、凍りついたように動かなかった。

諒も亮介も圧倒されたまま声も出せず、その光景を見守った。ひどく神秘的な視線を牙の背に落とし、手を差しのべることもせず、忍は長いことそこに立ち尽くしていた。

屋敷に殺到した野犬の群れは案の定、頼珂の消滅と同時に正気を取りもどし、ちりぢりに去っていったという。あれだけの数を集めたことは称賛に価する。なかなかいい根性してたよこいつ、と「玉」を忍に手渡しながら諒は呟いた。

しかしそれにしても、忍は一体いつからどうやってこの地へ来ていたのやら。

「なんかいろいろ釈然としませんよ、俺は」

憮然としてみせる諒に、忍は軽く笑うだけだった。

〈妖の者〉が〈影〉を持つのと同じような意味で、〈空の者〉は〈使〉を持つ。伽羅王としての忍は約二十年前に転生を果たしたが、その〈使〉である牙は前の大戦で伽羅王が滅したとき同時に消えたまま、今まで実体化していなかったのだ——と彼は説明するのだが。

「それはわかる、それは一応わかるけどなー、そしたらなんで牙がみつかった時点であんたが出てきて全部説明しなかったのかわからんぞ」

「その時点では、僕自身が牙のことを思い出していなかったんだよ」

居間のテーブルで諒に正面から責められて、忍はあっさりとそう答えた。へばりつくように忍の隣の椅子を冴子が占領し、亮介と亜衣は深入りしないようテーブルの隅のほうで見物に徹している。期せずして、一同を前にした忍の尋問会という様相になってきた。

牙と彩は例によって、黙然と床に座りこんでいる。

「それ変じゃなーい？　するとあんたがわざわざこんな変な場所選んで俺たち派遣したのって全然牙と関係なかったわけ？　そんな理屈、通用しませんって」

「意図は、あったよ。しかしそれがどういう意図か訊かれても答えられないな」

「なんだそれは」

「何が起こるかなんて僕は知らなかったし、これからもそうだよ。知っているのは伽羅王だ。そちらに訊いてくれないか」

「詭弁だっ」

諒は声をはりあげる。しかしそれは結構真実かもしれない、と亮介は妙に納得していた。何もかもわかっていて計算ずくで動くというよりは、インスピレーションのまま動いてみたら結果的にすべてうまく片づいていた、という姿のほうが忍らしい気がする。

（な……なんか、いかにも無責任……）

どっちにしても問題がないわけではない。亮介はひとりで嘆息した。

「別に信じなくてもかまわないけれどね……ところで、そろそろ僕のほうの話をさせてくれてもいいんじゃないか」
　こだわらない表情で忍がそう切りだす。諒がわずかにたじろいだ。
「そんなもんがあったのか」
「用もないのにわざわざこんな所まで来ないよ」
　しれっとした言葉。用もないのに、とは何事であろう。これだから信用されないのだ、と苦々しく諒は思う。
「諒」
　忍がテーブルに片ひじをついて目を上げる。諒は思わず身構えた。
　なにか嫌な予感がする。
「なんでしょう」
「仕事だ。明日、広島へ戻る足でそのまま現地に向かってもらう」
　……実に楽しげに、忍は休暇の終結を宣言したのであった。

　日射しはやわらかい午後のものに変わっていた。夕刻が近づきつつある。
「……じゃあ、彩ちゃんは術者（じゅつしゃ）なんですか？」

亮介が尋ねる。林の中。ゆっくりと足を運びながら忍は頷いた。
「彼女は未知数だよ。潜在的に大きなものがあるが、まだそれが顕れる時期ではない。諒の力が『動』だから、彼女は『静』の方向へ行くように僕は予測しているけれどね」
忍と一対一で話をするなんて、これがはじめてだ。
かなりの勇気をふるって話しかけたのだが、意外なほど和やかに忍は応じてくれた。威光めいたものが今はかげをひそめ、十九歳の若者らしい親しみが見えかくれするように思う。そういえばこの人は大学生だったっけ、と亮介はふと思い出していた。いつもこんな風に並んで歩けたらいいのだけれど……。
「俺……それでいうと『静』のほうに入るんですよね」
「そうだね。亮介の能力は特殊なものだから、本当はどちらとも言いがたいよ」
「なんだか俺、自分の身も守れないような中途半端な力しかなくて……」
もどかしげな亮介の言葉に、忍がふりかえる。
「君はそれでいい。攻撃力を得ようなどと思わないことだ。妖者相手とはいえ戦いは殺し合いだよ。君の強みは、その殺し合いを知らないところにある」
忍の声は深くて、感情を読みにくい。
けれど……ためらいもなく今の自分を肯定してくれている。認めてくれている。
「それぞれが、それぞれの役目を果たせばいいんだよ。まず、自分を知ることだ。自分にでき

ることをね」
そう言って、忍は穏やかな微笑を亮介に向けた。
「はい……」
亮介はこくりと頷く。
屋敷のほうから近づいてくる人影があった。——牙だ。忍が足を止める。
「もう戻るんですか？」
長居はしない、と忍は言っていた。牙は忍とともに東京へ行くのだ。亮介を見おろして、忍は少しいたずらっぽい表情になる。
「これ以上諒に責めたてられたくないからね、僕としても」
どういう手段で東京まで戻るのかは不明である。神出鬼没を絵に描いたような人だなあ、と亮介は息をついた。
「次は東京で……そうだな……すぐに会えるよ」
忍が言う。思いついて、亮介は尋ねてみる。
「次にいつ会えるかなんて、わかったりしますか？」
きらりと瞳をきらめかせて忍が笑んだ。さっきの諒との問答を思い出したのだろう。
「わかることもあるよ」
「やっぱり」

なにがやっぱり、なのか亮介は言わなかった。
「それじゃ、俺、屋敷に戻ります。また今度――牙も」
小さく頭をさげて、亮介はぱたぱたと走っていく。
見送る忍の隣に、牙が並んだ。影のように。
しばらく忍は無言だった。亮介とのやりとりを反芻するように――遠い目をしてたたずんでいる。
「……待たせてすまなかった」
沈黙の後に彼が口にしたのは、それまでの甘さを拭い去った硬質の声。
目を伏せたまま牙が問う。
「戦を……起こすおつもりですか」
そうでなければ己を必要としなかったはず。
現にこれまでの時間、自分は必要とされていなかったのだ。それを何故、二十年経った今になって。それは実力行使に出ることへの決意を意味するのか。
「今度こそ終わらせなければならない。手段は選ばない」
「犠牲は免れぬでしょう……彼らの内には」
「やむを得ぬ」
迷いもせず忍は言う。

それならば従うまでのこと。牙の内にわだかまるものは何もない。
「忍様、とお呼びすればよろしいのですか」
「そうだな」
彼に仕え、今まで一体いくつの名を呼んできたことだろう。
長い長い大戦だった。いくつもの時をくぐりぬけ、しかし——目に映るのはいつもいつもただひとり、彼の姿だけだった。
「今生(こんじょう)は、どちらの家に？」
最後にもうひとつ、牙が問うた。
片手を差しのべ、短く忍が答える。
「七瀬(ななせ)に……。他はすべて絶えた」
その手に自分の手を重ねたと思うと、牙はフッと実体を失った。忍の掌(てのひら)には水晶に似た小さな輝きが残った。

五日目——さよなら、またね

牙がいなくなった後も、彩には何も変化らしきものはなかった。
昨日のふたりの別れも実にあっさりとしたものだった。互いに、これを別離だなどと思ってもいないのだろう。
「あれくらいわかりあってたら何も怖くないだろうなあ」
ばたばたと荷造りをしながら亜衣が言った。昼の電車に間に合わせなければいけない。
「距離とか時間とか関係ないのよね、きっと」
「まあ、できるだけ頻繁に会わせてあげたいけどね」
冴子が答える。スーツケースをひっくりかえしている。来る時には収まっていたものが、帰る段になって入りきらないのである。女の子部屋では嵐が起こりつつあるので、現在彩は亮介と一緒に居間に避難させてあった。
「忍様がそのあたり配慮しないはずないし、牙なら東京・広島間の往復くらい簡単にできるで

しょ。問題ないわね」

実際、彩は術者としてはまったくの無防備なので、忍は彼女をガードする手段を講じねばならない立場にあるのだ。彼の手足である牙が彩のもとへ遣わされないことはあるまい。

「牙って公私混同じゃないのかなー」

「言えてるわよー。おいしい立場よね、あいつ。ああっ、やっぱりパジャマが入らないっ。なんでなんでどうしてなの」

おーいタクシー呼ぶぞー、と諒の声が上ってくる。

「ピンチだわ」

「まだ時間あるわよ、なんとかしましょっ」

彩の存在がなければ、牙は過去にしがみつくばかりで『忍』という現在に気づかなかっただろうと——そして彩によって牙の意識が確立されなければ忍は牙の存在を見落としていたかもしれないと——そんなことを忍は話して行った。本当かどうかはわからないが。

「牙にとって忍様の存在は特別だからそれはちょっと置いとくとして、牙と彩ちゃんってお互いしか必要としてないのよね」

しみじみと冴子が言う。

孤独だから信じあえるのか。信じたら他に何も要らないのか。それは当人たちだけが知っていることなのだろう。

「ちょっとだけ羨ましいかも」
ポツリと言って、亜衣が目を上げた。ねっ、と念を押す。
「羨ましいというか……」
冴子は宙を仰いだ。
「あそこまでじゃなくても、もう少し心の平安が欲しいわ」
「冴子さんぜいたくものー」
「なによなによー、亜衣ちゃんのほうがよっぽど人のこと言えないじゃないのよー」
恨めしげな目を見あわせて、それからふたりの美少女は同時にふかぶかとため息をついた。
「……あたしたちってお互い……」
「苦労するわよねえっ」

「亮介君、両手に花ですねえ」
駅のホームで、諒はそう言って笑った。
「東京経由で戻っても、そんなに変わらないんじゃないか？」
諒と彩はわざわざ下りの電車に乗るのだ。亮介の問いに諒はひらひらと手を振った。
「気分の問題よ。東京駅でお見送りなんてされたら俺は泣いてしまうですよ」

「よくわからない……」
未練が残るでしょ、と諒が言う。
上り電車がホームに入ってくるほうが早かった。慌ただしく三人でシートを確保して、それから亮介は窓を開けた。
彩は静かだ。どこもなにも変わらない。亮介は身をのりだして彼女の顔をのぞきこんだ。
「彩ちゃん、また会おうね」
目を伏せて、彩はかすかに頷く。亮介はその隣の諒に目を移した。
今度はいつ会えるか、わからない。
「電話、しろよ。たまには」
「音信不通のほうが再会のとき感動が増したりしないか？」
「ばかっ」
「うそうそ」
ベルが鳴りはじめる。
窓枠に手をかけて諒がふっと表情をあらためた。どこか優しげで、少しだけ淋しい——。
「来てくれてありがとう。嬉しかった」
亮介が言葉をつまらせる。
「そこの人。あたしたちは？」

シートに座りこんだ冴子が冷ややかに声を上げた。にっ、と笑って諒は窓から手を離す。
「嬉しかったですよ、もちろん」
「心がこもってない」
「こめてないもん」
「あんたねえっ」
列車がホームをすべりだした。
「嘘だってば」
風に消される諒の呟き。
髪がなぶられる。窓から顔を出して亮介は遠ざかるふたりを見つめた。
ふっと目をかすめたのは彩の微笑。
(え!?)
列車が加速してホームの姿は見えなくなった。確かめられなかった。離れてゆく。届かない。
諒は気づいただろうか？　諒には——伝わっただろうか？
わからないけれど。
信じていたい。いつかきっと誰もが幸せになれるなんて。馬鹿かもしれないけど、信じていたい。

春の空気が亮介の髪を流していく。

探さなければ。何かが動きだしている。何が自分にできるのか、少しずつ探していかなければ。

大丈夫。ちゃんとみつかる。そう励まして前へ向かう力をくれる声がある。

それから。それから……。

ゆっくりと亮介は顔を上げて、そしてはっきりとその目で見た。自分の足元から真っ白に広がった限りない未来を——。

——おわり——

あとがき

な、なにやらお久しぶりであります。オーラバスターの第三作をお届けします。

前作『セイレーンの聖母』が三月発売だったので実に五か月ぶりの新刊ということになりますが、えーと……夏発売のくせに春休みの話だったりしますが、えー……なにはともあれ、ご意見ご感想、ご叱責ご質問、バカヤローなんで×××が出ないんだ、その他もろもろ、お手紙をお待ちしております。（けっこう逃げ腰だなあ、今回）

今回の執筆はえらく大変でしたー。何が大変だったかというと、なんとしたことか、諒と亮介の精神状態を若木自身がどっぷりかぶってすさまじく落ちこんでしまったのであります。げーん。

駄目だっ、こんなんじゃ駄目だっ、とか言って書いても書いても泥沼地獄。没原稿だけが増殖して山になっていく。のたうちまわって各方面に泣きついて迷惑を思いきりふりまいた気がする。

被害者の方々、す、すみませんでした。

おまけに「さあ〆切だっ！」の直前に風邪ひきこんで寝こむ、というワザを二回もかましたのは私です。（おや？　さあ〆切だ、を何回やったんだろう私は……）これは斎伽の祟りか、あるいは里見の怨念か、とマジで考えてしまったよ私は。（和泉？　いえ、彼は裏工作なんかしない良い子だから……単に騒いでただけです、「出せっ!!」って）

いや、だからっ。怒らないでくださいっ。言いたいことはわかるけどね、贔屓じゃないってば。本当だっ。いかに待遇に差があろうと、それがすなわち愛情の差だなんて思ってはいけないわ。たまたま今回こういう話になっただけだということで。

うーん、私は何をこんなに必死になって言い訳をしているんだ？　しくしくしく。次は出るからさ。

実を言うと、書いてる途中でふっと弱気になって、つい某氏に「……ど、どうする？　ちらーっとでも出てみる？」と訊いてみたことはみた。しかしだ、「必然性もないのに出るなんてただの笑いものじゃないですか。絶対に嫌ですからね。電話なんかしても出ませんからね。気分転換なんかに使わないでくださいね」と目いっぱいプレッシャーの塊を投下して逃げたのは、誰とは言わないけど、誰とは言わないけどっ、里見っ！　きさまだっ!!　プライドの高い男はこれだから許せない。なんでこんな奴ばっかりなんだ。ぶつぶつぶつ。

亮介って幸せな奴だなあ。ちぇーっ。

気をとりなおして、もう少し真面目なあとがきを書きましょう。なんか回を追うごとに言葉づかいが悪くなっていく若木……。これだから「若木さんは男ですか、女ですか」というお手紙が何通も来るんだな。（そういうことは深く考えないでいいんですっ）

とりあえずこのシリーズについては「昨日の優遇今日の冷遇、今日の主役は明日の脇役」ということになりそうで楽しいです。作者は鬼だな。ふふふふふ。それからどうも……ずいぶん長くなりそうで怖いです。確か一冊目を出すとき編集のK氏に「長くなりそうだね、これ」と言われて、

「どんなに長くても十巻にはなりませんよっ。大丈夫ですっ」

「それだけで充分長いよ……」

という会話をしたような気がするんですが、ちょーっと十冊どころじゃ終わらないよー。本人も唖然とするばかりであります。

こうなったらじっくり腰すえて書くしかありませんが……よ、よろしかったらおつきあいくださいまし。若木は燃えております。

一方でそろそろ別の話も出したいなー、なんて言うとまた怒られそうだなー。次の次あたりならいいでしょ？　現在はいろいろと準備中だったりします。またよくわからんものを書くと思うので、気が向いたら読んでやってください。オーラバスターにとっても、いい意味で刺激

にしたいです。急ぐのはよくないし。

あっ、そういえば今回の話、書くまでは諒の過去編になるかと思っていたんですが、フタをあけたら違ってたという（誰のせいだ、誰の）。忍と諒の出会いはまた別の機会に必ずや書きますので、それまでおあずけです。これは外伝だな。

ところで『セイレーンの聖母』は反響がすごかった。何がすごかったかというと、あとがきで「諒が一番人気」と書いたことに対する反論がすごかった……って、あれ？　なんか違うかもしんない……。（いや、本文に対する感想もちゃんとたくさんいただいたんだけどね、うん）

とにかく「諒ちゃんの出番がないっ!!」という声と「なんであんなバカが一番なんだ!?」という声が両方から届きまして……特に希沙良と十九郎のファンの方々が「人気順位に名前も出してないとはゆゆしき事態」とお叱りのお手紙をどかんと下さいました。ひえー。

ま、要するにあのあとがきを書いた時点では諒以外の六人、どんぐりの背くらべ状態でほとんど差がなかったわけですが——現在は諒と六人の間がぐんと縮まって、さらに里見と和泉がタッグを組んで追いあげまして、完全に混戦状態で私にもよくわからんです。ダブルヒロインもそれぞれに好かれていてありがたいです。ただ、最近は「忍のことがどうにもわからん、あいつは嫌いだ」という手紙が増えましたー。そりゃそうだわ。（笑）

質問があったので若木のことを少し。

何を用いて小説を書くか、ということなんですが、若木の場合は手書き＋ワープロです。大学ノートにシャープペンシルで下書きをして、それをワープロで清書するわけです。二度手間だってよく言われるんですけどねー。だってノートじゃないと学校で書けないじゃないですかっ。

基本的にＢＧＭは必需品です。気分によっては音楽をカットすることもありますが。しかし私の生活から音楽を取り去ることは不可能だ。よく聴くのはロックアイドルクラシックの、ミーハー路線です。なんたって愛読書がロッキングオンジャパンと月刊明星だ。

そんなわけでおススメのテープを送っていただいたりするのは大変喜んでおります。喜んでるけど……あの、他にもなんかすごくいろいろもらってしまっておるのですが……ろくにお礼もできなくて、本当に本当にごめんなさいです。ついつい甘えてしまうけど、本当は読んでもらえるだけで充分に嬉しいからね。無理だけはしないでね。

……などとしおらしいことを言っていながら、もらえるものはなんでももらう図々しい奴が若木である。だって嬉しいじゃーん。（しょーもない奴っ!!　所詮この程度なのね……）

では前回にひきつづきキャラクターの出生にまつわる話ですが。

実は忍と亮介は大誤算コンビであります。オーラバスターの原型にあたる話というのがあり

まして、この二人にあたるキャラ（名前が違うんですな）も出ているんですが、それによると忍はもっと人あたりよくて温和で自己犠牲的、亮介はもっと攻撃的で戦闘的な奴でなければいけないのだ。想像すると怖いけど。なんでこんな性格悪い奴とかこんなにおとなしい奴になってしまったかというと、それは名前の誘導にほかならないのであった。

あれは忘れもしない一九八九年五月五日は子供の日、受賞第一作のことでうんうん悩んでいたら、すとんと三文字、斎伽忍という名前が出てきてしまって、その三文字見た瞬間、こいつの外見性格もろもろの設定が全部決まった……というのは前にも書きましたな。

ところが若木には「よく名前に使ってしまう漢字」というのがあるのですが、この三文字のうちにはそれがひとつもなくて、なんか自分の作ったキャラクターという気がしないし、なによりも性格がとんでもなく悪いし、「使いたくないなあ、こいつ」と私は強く願いまして（当時だよ、当時）見なかったフリして逃げようとしたのであります。——しかし忍様は、いやはや忍様は自己主張が強かったっ。気がついたら忍様はちゃっかりシリーズを背負ってて、『歌姫』が雑誌に載り、『天使』がデビュー作になっていた。忍様はスゴい。

で、斎伽忍と三文字書いた直後、反動のように「よく使う字」だけで書いたのが崎谷（さきや）亮介の四文字です。一発で気に入って「よし、これだッ」みたいな。さすが主人公だ。

しかし亮介も、彼の名前からは暗くて眼鏡かけてて背が低くて、というイメージしか出てこなくて、しょーがないからそういう奴にしたという。おかしいなあ。今となってはそれで良か

ったと思ってるけどね。

てなわけでこの二名の誕生は同時だったわけですが……すると残るはあと二名ですね。しつこいけど次回まわしだ。つづく。

今回のあとがきは短くまとめるつもりだったのに何をだらだらと書いているんでしょう私は。困ったなあ、これじゃ前回と変わらないよ。

とにもかくにも、編集部のKさま（今さら名を伏せても、わかる人にはすぐわかる……）には大感謝であります。感謝の念が原稿のスピードに反映すれば文句なしなんですが——などと自分で自分の首しめてどうするんだ!?　こ、今後ともよろしくお願い致します。

それから杜真琴さま、今回も本当にお世話になりました。ありがとうございます。ちょっとお祝いが遅くなりましたが、初コミックス刊行、おめでとうございましたっ！　やっぱり和馬君が大好きです！（もはや完全に単なるファンと化している若木……こんなことでいいんでしょーか？）

それでもって前田さん……また〆切が一緒でしたね。今回は私の負けですね。しくしく。（前回は『セイレーン』がタッチの差で『冥界の門』より早かったのだ）次回は頑張ります——なんつって、我々はなにを〆切で遊んでいるのでありましょうか。うーむ。

そして誰よりも、読んでくださった皆様に、目一杯力一杯のありがとう、です。

ではまた、次の本で。

若木未生

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ツ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ。射手座、Ａ型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年４月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。趣味は絵を描くこと、コンサートに行くこと。Ｎ響と森高千里とユニコーンが現在のお気に入りで、自らをミーハーと断言する。尊敬する人物は、筒井康隆。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』がある。



十字架の少女

COBALT-SERIES

1990年８月10日　第１刷発行
1993年３月20日　第12刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社　集英社

〒101-50
東京都千代田区一ツ橋２―５―10
(3230)６２６８(編集)
電話　東京(3230)６３９３(販売)
(3230)６０８０(制作)

印刷所　凸版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1990

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611443-7 C0193

コバルト・ノベル大賞
募集中!

〈入選作〉 正賞の盾と副賞100万円

〈佳作〉 正賞の盾と副賞50万円

〈選考委員〉 岩館真理子／菊地秀行
高橋源一郎／氷室冴子 (50音順・敬称略)

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。

この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売!

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。